

川柳塔

昭和五十九年十二月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷六九十号



日川協加盟

No. 690

若柳潮花追悼号

十一月号

60年1月から

本社句会の会場が変わります

なにも会館改築工事のため60年1月から本社句会の会場が左記に変わります。

メンズファッションセンター（MFC）3階

大阪市東区内本町1-1

電話（06）941-1918

地下鉄谷町線4丁目下車（2番出口）谷町3丁目交差点南西角

開催場所附近見取図



会なお旬会日は原則として従来どおり毎月7日ですが、会場の都合により変更されることがあります。予告にご注意下さい。

川柳塔社

料理がいきる
辛口の本格派

伝統の味を贈りものに……

菊正宗



神戸・灘

菊正宗酒造株式会社

日本酒で乾杯！

川柳で「素顔の中国」を

西尾 栞

『川柳の同人グループ「川柳塔社」』
本部・大阪市阿倍野区、西尾栞(しおり)
主幹』二十四日、国内の川柳グループとして初めての吟行のため中国を訪れる川柳という庶民の目を通じ、中国人の素顔を描写。帰国後同人誌「川柳塔」で特集する。

川柳塔社は大正十四年に川柳作家の麻生路郎(四十年死去)が創設、現在同人は全国に約四百五十人、月刊「川柳塔」を発売している。戦前は中国、戦後はハワイを訪れて日系人などへの川柳普及に努めた麻生氏の功徳をしのんで、同社は六年前ハワイへ吟行したが、来年、麻生氏没二十周年を前に大阪、兵庫などの有志二十四人が訪中することにした。

右の文は昭和五十九年九月二十四日の毎日新聞の朝刊に載った記事である。

同行者は男子十四名、女子十名の一行であった。今度の旅行は、中国の漢俳をやっている人達との文学交流が目的であった。

歌謡曲でよく唄われた、上海四馬路の角のレストランで、陸先生外数氏の方と固く握手を交して、書籍の交換の外、楽しい語らいの一時をもった。

上海より蘇州へ行く時に、初めて中国の汽車に乗った。空の旅、バスの旅を続けた私達には何とも言えぬ、落ちついた旅心がほのぼのと湧いた。列車は広軌のため非常にゆったりとして、テーブルを囲んで四人がコンパになっていた。卓の上には緑の植木鉢が置いていた。偶然座った四人は大八先生、千代さん、木嶋さん、と僕であった。そこで、三国志、十八史略を十一回読んだという大八先生のお話は素晴らしく豊富であった。「鼎の軽重を問う」「城下の誓い」「臥薪嘗胆」「呉越同舟」「四面楚歌」「隴を得て蜀を望む」等々の中国の故事名言を楽しく堪能した。

軟座車のコンパは楽しジャスミン茶

思わずついて出た一句である。我々が乗った軟座車というのは、応接間のソファの椅子が四つむかいあっている一等車のことで、間もなくジャスミン茶が配られてきた。

一時間二十分で水の都あこがれの蘇州に着いた。留園の小蓬萊、远翠園と廻って、かの有名な寒山寺へと詣った。楓橋は生憎修理中であった。夜半の鐘声に客船の鐘は見てみると、教会のチャペルを大きくしたような型で、鐘の音は日本の釣鐘と同じであった。

一列に並んで撞いた無銭の鐘の音は韻々として初秋の夕闇にひろがっていった。岳人君は、ここで三つ撞いた。

寒山寺の鐘を岳人は三度撞き

豫園にて

望楼に小手がさす日の秋思
蘇州哀しいずこも同じ水濁る
虎丘仰ぐ斜塔にかかる雲ゆるる
秋暑し魯迅の像はまばたかず

座右の句

妻や待たん靴音を高めんか

(路郎)

私の句

もう帰り来ます頃なり水打とつ

上田 翠光

川柳塔 十一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

川柳で「素顔の中国」を……

上海……

川柳塔(同人吟)……

自選集……

■川柳太平記(78) 川柳の群像 梶元紋太……

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(十八丁)……

上方前句付集の雄編「明石人丸大明神三万句集」(2)……

秀句鑑賞「同人吟」……

水煙抄……

水煙抄……

龍神温泉スケッチの旅……

愛染帖……

西尾 葉……(1)

橘高 薫風……(2)

西尾 葉選……(4)

東野 大八……(34)

阿達 義雄……(38)

奥谷 弘朗……(33)

田中 笑風……(57)

黒川 紫香選……(40)

西尾 葉……(58)

橘高 薫風選……(60)

上海

橘高 薫風

九月二十四日、上海空港に着陸した時、最初に見たのが滑走路脇の芒の穂だったことから、日中は一衣帯水なりの実感がたちどころに湧いた。タラップを下りて気が付いたのは別の飛行機の前で歓迎する赤旗の波、音楽隊の吹奏する行進曲、それに極彩色の大きな龍、それらは日中青年友好交流の第一陣、七百人を迎えるセレモニーだった。

昨年十一月訪日した胡耀邦総書記から「さわやかな秋に貴国から三千人の青年のみなさんてをわが国にお招きしたい」と提案されたことが実現したのである。四組に分れて三千人が交流活動をしながらか九月二十九日に北京に集結、十月一日の国慶節に臨むわけで、当日の天安門広場での模様は、日本のテレビでも映し出された通りである。この日、上海空港は気温三十度を越え、文字通り熱烈歓迎であった。

このように中国が門戸を大いに開放して、日本と緊密に提携しようとしている国策が、街のそこそこにもひしひしと感じられた。総体には中国の若者は実によく勉強をしていて、

若柳潮花氏を悼む……………(63)

黒川紫香／正本水客／小西富士子／阿萬萬的／辻白溪子

中国吟行の旅―上海・蘇州・桂林……………(67)

田中正坊／宮口笛生／春城武庫坊／八木千代／春城年代

白岩文衛／藤田泰子・田形美緒

「情」……………辻 白溪子選……………(74)

一路集「許す」……………小野克枝選……………(74)

「注 文」……………越智一水選……………(75)

初步教室……………本田恵二朗……………(76)

柳界展望……………(78)

59年度二賞発表本社十月句会……………(82)

川柳塔社同人総会……………(81)

各地柳壇（佳句地10選／斎藤三十四選）……………(87)

編集後記……………薫風・鬼遊・史好……………(97)

座右の句

妻が居る空気みたいに居てくれる
(柳宏子)

私の句

太陽の笑顔を独り占めにする
奥 山 美智子

独学で習熟したというガイドさんの日本語はまことに滑らかで、大阪弁までを小気味よく操るのだった。

観光は、上海のメインの通りをバスで走る。ディック・ミネの歌に出てくるガーデン・ブリッジ（外白渡橋）を左折すると旧日本租界、街は何処もプラタナスの並木で、日本のそれより数等大きく繁茂している。ホテルの前では、中国も秋は結婚シーズンらしく、胸に花をつけた花婿花嫁が街行く人たちから祝福を受けている。南京東路は歩行者天国のゾーンだった。

虹口公園にある魯迅の墓は故人の好きだったサルビアの花に溢れていた。度胆を抜かれたのは、玉仏禪寺の釈迦牟尼座像と寝仏で、中国でも珍らしい白玉雕塑、現世為楽の思いをさせる。当地の参詣人を真似て膝をつき、文字通り頭を床につくほど額ついた私である。上海の夜は、ホテル近辺の街路が暗く、繁華街まで足を向けることも覚束ないので、三十分程の散策の後、葡萄酒と林檎（八個）をともに二・三元（日本円で二百三十円）で買い、ホテルの部屋で陶然と夜を更かした。

上海を走馬看花のバスの窓
上海の夜と思う夜の赤い酒



西尾 葉選

松原市 谷垣史好

一心に君に尽くして目覚め良し
責任をとる顔でなしガムを噛み
置時計今はプライドだけで生き
おばはんを抱く豆腐屋の冷たい手
キン肉マンばかりが男ではないぞ
秋を迎えて機嫌直したあばら骨

潮花さんの死に

名月やあまりに早き舞い納め

大阪市 小出智子

紅葉狩り昔むかしのよい言葉
鍋の蓋古い絆になりました
へそくりにしようかお洒落しましょうか
心配は海苔が湿ったほどのこと
古傷を庇う絨毯敷きつめる
定年後の夫を少し煽てよう

ほっとする位置に小さな椅子を置く

竹原市 小島蘭幸

鰯売る明るいおばあさんがいる
ああジンタ古い柳誌を読んでいる
堅き柘榴の行末思う子と思う
秋ひとり動物園に来ていたよ
大人はいいなふと三歳が洩らすなり
給料前の財布を見られまいとする

桜井市 岩本雀踊子

最後には笑う男になるつもり
紙人形薄い情を知っている
人間美学ああ哀しみも憎しみも
古い絵の中に私の痛む傷
秋が来る音が枕の下にある
忘却の過去へ七十四となりぬ

柳井市 弘津柳慶

塾通いしているものと思つたに

靴底へ今日の生甲斐見つけたり

釘一本棟梁の気迫打ちこまれ

耳もとへそつとインチキ教えられ

酒ぐせをそつと幹事に知らしとき

バットの素振りへ腰が叱られる

倉敷市

野田素身郎

何時からか妻の沢庵噛み切れず

昼と夜の顔がこんなにちがう駅

隅の方にある病院の煙草販売機

ネクタイ一本母娘の意見噛み合わず

虫の声今年も独身寮で聞く

風景画湖底の村によく似てゐる

倉吉市

奥谷弘朗

辛抱も限度があつて息が切れ

手の内は伏せて相手の出方待ち

マラソンのトップ峠で入れかわり

生きて来た苦労のにじむいい素顔

六十で出すスタミナはたかが知れ

半分は妻の内助と思う幸

平田市

久家代仕男

褒賞のいまが退けどきかもしれず

女からもう財布の固い紐

香水で不純な仕草消せますか

爽やかなおひらきにするレモンティー

絵ごころも舞も無欲のときに冴え

肥桶の重みが腰にくる怖さ

岸和田市

高橋操子

店開けるまでのひととき趣味の本

ふる里の空から流した飛行雲

地下足袋の仲間で四季の花が好き

人間の裏むき出しにネオン街

名神の帰りは西陽まともなり

夕やける雲へあしたの夢つなぐ

岡山県

嘉数兆代賀

今日生きて今日の貧しさには触れず

おしゃべりの鈴に秘密がひとつある

手の鳴る方へ従いていくしかない庶民

つまずけば味方がひとり又消える

岐れ道右も左も風の街

青春は還らずミレーの絵に溶ける

玉野市

小谷仙山

美味しい事言つて熱湯吞まされる

コスモスをごらん喧嘩はもうよそう

萩桔梗まだ故郷は生き残る

雑念を払えとすず虫くつわ虫

雑草の四季たしかなり里の道

じつくりと話せば粟が割れて来る

兵庫県

遠山可住

裸婦像をピカソが画けば妻に似て

長男の嫁が美人である不安

蜘蛛の巣よ此処は虫など来ない窓

農薬はやらすにおこう秋の虫
カルテの字すらすらと癌に見え
台風へひまわり少し伸び過ぎた

八尾市
生きてゐる義理で僅かな祈禱料
川柳忌これでよいのか昼の風呂

管理社会コアラの次はナマケモノ
気の弱い男を囲む赤い羽根

葬式から戻りあしたの予定表
まつたけを買って帰って叱られる

八尾市
風向きが變つて女から追うて来る
風は秋城下町に見る和服

秋の実が一つ故郷恋うる唄
秋の実が長い昔ばなしする

秋の実にすぎる故郷のない兵士
何んとなく秋の気配をさす甘さ

和歌山市
秋茄子よ母はこの世にすでに無し
鰯雲ころは日々に重くなる

梨届く渡る世間を見直そう
秋だから少し妬心も見せておく

ひとすじに燃えて候曼珠沙華
長い夜を疑心暗鬼と語り合う

島根県
花の身になってみなされ花水

高杉鬼遊

宮西弥生

自由なら自由求めて逃げはせぬ
ケロイドの肌も無惨やさるすべり
見せかけの信心雨の日灯が見えぬ

わが影におびえて瘦せる月夜ガニ
ナンバーを覚えていたは幼稚園

米子市
豪快に笑い心をのぞかせず
満月へ急にふくらむ母性愛

男性の立場で懺悔の彩を塗る
弥陀の目に心の隙をとがめられ

自画像へ迷うてならぬ瞳のやり場
喪が明けて心の隙は見せられぬ

米子市
鶴低く翔んで覚悟をたしかめる
一羽ずつ鶴を並べる秋の窓

この世ならぬ恋にやつれし鶴の首
鶴の一声にころりと口説かれた

雨の夜も距離を崩さぬ鶴の文
そしてまた冬と向き合う鶴の首

米子市
洗脳をされてかたむく花の向き
おり鶴のはばたきを見た吉報で

よわ虫を吊つて広場の陽にあてる
足もとの猫踏みそうにあく出口

参加すると決めた弓矢を抱いてねる
人ひとり許して冴える聴診器

林瑞枝

小西雄々

大阪市 川口弘生

結局はすべてを許す母の愛
上下左右そのまん中で人が生き

人間という生物は情に生き

目の位置の違いがわかる置き忘れ

そこそこの縁で娘も嫁くと決め

食堂の求人食事ついてます

京都市 松川杜的

今の子に蚊帳に入口の無い不思議

色と模様で鯉の名が呼ばれ

梵字書く楽しさ菩薩の名も覚え

ほのかな期待へB面磨いとく

故潮花さんに捧ぐ(二句)

花道は三途へ続く舞扇

臨池亭あれが遺影になろうとは

富田林市 岩田美代

ユニークなおとまで秋の離婚劇

秋の風辻つま合うよに持つて来る

やさしい秋にまじないすめられ

むつかしいことは言はないわらび餅

都合良く忘れられた顔である

友だちが先に逝くから許されぬ

美祿市 安平次 弘道

喉までの言葉の中にある本音

実に未来託して花は散り急ぎ

尻尾振る犬はある日のわが姿

かたつむりの歩みも明日を信じてる

妥協点探し弱気になってゆく

可も不可もなし実印に用もなし

伊丹市 樫谷寿馬

自由とはこれだとメダカ網抜ける

マンションが出来てロックの盆踊り

常備薬色鮮やかに敬老日

熱帯夜避暑をおごりと言いい切れず

帰休せし子に肩幅の広さかな

秋の肌秋の温度で出るシヤワー

鳥取県 川崎秋女

峠みちゆっくり下りることにする

譲られた主権へ挑むボールペン

人嫌いになった蝶々のひとり言

構えなど終生知らぬ蝶の旅

啄木の詩から漏れてくる苦悩

人生の死角でボール弾まない

大阪市 津守柳伸

なるように成る生き様を流ればし

背伸びしたぶんだけ耐える水中花

虫の音に自己防衛をしてしまふ

ちっぽけな噂を潰す風の中

女とは悲しきものよ夜の蜘蛛

繕いを楽しくさせる老眼鏡

八尾市 内海幸生

コンピューターにすこし頼りすぎないか

停電におろおろとなる仕組み
欲は無いけどジャンボ籤を買
酒すこし呑めばさっきの鬼で
億ションの前で停った焼きいも屋
無表情喜び知らぬ訳でない

岡山市 川 端 柳 子

大空が青い吸取紙になり
小さい秋うまいうどん屋店開き
コスモスに托す女の胸の内
日当りのいい椅子いつも夢をみる
お別れのつらさかファスナーかみついで
すばらしい人生孫がくれたキス

藤井寺市 吉 岡 美 房

赤とんぼ田んぼ一枚売話
野仏と語る影から秋となる
決心がついたら風は秋だった
昼花火秋の祭の空に抜け
どっこいしょ腰から秋がしのびよる
コップ酒底に迷いが沈んでる

吹田市 藤 村 女

ふる里の小川唱歌のまま流れ
十字架の胸で聖歌は炎えている
聖歌の愛よポプラも天を指す
言い勝った胸の鼓動は鉛色
雨の日の花の鼓動が遠くなる
紫の袈裟から覗く嵯峨の秋

大阪市 江城 修 史

生きる汗何か足りない世に疲れ
労わりの言葉も荒くなる不況
落丁に似た人生の無為無策
逆境に堪えて一途な夫婦愛
倒産の嵐に喘ぐ零細よ

過去帖にわが家は若い歳ばかり

松江市 柳 楽 鶴 丸

水中花のようと妻の一行詩
美しく老いた和服の折り目
下手な絵をエリマキトカゲが引きたてる
声が出せたら蛇も可愛かる
以外や以外妻を見直す肝っ玉
譲り合う父母へ私どうしよう

松江市 恒 松 町 紅

北方領土へびつくり箱をしかけとく
潮騒を聞くと悲しい玉手箱
朝一番にかかる電話で聞く計報
飽食のあげくに探す痩せ薬
長かった病に飽きて葬る日
ループタイして落着かぬ無位無冠

松江市 舟 木 与 根 一

コシヒカリ二百十日に耐えた味
月まるく芋も美味しくなりました
こおろぎが鳴き止み盗っ人酒あわて
逃げ足をエリマキトカゲに見習う

涙壺から美しい老化です
茶柱が小さな嘘へ立った朝

米子市 石垣花子

中国吟行会に思ふ

駆け抜けた歴史を探す旅人よ
千羽目の鶴は優しい顔で折れ
シャボン玉破れるまでの虹の色
息切れを明日のドラマは許さない
風の中一人立ちする眉を上げ
ライバルと握手する手はよく清め

米子市 雑賀美世

終電に途中下車など許されぬ
百の罪沈めて浮かぶ蓮の花
しきたりを姑の箱から少しずつ
女ひとり朝の鏡に背を伸ばす
許されて青信号の道続く
縫られて納得いかぬまま許し

米子市 青戸田鶴

去ってゆく仏にふれた粟の花
桔梗おみなえし姑もやさしくなっていく
粧えばたそがれ少しはなやぎぬ
大きめの帽子がなぜか妥協せぬ
先頭の蟻だけがみな壺の中
秋になる少し真面目な本を買う

米子市 菅井とも子

老眼鏡そろそろ欲しいアイシャドウ

退職の誤算なかなかはばたけず
子の本を守り続けたダンボール
母の瞳が笑うやっぱり許してる
血の絆途中下車して温める
中途から峠峠と言ひ聞かせ

米子市 桑原伊都

弱点は小さく書いた説明書
テレビ漫画の時刻へ砂場夕ぐれる
七彩の糸入った母の箱
峠から先は孤独な風が吹く
太陽へ愚痴はもらさぬかたつむり
風紋も消えて砂丘が病み出した

米子市 野坂なみ

気ままですもう若くないまだ若い
天国の階段亡母はどのあたり
ほとけさま私も歳をとりました
私とのたたかい妥協許されぬ
リレー電話女の話くい違ふ
もつとおしゃれに秋の鏡がささやいた

呉市 林野甦光

しなやかな袖で礫をはね返し
孝順の子がいる夜の風呂加減
エリートが近道を選ぶ下り坂
決心の鞭は心に打っておく
倅せに馴れ潮先を見失ない
降り出して電光ニュースもそう告げる

東大阪市 斉藤 三十四

六三三愛の心を教育に

味方という口先だけの黒い肚

棧橋で次の帰郷を約束す

大袈裟な奴でにくめぬお人好し

入道雲キャンパスは夏景色

茜雲女の心を迷わせる

寝屋川市 柴田 英壬子

二十五度割って編針出してくる

冗談の口がすべって和を崩し

菊作り犬の散歩はほっとかれ

大小屋で犬は見事な菊眺め

萩たわわ家人に逢ったことがない

冬来たりなばとコートの子狐

京都市 山本 規不風

憎しみを受けない訳を持っている

どの罪も許されてるといふ自信

観音のお顔が円い日を旅立ちぬ

女心鎮む小野小町の化粧井戸

還暦にも古希にもスタートライン敷く

盛り場の吸殻淋しい私語ばかり

岸和田市 古野 ひで

真夏日のトラック蝶も乗せてある

泣き事は言うまい寡婦のひとり言

若き日のマルクス何時しか消えて老い

合掌のそのひと時のやすらぎよ

今生きる昔々を忘れねば
秋風の匂いの中で人を恋い

大阪市 西出 楓 楽

本を積む精神貴族になりたくて

生きてゆく勘定まちがいばかりして

幸せな人でその名は単細胞

虚と実の間に真実置いてある

飯の世と思えど歩く外はなし

おしゃれです服に体を合わせます

西宮市 奥田 みつ子

赤い月病む人の目に触れぬよう

ペンキ塗立てちよつと触ってみたくなる

ごみの箱だからきれいに洗つとく

尺八の息細うなり父卒寿

綿雲に大事な人のプロフィール

葉鶏頭女の夢が燃えている

鳥取市 両川 洋々

金で落とすと案外もうい城でした

妻叩くかわりにビール二本空け

老い知る日若さのかけらかき集め

怒鳴つたら怒鳴り返しもして夫婦

ぜい肉という敵がありジャズダンス

覆水は盆にかえらず辞表書く

新宮市 川上 溪水

節穴の覗きたくなる穴の位置

ペットの死だあれもニュースにしてくれず

左遷の時から革新好きになり
仏壇も墓地もローンでまだ死ぬず
それぐらい言えといつても後で言い
写経する経の意味など考えず

吹田市 西川 景子

三つまで男の児として育てられ
まじないにすがった親を笑えない
靈感がひ弱な体で作用する
おみくじも相性も吉という伴侶
浮気封じ見つけた富士の六合目
若返る呪文を教えてくれるひと

尼崎市 春城 年代

性格の違いが飛ばす竹とんぼ
目刺し焼く幸せ少しおろそかに
なぞなぞで私をからかう孫が来る
子の澄んだ瞳に負けてなるものか
秋の気配扇風機からもれて来る
来る気配して寿司だねを買い揃え

和歌山市 堀端 三男

信用とは別に一応手を握る
角とれた石から聞いたエピソード
閻魔さんの審判待とうと笑い合い
素読した祖父の論語を蔵で見る
人生の曲り角から読む聖書
学業の序列通りでない救い

寝屋川市 江口 度

虫鳴けば幼き頃の夢に酔う
やっと汗かわきましたね月見草
役員室のしぼんだ風船見てしまふ
あとつぎの部下が少うしやり過ぎる
Oしだけに手渡すビラが欲しくなる
びく海にあげてすがすがしく帰る

倉敷市 斎藤 通風

生真面目もあってほしい伝言板
何れまたいまに忘れぬ捨て言葉
音信の絶えた男の傘一本
流産の女がネオンの街を去る
静かなる海月光の金絨緞
熱くとも恋は焼料になりにかぬる

大阪市 神夏磯 道子

夏草のあまりに強い眩暈かな
若い頃聞いた話へつきあたる
名月と語れば母とふる里と
高く高く考えないで積む積木
花よりも紅葉を待つてゐる旅行
美味しいと思う幸せ残つてた

豊中市 田中正 坊

亡妻納骨(四句)

再びの別れ骨壺そつと抱き
遺骨抱き門を出ずれば小糠雨
妻の死という十字架を負う余生
出会いはより別れが多い去年今年

迷いつつ生きる人生未完の詩
年金でなんとか食えている不思議

弘前市 波多野 五楽庵

鳳仙花ひと雨ほしい音で割れ
約束を忘れた指の黥秘権
吹けば飛ぶ肩書なれど胸を張り
人のいい笑顔に出会う射程距離
七十五日耐えた噂の髪洗う
日本の涙の緯度にある千島

富田林市 藤田 泰子

麻薬とはこんな味かも思慕巡る
曼珠沙華燃える彩した乱れ髪
疑うとやさしさまでが謎めいて
書き直しまだ掌の中にある手紙
八分目溢れる程は望まない
逃げ腰でねずみ火花に火を点ける

尼崎市 角野 かず子

海峡を抜けているかの群れを追う
なまぬるいビールに話だれてくる
確率を信じ夜店の早じまい
人工芝ふえて遠出の蟻の列
プロボーズの声は一段低くする
ボーイフレンド連れて戻ったまつりの娘

岡山県 土居 耕花

蓮根の穴から嘘が洩れそうな
夕暮れの音が上手な秋の風

ブーム去るやれやれやれとカブト虫
コメカミを叩くとケチな知恵が湧く
美しい話では無い五十腰
喧嘩した日に飄箏の種を蒔く

八尾市 宮崎 シマ子

菊畑老母人形の顔でいる
臥す身には心ばかりがはずむ秋
海に骨埋むる家系海に生き
葬いへ友と約束して出かけ
山門を出ればすぐ来た戻りバス
里帰りの娘と松茸の値段など

藤井寺市 児島 与呂志

愛の道一人で悩むものでない
一日のリズム狂わす朝の犬
気まぐれにうなずく度に妥協する
背を伸ばす度に段差を意識する
老眼鏡素直な位置に置いて無い

島根県 堀江 正朗

満月は雨かどうせは見えぬ酒
慌てれば右も左も打つ額
山駆けた想い出栗の実る頃
現実には僕の歩幅にそっぽ向く
まだ未練眠り醒めれば見えそう

島根県 堀江 芳子

とうさんが笑うとなぜかほとする
安静のカルテに背く日の炊事

氣の利かぬほうが得することもあり
耳の罪ばかりと思うこと多く
氣兼ねなく大きなクシヤミして我が家

大阪市 西森花村

輕輩も落葉も窪地にたむろする

殿様もエンマも見えず秋の暮

山坂を登れば月のなお高し

クリーニングに出してはやもめ又忘れ

探險隊転んでペンギン氣を許し

堺市 河内天笑

煩惱がはじけた声で蟬は鳴き

ひまわりの首をはねたら秋の風

満たされた日の風鈴とキリギリス

ええ声で虫が鳴いてる二人きり

空き缶をポイ捨て出来るこわい人

今治市 越智一水

石風呂で無病息災信じ合い

帶しめておんな心はまた迷い

春愁の頬杖返信溜めたまま

仕事より疲れたと言う披露宴

浜焚火風の流れを鳥見張る

大阪市 中川滋雀

紅顔の星のロマンを信じよう

秋の夕陽へ女であった長電話

幕にする合図は私だけでよい

書き足らぬ舌の乾きで切手貼る

曲り癖は親しみやすくなる

島根県 西村早苗

打ちあけて見てもお前にわかるまい

ふるさとに来てふるさとの虫に会う

秋鯖の青さを一つ籠に買い

着飾れど心貧しきおんなにて

秋の冷え肌恋しくておんなを抱く

松原市 玉置重人

席順の通りで破乱のない会話

ワイングラスに疑問を問いかける

一病を背負い信心すすめられ

日々好日きまつた位置の箸枕

日々好日葱をきざんでいるリズム

奈良市 宮口笛生

趣味違う夫婦で花を賞めている

ぼろくそに言える妻あり有難し

雨の日の一日髭が伸びてくる

のほほんと犬の散歩に出てしまふ

橋一つ渡ると故郷生きてくる

岸和田市 福浦勝晴

蟋蟀が太古の声で啼いてます

諍いに行くのに女化粧する

おもしろい俳句とおもしろくない川柳

町内のタヌキで人に逆らわず

呼び方をかえても所詮ボケはボケ

大田市 藤田軒太楼

そつのない仕打に年輪伺わせ
不本意だがこは私にまかせなさい
漫画にもならぬ持論を聞かされる
図に乗った深追い元も子もとられ
話にもならぬ話を自慢気に

出雲市

原

独
仙

一周忌近づき一入初秋わびし
お役目はご苦労なこと鼠捕り
米倉が吐息韓国米輸入
嫁が来て△調を○調に台所
ご立派な体格目下失業中

鳥取県

清
水
一
保

たそがれの道にも明日の虹を画き
必勝の額が論している意情
美しい心に化粧なぞしない
人類へ地球自転を止めたろか
人間を選ぶ権利を犬も持ち

笠岡市

松
本
忠
三

簡単に割切れたからつまんない
あなただけそんな台詞に乗りません
勘繰れば頭がこんがらかっただけ
悪者にされても採るに足らぬこと
借りて来た猫がそろそろ爪をとぎ

堺市

高
橋
千
万
子

たわむれの恋がそのまま実を結び
犬吠える三年ぶりに母が来る

コオロギの目に床下のビール瓶
金ですむ妻のグチなら片づけよ
やり遂げてこのむなしさは何かしら

奈良市

森
田
カズエ

厚すぎる座布団腰が落ちつかず
非常口二度確かめに宿浴衣
突然にあいすみませんとセールスマン
椅子すこしずらして視野を広げよう
気がつけば妻の作った梓の中

大阪市

河
井
庸
佑

不合理と矛盾憤るのも若さ
程々に遊べばよいのにむきになり
他人を知り己を知って逆わず
建て前で通し続けて疲れ切り
核心を突いた末席流れ変え

大阪市

天
正
千
梢

女をうれしがらしつつ吞んでいる
愛してる真似をしながら縋帯まいてやる
沈黙に心が通うティールーム
記憶力節約してくれるメモ帖で
天下泰平一億アイスクリームなめている

呉市

横
田
英
詩

辛抱の手本を老母の皺にみる
なつかしい蛇の目に出会う京の雨
友信じきると握手がしたくなる
間違っても叱りすぎない方がよい

斬り捨て御免不況に弱いパートたち

神戸市

仲 どんたく

水軍の子孫で代代の社を護る

まだ生きる未練へ薬食べるほど

怪獣に例えて孫と夏の雲

ハワイ焼けですと能因法師ばり

湯上りの鏡の中からねだられる

倉敷市

藤 井 春日

挫折した過去を語れる今日の地位

木槿もう萩にバトンタッチする構え

男尊女卑我が家に笑い絶やさない

課長就任あいつべんちゃら旨いから

反抗期だからと黙視する誤算

竹原市

森 井 菁 居

父の笛信じて渡る丸木橋

沈黙の女がかかえる不発弾

射程路離内の獲物は無視される

プラトニックラブなら許してくれる秋

唇に唄を持てない都市砂漠

倉吉市

渡 辺 独 歩

檜山は交通規制から外す

梟だな森の眠りを醒すのは

靴が鳴る靴は喪の明け知ったのだ

トンネルが出来て峠は眠くなり

骨肉のしがらみ破れ呪詛に落つ

下関市

国 弘 半休門

八十年叩けば埃も出ますたい

僥倖を願うてオートに縁が無い

古い根を摘み取り蘭は蘇える

正直に受けとめ給えお隣さん

底辺を行ったりゴルフして見たり

郵便受けに今日の期待がいつも有る

友はよし色とりどりの知恵袋

踏みつけにすれば小石の石車

念願の家建ててから鬼が棲み

わが唄に酔うて伴奏気にしない

打ち水や非を消したくて消したくて

壁白く中年色を考える

八合目中年息を整える

残照よ今日のことなり今日済ます

こらお前鏡で己と対話する

雨降りものんびり出来ぬ親雀

独身貴族その皺よせが老母に来る

息子の嘘ほんのり恋の匂いする

ラブシーン中ゴキブリ天国行きはった

猫呼べば菊の花蔭鈴の音

溜息へどちらの耳も塞がれる

胸底の鬼一匹に踊らされ

兵庫県

辻

文 平

大阪市

本 間 満津子

岡山市

時 末 一 灯

寝屋川市

宮 尾 あいき

たとう紙へ今日の煩惱たたみ込む
足袋はだし本気になった丸木橋
甘たれてワイングラスに注ぐ妬心

七尾市

松 高 秀 峰

出世坂ころんでからのサラ金苦
ほどほどの遠慮があつて先に嫁き
秋祭りデートする娘もしない娘も
PTAで家事の手抜きが上手くなり
秋祭り上手に踊る影法師

仙台市

川 村 映 輝

江戸前というすしのタネ外国産
炎えている時に逢うたが腐れ縁
日本の女性の姿躰口

学歴を自慢にする貧しき男
ご先祖の眠るお寺の萩の道

京都市

都 倉 求 芽

露ためて主を待つてるビール瓶
土知らぬまま鈴虫の何代目

雨の日をよつて十五夜にする暦

山陰行

長楽園湯気そのままに雨となり

噫 潮花さん

またこぶがひとつ増えたり雲の峰

豊中市

安 藤 寿美子

幕切つて落したように秋になる

蓑虫と肩の糸屑とるように
あんたまだやもめかこおろぎ鳴き止まず
化粧する顔に鎧を着るように
秋の蠅私は去年の服を着て

鳥取市

小 林 由多香

新郎の手袋の白信じきる
ライバルもおんなじ塾へ来て学ぶ
機嫌もう直せと男折れて来る
補聴器に田を売る話漏れてくる
デッドボールそれから流れ狂い出し

鳥取市

森 田 熊 生

末吉を信じてちびた靴をはく
冷蔵庫昼寝の夢が冷えている
仲直りしてわらべ唄夕焼ける
再会の笑顔不安がやつと飛び
語尾少しばけて心をのぞかれる

鳥取県

林 露 杖

入院の時間待つ朝ヤンマ来る
寿命延び余生棧敷を組み直す
国体の委員としての花づくり
役員の賄賂や万引校長や
警察の不祥事元も現もあり

宇部市

平 田 実 男

陣痛を知らぬ男の得手勝手
亀笑うエリートにある落し穴

サラ金のここにもジキルとハイドが居
言うことはきかぬが親を真似ている
御自慢の子等がホームに来てくれず

兵庫県

河原みのる

作文の結晶遺憾で終るまい

折りたたみ積んだ空母を護る羽目

太平は被告のゴルフ護る国

政治屋の言の葉の末秋の露

制服を脱いでもケイサツこわいひと

和歌山市

若宮武雄

妻の眼を忍ぶ糸屑もつ男

盛装の事故死本望かも知れぬ

蛙なら蛙に似合う泳ぎ方

女五人でもお二人はだんまり屋

庭の木を伸び放題にして詩人

和歌山市

浦野和子

泥沼に咲く蓮のこころを給わらん

小さな秋逢うときめきの白露かな

夏惜しむ木槿無常の彩で咲く

深疵をまだこじ開けにくる噂

まめなベン角度を逸れて行く怖さ

和歌山市

内芝登志代

花の種くれてお隣越して行き

朝々の快便ほんとに有難う

運勢はどうであらうと今日も無事

相談へ母は体験ばなしする
蓄えが増えて何処かできしむ音

和歌山市

福本英子

泡ばかり酌いで遺恨の無いジョッキ

沈黙考やっぱり傍にマンガ本

夕食の手抜きヘドラマまだ続く

なれ寿しの作り手も無く祭り笛

流されるまま添うてゆく運命線

和歌山市

松原寿子

夢はるかあなたは蒼い流れ星

編み針もあなた慕うて耐えている

煩悩を追ってどうなるシャボン玉

君の掌の温みで峠こえてゆく

ああ慕情おんなは蒼い海を持つ

和歌山市

坂口公子

いたずらな神が花束投げてくる

インテリと歩くと口がもつれます

二人して先に死ねぬと気負ってる

インテリもぼろぼろになる母の膝

好きだから散々な目に合うとても

和歌山市

坂部紀久子

虹色の恋は恋でしかならず

或日ふと女でよかった紅をひく

さるすべり夫唱婦随の色で咲く

客帰るストロークにせぬままに

通夜の席一際提灯明く燃え

大阪市 欄 蘭

甲斐性ある拾い屋犬を三頭飼ひ

轢き逃げへ老いたる野次は掌を合せ

手鏡に中年ですよと教えられ

深呼吸しても心は落ちつかず

借金も財産のうちマイホーム

大阪市 中 西 兼治郎

スリの目でスリ探してる刑事の目

マジシャンの様に球審球を出し

蠅が腑におちないものに蠅たたき

遊び黒働き白で夏終る

巨神戦お風呂の順が逆になり

大阪市 吐 田 公 一

それぞれの欲が並んだ通夜の席

死ねば良きライバルでしたと殊勝にも

当然に前へ手を置く裸婦の像

ピカソの裸婦見てから審美眼狂い

嫁りたくもないのにもらってもらう札

大阪市 大 野 武 太

親心などと都合のよいことば

月末に陽気な鬼がやってくる

出勤の順をしゃる靴の私語

発想を変え机もかえてみる

ひたむきに犬は飼ひ主みつめてる

姑のくせ想い出しつつ墓洗う

愛溜めてためて女にある翳り

富士五湖

風穴の寒さに夏を忘れさせ

巨石群と月と混浴露天風呂

富士の湧水流れて水車廻る郷

(風 穴)
(石和温泉)
(忍野八界)
大阪市 北 勝 美

普門院露の芝生になる裸足

敵味方仲好く並んでいる墓石

PRそんな墓石もある高野

日日達者握る箒にある誇り

なるだけのまないようにと薬くれ

大阪市 長谷川 春 蘭

古寺へ又歩をもどす蟬時雨

ずれかかるトンボ眼鏡と汗の顔

爪染めて女うつとり昼を寝る

街の子が今日はお客で村祭り

カラフルな昭和浴衣も鯨尺

大阪市 柳 原 静 香

装えば六十なりの楽しさが

秋深む猫も親しきものとなり

帰ることなきふる里の祭唄

旅プラン足の弱りを気にしだし

嫁姑男は弱いものであり

大阪市 鍛原千里

花言葉信じて秋が深くなる
女ゆえピンクのハンカチ愛すなり
生い立ちを問えば名前の由来から
秋風に女心は彷徨えり
市場籠中のぞかせて立話

大阪市 鈴木節子

確かめたくて昔話をくり返し
ひよつこりと気付く私の誕生日
ときには火花を散らす友情もある
エプロンが同じで少し妬いている
お荷物にならないようにして暮し

大阪市 藤田頂留子

子連れ猫なじるよな眼でふり返り
じやれあつて子猫は野良とはおもてない
残しては使わずじまいくず箱へ
大都会一足とびの季節感
おもいきり運命拒否を試みたい

大阪市 杉本智慧子

お山は神物見遊山は許される
身震いをして落石の話聴く
新たな感動落日御来光
気がつけば猛烈社員之列に居る
聴き耳を立てて待つて午前様

唐津市 仁部四郎

ジョギングも浴衣も詣る南円堂

東大寺瓦に書いた家族の名
夢殿へお参りさせる菊バツジ
二条城菊も葵も植えてあり
清水の舞台で「凶」に読みふける

唐津市 久保正敏

愛されて欲しい女の二重願
社長職個人保証の判も押す
出稼ぎも孫請企業も弱い者
血族が揃えば鼻を比べられ
親と子の積木崩さぬジャンケンボン

唐津市 田口虹汀

捨て石が生きて夜長の茶を啜る
貰う身になってお見舞いに行く
三日では足りぬ父さん帰る初盆
子育ての母に条件などいらぬ
本州も知らずハワイの旅に出る

唐津市 浜本久仁於

秋の計へトンボは赫い喪服着る
ストレスを村の祭りの火で燃やし
ストレスの神輿をかつぐ笛太鼓
年金で暮すズボンが緩くなり
ささやかなゆとりの中で子が笑い

唐津市 浜本義美

病院が檜山になる世の変り

退院の日から頑固が又戻り

エンヤエンヤ声援止まぬ集中打（弘実―唐商戦）

稲枯るる家畜が斃る天に哭く

紫の情に濡れて秋になる

米子市 田 中 亜 弥

一番星母の祈りも深くなり

秋の背に約束ごとが多くなる

飢えたとしても砂丘のように強くなる

どの鏡も明日へ向えと戒める

いい歳と思うがまんが大好きで

西宮市 林 はつ 絵

海峡を越して一つの力湧く

小さな虫ただ一すじに鈴を振る

山りんご大きいたって知れている

山りんご毀誉ほうへんは知らぬこと

いま少し愚かになれず山りんご

西宮市 妹 尾 春 江

秋の雲一緒に旅がして見たい

号令を時どきかける亡父の峰

夕月夜峠の向うに亡母います

弔いの言葉はよそう彼岸花

人生の波乗りが下手な夫婦独楽

西宮市 杉 浦 婦 美 子

煩惱の火は消しがたし萩に佇つ

人ごとだから結論がすぐにでる

マルクスを知らぬお婆が貯めていた

目尻からもれた笑いの今日の首尾

スナックにボトル夫婦の名が並び

西宮市 西 口 いわゑ

ぽっかりと浮んだ雲よどこへ行く

別れ来て川の流れは同じなり

心配の相槌ばかり打っている

吊り橋のまん中辺でする思案

雑沓の中をノッポの彼が来る

西宮市 草 刈 墮 駄

出来なくてへのへのもへじ書いてみる

間尺には合わぬ仕事の名人芸

酔って寝る朝の目覚めを疑わず

コベルニクスそれでも天がまわってる

慶びを何故に烈しき呱呱の声

西宮市 藤 村 宏 子

階段の一番下を踏みはずし

杉木立お大師さまのおひざもと

御開帳手にのりそうなありがたさ

揚羽蝶好きな方角あるらしく

浜風に若くみえますサンガラス

鳥根県 榊 原 秀 子

殺しすぎた自分へ風船割りました

輪の外で少しひがんでみる仲間

いいわけを必らず一言きかされる

虫の音に写経の筆はよく進む
葛の花綺麗にさいて無人駅

島根県

榊 みどり

余生なお孫の背丈へ糸つむぐ
夕顔の白うっとりとしらず越し
思い出のある人形を抱いてねる
嫁きおくれ希が重くのしかかる
すぎる気になって世代の彩にそう

島根県

錦 織 文 子

韓国行 (三句)

玄海の荒波青春を呼び戻し
「故郷の空」口ずさみてし我は若かり
面影はほのかに残りし在住の地よ
見る人の心にまかす大茜
人生の綻びぬうている余生

島根県

大 森 孝 華

人生よ呆けるほどのひまがない
本心は許してやりたい母無口
囲まれて出るに出入れぬ四面楚歌
水の音捉え登山の腰おろす
消しゴムの欲しい日もあり悔い残る

島根県

石 田 清 泉

過去を捨て今日という日の陽に向い
草むらの王者となったあまちゃづる
豊作の指数お役所に委しとき

干拓の行方白鳥締め出す気
首脳会談やっぱり本音が見付からず

島根県

松 本 はるみ

今日までの歴史ひとまず庭を掃き
空間に独り置かれてる鼓動
意気込んで箏笛の着物出ただけ
あるまじき世相をよそに昼の月
身勝手を倅せですとは受けとれぬ

島根県

松 本 文 子

又逢えるそんな気がして切符買う
肥えすぎと痩せすぎといて平和です
おしゃれでもするか大空澄んでくる
クシャミして嘘が上手になりました
赤いクツふと風鈴の疎ましく

高知県

赤 川 菊 野

電卓へなじまぬ指の帆前掛
葬列の足を野良犬嗅ぎにくる
行き倒れみたいな顔で夫が寝る
真相を喋ってからの向い風
旗色がどう変ろうと走らねば

高知県

松 岡 三 吉

男三人豚の顔して飲んでいる
あなたより笑い上戸で愛される
松茸を少し眺めてたち去りぬ
三角関係の中の一人はけつまずく

一生に一度なんべんある男

出雲市 石倉 美佐子

尼崎市 春城 武庫坊

月踏んだ男が挙げる関の声

人妻の迷いが醒めぬ十三夜

山鳩も月夜が好きで笛を吹く

月よりの使者には見えぬ糸車

月の持つ仮面を知らぬ愛娘

出雲市 園山 多賀子

うつむいた男無口と限らない

ジョッキにも確かな男女平等論

無為無策びっくり函などないくらし

音のない地球の自転恐がらぬ

運命と言う諦め救われる

出雲市 吉岡 きみえ

急ぐまい行きつくところはただひとつ

いいことをひとつしてひとつ恩返す

悔いのない一日だった灯り消す

いいことの盃やっぱり度を越して

皿洗い報恩感謝の日をかさね

岸和田市 原 さよ子

昆虫のお墓が増えた夏休み

二つなら安いと無駄を買うてくる

野菊だけ残して畦の草を刈る

約束の時間へ信号赤続く

悪口もちゃんと入っているビデオ

人生の手違い同士手をつなぐ
ビールだけ飲んで結論まともらず

引潮に夏の想い出皆流す

身の上を語る女にひっかかり

特別に美人に見えるある角度

振り返るたびに曲がつた道になる

針箱でボタンが過去を光らせる

絵日記の中のわたしが面映ゆい

七彩のドラマを見せる指定席

幕下ろす時の自分を信じたい

思春期の軽いめまいを片思い

泣かされた事は言わない通夜の席

あつさりと年下が逝き深い秋

結婚はしない女とまつり見る

諦めた女の部屋に窓はない

大国は平和の顔で武器を売る

道連れは若いぞ足を鍛えとこ

ビヤ樽のモデルにしたい腹が来る

ビジネスをそのまま乗せた電車内

金魚でも喜怒哀楽を尾でしめし

松江市 小林 孤呂二

諍いをするなと聖火消えてゆく

齒が抜けて男ざかりに見る欠け目

花時計の花よりも好きな女を待ち

行きは晴れ帰りも晴れとは限らない

大きな人間になれと握るにぎり飯

兄貴より上手になろう逆あがり

地に還るわくら葉たりし兵たりし

父親が泣き顔ばかり撮りたがる

女房が笑顔で俺を迎えたぞ

蛇行して西に傾く母の舟

綿の花どんな姿で死ぬのやら

子守唄忘れはしない花骸

哀しみを重ねかさねて女終え

スタミナ源は愛する妻の笑顔です

職人の律儀なタオルは真白い

賤ヶ岳暮れて虫の音いとはげし

観音様の由来も樂し旅にあり

琴糸の里琴の空音をきいた耳

ほんの少し触れたこの指愛おしむ

パンの耳きざみ雀を待つ日課

潮花の死(三句)

寝屋川市

稲葉冬葉

米子市

林

荒介

天国へおいで招待状がくる

計の報らせひとときボケの間の憂い

酒タバコ吸わぬ男で病んでいた

水着にもなろうか灸のあと忘れ

晩秋に風が変っていた二人

蟬何処川柳塔も九月号

夏バテが招待された毛皮ショー

不貞腐れた様に無花果熟れている

枝豆がはじめて母の三回忌

海へ来て男本音を吐いている

言訳が下手なお陰で許される

ぎりぎりの処でつながる運命線

喝采は無いが平和で平凡で

足跡はくつきり蛞蝓さえ残し

保険屋が命の値段決めて去り

慰めの言葉の代り金一封

きつちりとした性格がサバを読む

エンジンの掛りが遅い今日の酒

頂上へ登ると厳しい風が来る

真心の良さを夫婦で信じ合い

ひらひらと小さい蝶は軒づたい

河内長野市

井上喜酔

米子市

野呂右近

倉敷市

小幡里風

北野久子

松原市

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

北野久子

ありがたい事に舅も軽い腰
目の上の瘤はせつせと竹を踏み
ほどほどにせんと雷落とされる
友達が增えて聴きたい話したい

東京都 増田次章

その実はみんな自分を優先し
結論はもう決めている妻の顔
妻戻りわが家わが家の貌になり
失敗を上手に解説されちまい
想い出はちよつと脚色して語り

熊本市 有働芳仙

金のない時の返事は直ぐ分り
水の無い川へ無口な夫婦橋
肩車子にかける夢天に抜け
祭り笛遠く二人へ星が降り
さりげない言葉に愛が行き届き

岡山市 井上柳五郎

九十一大往生と慰撫される
風鈴もそつと仕舞つて喪に服す
紅毛碧眼うまい日本語あわてさせ
顔に書く性善説を信じよう
六法を繰つて捨身の意地固め

寝屋川市 堀江光子

無雑作に着る浴衣にも帯を選び
昼寝する孫に涼しい指定席

両親の写真少ないのは寂し
五本ほどコスモス植えて秋を待ち
自信ないわが声ながら祝い歌

貝塚市 行天千代

もう少し我慢をしよう三十度
二十年後戻りしたい日々思う
傷ついた心を癒やすペンの跡
女にも外に七人敵が有り
止めようかしきりに心揺れ動く

西条市 片上明水

田を売ると大きな指が邪魔になる
カレーライス父もニコニコ匙を執る
人のあとばかり歩いていても汗
ボケの本女房は先に読んでいた
演壇へ解つたように首を振る

名古屋市 越村枯梢

万歩計腰にたたらを踏んでいる
佗しさは誰が名付けた独居老
アンダーライン引いた日からの物思い
父送る言葉に麗句など要らぬ
抜け殻になってコーヒー飲んでいる

浜田市 中川幸一

ロボットも不死身ではない耐用年
俸せがはち切れそうなエルサイズ
肝臓に関心があり不摂生

自分だけ苦勞した氣の苦心談
うちの子に限つてと言ふ無責任

桜井市 河合茂雄

終着へ重い苦勞がついてくる
年齢を減らす女の定期券
足病んだ兵隊蟻の死が近い
耐えること慣れて明るさふるまえる
広い空へりも衝突して落ちる

岡山市 行吉照路

車椅子からの拍手は血が通う
熟年の涙は煙草にむせた顔
悪人は私だったか氣がつかず
腹卷きにヘソクリ海外行けますか
大吉の父は朝から一、二、三

鳥取県 中原諷人

人の和ヘタライ舟から手を振れた
少年が怖い玉碎記を捜す
上弦の月がカタツムリへ馴染む
笑い袋の肌に艶あり老母かこむ
神の森から僕の彼女はやって来た

姫路市 松浦輝月

永久契る其の時こんな嘘はない
変節を許さぬ長い爪を研ぐ
遺言を開けてびっくり庶子二人
易者の子行方がしれぬあわてよう

夫が逝き子の防波堤で波静か

豊中市 上田登志美

齡五十なおも自信がつきかねて
過去の罪消して風紋新たなり
裏切りをした友だけど氣にかかる
本当はよい人だのに損な顔
女です衝動買いもレクリエーション

姫路市 丁坪サワ子

四十年亡夫と歩いた万華鏡
敬老の日だけ素直にいたわられ
嫁と娘に使い分けてる匙加減
責められた嫁が責めてるよい時世
長寿国まだまだ延ばす本が売れ

鳥取県 新家まさる

知恵遅れキラキラ光る眼をもらい
お昼まで遊んで行つた迷い鳥
八月の砂丘の馬を鞭うつか
英会話得意で頭空っぽで
碎け散る波に習つた諦めよ

綾瀬市 大山と金

鄙に見る入母屋造りは百姓家
蚊が刺して一番痒い足の裏
できますかできませんよと駄目を押し
借りたまま形見となつた旅靴

加賀市 細呂木魯木

予感が当り有頂天でふれ歩き
旅に出た土産に優越ほのめかし
積み重ねた根気が光る名人芸
親と子の息が混じつてゐるゴム風船

諫早市

原田明春

貧乏性でゆっくり道が歩かれず
交通ルール守れば遅刻ばかりなり
水商売水割りの水も銭に入れ
退職かそうかと所長味けない

東大阪市

森下愛論

住む人の個性が判る板囲い
コオロギにせかされ冬物たしかめる
女の子ばかりで鏡台派手なこと
嫁ぐ日へ縫う楽しみのアツプリケ

倉吉市

渡辺苦句

故人ともなるとべた賞めされている
熱帯夜の天女のことかきにかかる
眠られぬ夜は天女を数えてる
ちびた靴働く意志で鳴き止まぬ

橿原市

岩井本蔭棒

箸持てばよいようにして妻は留守
国賓で来て天皇に謝らせ
必殺の弾丸は最後に残しとく
使つてはならぬ武器だが光らせる

岡山市

花田たけ志

七人の敵に丸腰などいない
占わずとも人間は皆死罪
朝夕のあいさつ暮しの手拍子か
中流の暮しと決めるさしが無い

岡山県

直原七面山

自信が喋らせる
晩成を母も信じ
謝っておけと母
折れて出たので困り

羽曳野市

中村優

新聞の記事に自分を置く怖さ
素晴らしい過去焼きつける走馬燈
正直を宝と信じていた不覚
雑兵が寄れば本音がうずを巻く

姫路市

大原葉香

気休めを言うて見舞いの義理果たし
独身という身軽さをもてあまし
生きがいの子らに求めて寡婦の汗
昨日より蟬の鳴声減った朝

羽曳野市

佐野白水

晴読雨読老後読みたいもの多く
旅中止したら歯痛が治りだし
夕焼けへあしたのプラン練り直し
秋の日の沈む早さよ老いに似る

守口市

羽原静歩

バレリーナ秋の深さへ落ちて行く
フルムーンまだまだ遠い年金で
日本の財政サラ金に似て
白内障ボックリ寺を夢に見る

西宮市

津冬冬子

それぞれの窓がドラマを聞いており
新妻の悪口聞いた秋なすび
波風をしずめる母の知恵袋
プールもうすっかり秋の雲が浮き

兵庫県

藤後実男

夫婦してのれんの味を盗んでき
露天風呂桶一杯に掬う月
人妻が無口でついてくる怖さ
阿呆になりきって二度目の職につき

岡山県

岩道博友

内出血なかなか消えないのも余生
見合する相手に小さな愛を貸し
生活の知恵広告が迎え水
胸騒ぎする弱点へ冬の風

出雲市

板垣夢酔

気短かは五分前から動き出す
負けて泣く勝っても涙甲子園
再婚は年金目当のふしがある
蟹の意地ハサミ犠牲に身を守る

交野市

山本テルミ

梅酒作るといつもの夏になってくる
カステラの味に染まったレモンテイ
つまみ出す郵便箱にあるロマン
小包の中から娘の声孫の声

東大阪市

崎山美子

初恋のおさげがかぶ遠花火
大げさな妻へ夫の生返事
サイレンの近さへ裸足のつんのめり
帆船の優雅な舞に酔うかもめ

西宮市

野呂鵜汀

隠さずも見人もなし露天風呂(黒部樺平にて)
露天風呂骨酒へ妻の手がのびる(黒部樺平にて)
雑魚は今大魚の餌にならんとす
小姑が居ると話がややこしい

奈良県

宮川古都路

勝気にもうれしい時の猫かぶり
腹の虫治めた頃に読みかえし
人気取り肩書きだけの事をする
形見分け値踏みにされた腹づもり

唐津市

木塚素石

焼けた膚シャワーの水と蟬時雨
夕立の山添いばかり寄りがたがる
台風は程良いものを歓迎す
平和なりポンポンと港明け

岸和田市

吉水照江

吹く風に秋の草花出番です
喜びは苦勞の後でかみしめる
恍惚の傑作残し先に逝き
反対を押し切り夢抱く若い人

鳥取県 森田布堂

還暦を過ぎしみじみとお茶の味
芸能界離婚で箔をつけたがり
議事堂の前に建てたい倫理の碑
骨壺に無欲になった骨を入れ

尼崎市 伊藤春子

留守に来て倅せらしい庭の花
曲り角暮らしの風があとを押す
さしかかる坂にフアイトがわいてくる
断った人が美人の人をつれ

羽咋市 三宅ろ亭

萩一枝八畳一間秋に生き
指匠師の真似ごと老夫婦覚え
氣宇宏大日記を埋める文にだけ
訥訥の弁に集会ざわつかず

和泉市 岡井やすお

賛成が出来る切っ掛け待っている
ガラス器に流水の山夏水
一日に夏と秋とが同居する
お遊びも肥しにしてる芸術家

岸和田市 芳地狸村

本音しか言えぬ女の純な口
代筆を泣かせる書体を持つてくる
大いなる秘めごとを持った古陶展
連れ立った妻が氣にする服の色

浜田市 佐々木裕

病一つ得てから生きる氣力満つ
九人の保護色借りて十のうち
妻という女に妬いても見る喧嘩
遅まきの趣味へのっそり粗大ゴミ

枚方市 稲葉星斗

ひらかたの菊師の技を見て廻り

丹後半島巡り(二句)

伊根の海鯨親子の悲話を聞く
出石そば何皿食べた家族連れ
柿時雨古書の整理も亦楽し

島根県 岸本輝水

狐狸に似て怖い女の毛皮ショー
還暦の意地が夜中の貼り薬
才女とて人生の節には逆らえず
確かめて己の影を踏んで見る

境港市 細木歳栄

指切りを思い出させた芒の穂
ストレスのほぐし代ですパチンコ屋
満月の障子に庭木コピーされ
温泉の中まで口惜しさ従ってくる

五十年すぎても会えば色に出る
島根県 藤原鈴江

一期一会と思えど思えど耐えがたし
背伸びする暮らしに馴れた足の裏

花言葉つないで飢を癒やさなか

島根県 北川民子

片付けて厨の窓の月きれい

ピヤガーデン男の嵩が小さく飲み

カマキリがカマキリ喰う秋の暮

太っ腹意外に小さな背骨だナ

福岡県 横地雅風

何思ふ亀の子海に走り出す

街の役尻の軽さと父祖の顔

恥かしく試しに染めた足の爪

右に陽が左にも射しローカル線

大東市 土岐トク子

酎ハイに午前三時の話あり

ふるさとの便り二度よみ三度よみ

秋風と共に亡夫は旅立ちぬ

経験が親身になって未亡人

島根県 木村はじめ

ちっけな地球に火種増えつづけ

宍道湖はやらぬと蜆のむしろ旗

ダムとなる運命の村そばの花

震災忌妻が米とぐ青い空

指切りをした妙齡と遠花火
大阪市 山根いつを

くすり指ケンマンしたのを見てただけ
薬屋へ走り走つても言えず

無理をした札は母への手術料

和歌山県 天満三千代

居眠りの文字が淋しい日記帖

呼びおこす童心ブランコこいでみる

老夫婦童話の種になる平和

敬老会嬉しわびしい御招待

大阪市 岡田ふみ

テレビ見て泣いたり笑ろたり震えたり

秋風が吹くと血圧顔を出す

食欲が秋の訪れ告げてくれ

娘が病んで食事仕事も手に付かぬ

堺市 藤井一二三

国貞葬翠先生書碑建立(二句)

師に会えるよろこび秋の草を踏む

聴雪の碑に師を偲ぶいわし雲

従兄藤井誠次逝く

おもいでが秋を悲しいものにする

芦屋市 竹中綾珠

隔日の注射休むと疼く足

体重がずしりと足へ感じる日

娘のくれた鈴虫うるさい程に鳴く

自選集

野村太茂津

豊作へ肩幅広い曼珠沙華

低い次元に合わして賽を振る思い

低い次元に合わして傷む盆の窪

低い次元の嫉妬がよどむ泥の川

低い次元の臆面もない自己主張

低い次元に合わして個性確かめる

水粉千翁

めがね拭く三面記事に目をそむけ

目にも物を見せてやりたい負けいくさ

七変化墨一色のいのち知る

筆を持つとき生きのびることを知る

行く末を案じていない総入歯

金井文秋

返答無用唐竹割りにされ

前進前進チャンスへ恥をさらけ出す

生きている証私のスケジュール

何喰わぬお顔おかしゅうておかしゅうて

差し向い時々灸をすえられる

米沢暁明

いまどきの若いものは世が変る

人間の灰汁死ぬまでは抜けきれぬ

生きている証拠にひとが好きになる

孤児の目にあれ父雲か母雲か

策略があつてひとまず引いておく
騙されてやればいい氣になつてゐる

市場没食子

風邪氣味でお寺檀家へ盆詣り
海に山にこがした肌で新学期
氣晴しと当てつけの旅日本を出
室溫にビールが戻る長話し
歳いても粗野で反省して腐り

月原宵明

泣けるのは男の胸が広いから
負け犬はボーフラの居る水を呑み
ロボットの電池が切れた終電車
長生きの秘訣は借りも貸しもない
成り行きでした指切りでもう忘れ

黒川紫香

寺古しほろほろ銀杏落ちはじめ
物足らぬ影が寄り添うひとり旅
どしやぶりをきまり悪そに猫戻る
愛想いいお内儀馴染みの様に言う
やわらかいお手だと握り返される

(前月分)

本田恵二郎

残念ながら喜寿の声帯やせ細り
自慢ではないが清六よりも下手
歌えぬが聞くのは大好き聞き惚れる
肩の荷の重さに耐える坂の汗
空想も楽しからずや地図の旅

本田恵二郎

遠山の霞に郷愁そそられる
紅葉の幕があいたと山便り
有りあわせあれもこれもと宅急便
とんで跳ね跳ねてとんでた夢を抱く
快食快眠そんな余生を授けられ

正本水客

清濁をのむと淋しい言葉吐く
自己嫌悪おとこは此処で引返す
かまきりの鎌に夕立晴れてくる
喪の明けた女の無口うつくしい
記憶から消そうとバラの棘を抜く

工藤甲吉

福沢諭吉この人もまた縁が無し

勲章が嫌いな人へ手を叩く

大阪の人を案じる熱い夏

名月にろうぜき者は見つけれ

借金も少し返せる稲の出来

大矢十郎

逢うている楽しき花火は次の次

自嘲の詩綴り佗しき宮仕え

セツトした妻へそうかと振り向かず

子等みんな起きてるチャルメラよく響き

サラ金に追われて里へ来た錦

橘高薫風

謝々と栞大人長箸で

死より先ず生おそろしき玉仏寺

蘇州では蘇州の歩幅塔二つ

山容の変幻天地玄黄と

再見と楚さん申さんあたたかし

河村日満追悼川柳大会

とき 昭和59年11月18日(日) 午前10時
ところ 鳥取工業福祉会館「鴻南閣」

鳥取市富安 電話23-3181
鳥取駅南口徒歩5分

お話 西尾 栗
兼題 「豆腐」
「しみじみ」
「大阪弁」
「叱る」
「ハーモニカ」
「議員」

席題 当日一題
兼席題とも各2句以内
会費 一、五〇〇円(昼食・作品集呈)
追悼宴 二、〇〇〇円(希望者)
投句料 八〇〇円(作品集呈)

投句のみの方は八〇〇円同封、
10月31日必着左記へ

〒680 鳥取市立川町二一八三(北村三歩方)

鳥取県川柳作家協会

電話 (23) 7806

— 同人 吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

奥谷弘朗

金網の破れを犬も子もくぐり

矢野佳雲

穴を見ればだれでもくぐって見たい本能を
持っている。犬も子も同じ穴をくぐっている
状況を、やさしい目でとらえていてほほえま
しい。

真実を追うと政治家にはなれぬ

安平次弘道

真実を追求することが政治家の使命と思っ
たが、近頃はそうでないみたい。
美しく老いた素顔を陽を愛す

小西雄々

作者の手柄が出ていて、温かいほほえまし
い句である。

棚の上で埃まみれの妻の欲

小出智子

買い過ぎたのか、捨て切れぬのか、ありあ
まる世相をユーモラスに指摘していて、共感
をよぶ句である。

正論を吐き末席にほつとかれ

福浦勝晴

とかく正論を通ず人間は、下積みにあま
じなければならぬ。末席にほつとかれの句語
が成功している。

似て欲しくないところが似る苦笑い

平田実男

どうして俺の悪い所だけがこんなによく似
てくるのであろう……と苦笑している父の氣
持がうまく表現されている。

口開けて口からも聞くへりコブター

堀江正朗

正朗さんでなければ生れない句である。状
況が目に見えるようで面白い。

指金の様に大工が角を折れ

土居耕花

我々が学んだ川柳観ビッタリの句である。
古いと言う人があっても捨てがたい。

おない年の友の計をさく蟬しぐれ

井上柳五郎

おない年の友の計をさき、ひしひしとせま
る淋しさを蟬しぐれでたくみに表現し、老人
のものの哀れを感じさせる。

老いてまだ子に従えぬ嶽を持ち

木村はじめ

年老いた農夫の氣持をうまく出している。
まだまだ農作業だけは子に譲れないとする心
意を感じる。

黒蝶よ舞うなひん死の友がいる

錦織文子

黒蝶が舞うと何んとなく不吉な感じのする
ものだ。ひん死の友を思いやる温かい切実の

氣持が出ていてよい。

すつぽりと帽子かぶろう四面楚歌

青戸田鶴

すつぽりの表現が良い。周りが敵ばかりだ
と、こうするしか道がないかも知れぬ。

是々非々を折衷案で酒にする

久家代仕男

是は是、非は非で行くと言つてもそう簡単
にはいくものではない。酒にする、がきいて
いて面白い句である。

いや味など言うなと嫌味言うて去に

児島与呂志

ありもまます、ありもままだに詠んでいて、
なかなか味のある句になっている。よく見か
ける風景である。

馬鹿になるだけを人様ほめてくれ

榎本吐来

処生術を教えてくれている。馬鹿になるこ
とはむつかしいものである。

爪切つてみたが自我だけ捨てきれず

奥山美智子

一本の虫歯が男をなやませる

崎山美子

行くべきや思案の髪をくしけずる

西口いわゑ

世の中の義理へ可愛い子を叱り

高橋操子

ビール売る子の父としてビール呑み

高杉鬼遊

ともかくも今日の幕だけ引いて置く
堀端三男

川柳太平記 (78)

川柳の群像

梶元紋太

東野大八

梶元紋太は本名文之助。明治23年12月6日

神戸市生田区花隈町の菓子商甘源堂に生れた。十六歳の時父の死にあい即日小学校をやめ家業に従事することになり、直ちに大阪の菓子店へ丁稚奉公に出た。

十七、八歳の頃、ふとしたことから川柳の句会に誘われ、その庶民的な空気が味に身にしみ、川柳に打込みはじめた。大正2年24歳の頃には創刊されたばかりの「番傘」の本拠西田当百宅によく通い、神戸の川柳ツバメ会の同人にもなっていた。大正5年ツバメを廃し「柳太刀」を興す。

「そのころの神戸は四、五の柳社があり柳誌も出ていてお互いに競争意識で張り合っていたが、四、五年すると疲れが出て、どの柳

誌も氣息えんえんといった状態となり、各社の有志や浪人組がなんとなく気分一新をのぞむようになった。そのほかいろいろの原因や動因が重なり昭和4年6月「ふあうすと」を出す。私が四十歳の時だった(紋太書簡)

「ふあうすと」が出た。偶然に出た。ほんとうに偶然です。誰が主唱者でもない。誰が発起人というでもない。同人一同が主唱だといえる。時は初夏だ。木の芽はぐんぐん伸びはじめた。寂寥を感じ倦息を覚えていたものが一斉に起ったのだ(「ふあうすと」創刊号「同志の人々」紋太)

——波だ風だ警め合って瀬戸を出る 紋太
これが同志創刊号表紙に題する句である。
「四十歳という年長者だから私がこの誌の

代表に推された」と紋太は謙虚に述懐しているが、同志創刊に対する並々ならぬ気組みがうかがえる。創立同人は十八名で、その中には山本浄平・房川素生・三条東洋鬼等で、この他に創立句会に参加し、のち同志を支えた鈴木九葉、大山一狂(竹二)らがいる。

「ふあうすと」は主義を標榜して起ったものではない。自らの姿をありのまま表現することに努力し、川柳を真つ向にかかげて精進することのために「ふあうすと」は存在する」

(「ふあうすと」創刊号巻頭言)

——ローソクは叱られてからしゃんと持ち

——よく稼ぐ夫婦にもあるひと休み

——樹の上に人間がいて下駄があり

紋太の代表作品が右の通りだが

「触るれば川柳となり、動けば川柳となる。

我々の総てが川柳となって発しなければならぬ。我々の唾は飛んで川柳となり、我々の眼光凝っては川柳となるというところまで往かなくてはならぬ、即ち自分自身が川柳ではないか(「ふあうすと」昭和5年3月号)

紋太の川柳主張の中で最も知られている

「川柳は人間である(昭13・6)のこれがその素地となっていて「全人抄」が生れた。

「私は気軽に川柳界に入り楽しく作句をし

ていたのであるが、だんだんむつかしくなり前のように面白さがなくなった（あちらこちらの柳論にふり回されて）あせるに似た気持ちからか、それとも産み月でもきていたのか、ふつと「川柳は人間である」という答えが生れた。案外安産だった。私は独自に「川柳は人間である」と決めてから大変気が楽になった。そして何か迷うことがあれば、人間は（自分）いかに生きるのがよいかを考えるのが癖になった」（「ふあうすと」昭和40年6月）

昭和19年紋太55歳の折、戦争激化、菓子商をやめ、月給生活に入るが、その後の二年間に家は戦災で三回焼かれ、母やわが子一人を失い、妻と五人の生活で戦後に及んだ。

「ふあうすと」は戦時休刊のあと昭和21年復刊し西宮市甲子園口に住みつき、ふあうすと同人たちのあたたかい庇護を受けつつ「楳元紋太川柳集」（昭和23）、「続楳元紋太川柳集」（昭和25）、「わだち」（昭和27）、「茶の間」（昭和29）を発売し、昭和37年紋太73歳の折、脳溢血で倒れ、臥床生活に入る。そして昭和45年4月11日死去する。享年81。

紋太の臥床生活は実に八年間に及んだのであるが、この間「ふあうすと」誌上に毎号作句の川柳雑筆・柳論を発表し、この間、同人

の人々はじめ柳友知己に對し、不自由な左手で多くの書簡を頻繁に記すなど、その超人的活躍ぶりは川柳界を瞠目せしめたものである。なかならず花隈以来家族ぐるみの交友にあった同人小池鯉生（浦和）あての書簡はおびただしいものがあり、その書簡の山を彼の好意で披見した筆者は、晩年の判読にも苦しむ左書きの書簡類には鬼気感すら覚えた。怖るべきその柳熱、川柳愛ともいふべきであろう。（筆者あてにも紋太書簡は二十通にも及んでいる）

「私は病床生活に入って却って作句を始めどしどし句の生まれる境遇になった。それは題を出さず目の前の出来事が題で、つまり無題主義という生き方である。それまでの私は約五十年というものの全部有題で作った。そして句が出来ないで切り口に迫られ、ふうふう言っていた。それが逆さまに句が出来はじめた。日に五句十句は平気で、月に四、五百は楽に出来、句帳が忽ちいっぱいになる有様だ。とどのつまり六、七カ所の柳社へ送っているところでもよい。（中略）大抵半分は没句にされている。私にすればどの句も背景のある事実から生まれた覚えの句が多いが、静かに読み直してみると、成程作家の私がこれが川柳

かと呆れる句が多い。（中略）一人静かに考える。何故だろう、早くいえば齢をとったからだ。どこかに理窟がある、講釈があるし、文句をいつてる。説明が多い。面倒で重くしい。私は反省する。つまり俗語を用いて人に判る様にすることが必要だ。若々しくて華やかで淡白で明るい方がよい。

柳多留は時に見るべし。（中略）つまり事実を背負って人生の真つ只中を進む。その履歴そのものが句そのものである。（中略）将来二十年もすると川柳は句域が広くなつて、人間ごとくものものになり、こうした句境がもてはやされる時がきつとあると思う」

以上は死去する半歳前の鯉生あての書簡。

「紋太作品を拾い読みするとき、その中から紋太さんの主張や人生観は掴みにくい。つねに作品を見続けていたり、一冊の紋太作品を読み返していると、紋太自身の他に何も混ったものがない。紋太の人生がしみじみと伝ってくる思いがする」（「紋太句集後書・房川素生」）

★次回は「紀二山」

俳風柳多留廿六篇研究 (十八丁)

鈴木 黄・石田晋一・南 得二
小野 真孝・本多正範・石田 成佳
大屋 六郎・八木 敬一・多田 光

故岡田 甫

288 三年ンていろはを上る本望さ

鈴木||有名な赤穂義士の仇討を詠んだ句。浅野長矩が切腹を命ぜられたのが元禄十四年三月、大石良雄以下四十七人が復仇したのが元禄十五年十二月、そして切腹を命ぜられたのが元禄十六年二月であるので、足かけでは三年と言っているのであろう。

石田晋||忠臣蔵仇討には賛だが、表面では平仮名の手本を三年もかかって上るのに本望とは、という意が必要なのではないか。

南||いろは仮名文字の学習をなしとげることと、赤穂浪士の仇討達成を引っかけただけの

句作で、「三年」は仇討達成までの年数であり、学業の方には深い意味ないと思います。

多田||私も三年は義士切腹までと思っていた。切腹は翌年十五年二月四日。

岡田||同右。

289 庭の面ハまたかわかぬに粘やのり

鈴木||新古今集巻三夏の部の源頼政の和歌に庭の面はまだ乾かぬに夕立の空さりげなくすめる月かな

この歌の文句取りであり、糊売行商人の句。

五月雨の晴れ間に売りに来る、洗濯物に使う糊を売り歩く糊屋の「のりやのり」の声を

詠んだもの。

多田||賛。行商ではないが、番所のさしみのうれるいい日より

という句に、雨譚が「糊」と注を加えている。自身番で売っていたのであろう。

岡田||賛。礎講、「庭の面はまだ乾かぬに」を新古今の歌の文句取とされたのは敬服。

290 網か居た跡へ蠟燭取りひろけ

鈴木||「網」ではどうも意味がとれない。「川柳江戸名所図会」で、石川一郎氏は綱坂の項で本句を会津名産の蠟燭だと解説している。

渡辺綱の旧跡、会津若松藩主松平肥後守下屋敷、ここで会津名産の蠟燭をならべることである。

多田 本句、『川柳江戸砂子』(上)にあり。会津蠟は特に有名だったのであろう。

岡田 綱は綱の誤字。

291 提灯におよばぬと仲国ハ出ル

鈴木 平家物語巻第六に小督と仲国の件がのべられている。高倉帝は小督に恋いこがれるが、小督は清盛に忌まれたので内裏から姿を消す。天皇は小督が嵯峨あたりにいる噂を聞いて、八月十五日の晩に仲国に命じて小督をさがさせる。八月十五日は満月であるので当然提灯は不用である。この時、天皇は仲国に竜の馬をたまわった。

十三夜だと仲国は栗毛也

仲国は中くやばでないおとこ

名月の御たづねものかうつくしむ

大屋 賛。

十五夜にくらひ勅使ハさが野也

爪音に勅使ハ嵯峨て駒を留メ

多田 賛。

岡田 同。

292 おじいにちつとかしなよと十五日

鈴木 一般に「十五日」というと、一月、二月、三月、六月、八月、九月、十一月、十二月と、それぞれ意味を持っている。本句の場合は、十一月十五日の七五三の祝日であろう。

七五三の祝いに着かざった孫を見て、「一寸私にも抱かせて呉れよ」と皺だらけの顔を笑いでくずして、おじいさんがよろこぶ様子を詠んだものであろう。

南 祭礼風俗であらう。

八木 吉原月見の新造を考えていた。

多田 色々に考えられ、私として判断しかねる。

岡田 同右。治定むずかしい。

293 イン伝を明けて橘式分て買イ

鈴木 「印伝」は印度革の略称。初め、印度から伝来したものであるからこの称がある。

羊又は鹿のなめし革の事で、至極柔かて手あたりがよかったので、種々の袋物に用いられた。

「橘」は橘町で、裏店や近くの薬研堀北河岸一帯には踊子と称する、いわゆる転び芸者の巢窟だった。

句意は、印伝革の紙入から二分(一両の半分)出して橘町の踊子買いをした、というものであろう。

酒池肉林へ橘をませるなり

南 賛。

三みせんが壺分いやらしいか壺分

たちはなをふところにして式分とられ

「橘」で踊子を、「二分」で踊り子をころ

ばした遊びであったことが知れる。

多田 賛。

岡田 同。

川柳塔柳箋

一冊 二百円
送料 二百四十円

上方前句付集の雄編

『明石人丸大明神三万句集』

(一)

阿達義雄

宮武外骨氏は、延享四年の『明石人丸大明神三万句集』の勝句九百番は瓦竹堂撰であると記されているので、念のために仮題『前句付初桜』に収められている句数を調べてみると、計九百二十一句で、この中に発句が二〇句含まれているから、之を除いてみると計九〇一句となる。(一句の差は数え方の誤によるものであろう。)

即ち、『前句付初桜』(仮題)というのは、実は『明石人丸大明神三万句集』であったのであるが、表紙が脱落したために、その書名が不明になったものと考えられる。以上によって、私は『前句付初桜』(仮題)

の正体を『明石人丸大明神三万句集』と断じ、なお、いろいろな点から調査してみたが、之を否定するような材料を発見することができなかった。

また、念のために『明石人丸大明神三万句集』や瓦竹堂李坡について、『俳諧大辞典』を調べてみた処、今迄全く研究されていない上方の前句付集であり、殆んど知られていなかった上方の前句付の点者であったことが分ってきた。

右に『明石人丸大明神三万句集』というのは、『明石人丸大明神奉納三万句集』という意味で、このような奉納句会では、一般

に勝句だけが板行されるのが例となっていた。

瓦竹堂李坡点の前句題の数

川柳評の前句付、即ち、川柳評万句合では、その題句——前句(題)の数は、三題又は四題が常で、それに一題又は二題の冠句題がつけられていた。今、これを川柳評万句合の宝暦八年九月十五日の摺物から例を引いてみると、

ねんの入レけりく

〇つんで置けりく

▲ゆるりくくとく

×首尾の能事〜

なま中に

というように示され、作者は右の四つの前句、又は「なま中に」という冠句題に對して、思い思いに選択して、五七五の附句、或は七五の句を考へて提出することになつてゐた。

ところが、『明石人丸大明神三万句集』の場合、その題となつてゐた前句の数が非常に多く、今迄の前句付の極限を示して、前句は四六題となつてゐた。

このことは重大なので、それ等の前句をその儘示してみると次のようである。

前句

能 よい日和かな〜
京 京もいなかも花の盛じや
雨 雨のぼろ〜
去 さりとハ〜
是 はハ扱これはさて〜これはさて
きら きら〜とふすまの引手きら〜と
朝 朝の事わする、斗日の永き
本 ほんにほんほに〜

片 かたほにこ〜
猫 ねこのまひ〜
心 心いそ〜
イソ いそ〜と心いそ〜いそ〜と
チン ちん〜と風鈴ちん〜ちん〜と
夫 それハ其それハその〜それハその
尤 尤〜これハもつとも
ツイ ついと床几にす、むつかほ
イヤ いやはや〜
行 行つもどりつ〜
賑 にぎハしや〜さてにぎハしや
キク 菊き、やう薄萩萩をミなへし
ヨシ よしやよのよしやよの中よしや世の
秋 秋ハ来にけり〜
入 入日ちり〜
カマ かまハぬかたへなをす行燈
浮 うき世じや〜
ア、 ア、浮世ア、うき世かなうきよ哉
御 御手が鳴ルそれ御手が鳴御手が鳴ル
青 青〜と松の青々〜と
ホシ 星のきら〜
硯 硯引よせ〜

横 よこ手をつつて我おりけるかな
カネ かねのこん〜
コン こん〜とかねのこん〜と
珍 めづらしい是ハ珍らしめづらしい
ヒヨ ひよ〜と鶯のひよ〜と
カケ かけて雫の落るまないた
雪 雪のちら〜
森 もりしん〜とものる、玉垣
叩 た、く灰吹〜
ハラ ばら〜としくればら〜と
ク くる〜とたばこのけふりくる〜と
帆 帆が見ゆる丸にやの字の帆がミゆる
サン さんぶ〜とよするさゝ浪
扱 さても賑ハし〜
千 千鳥のわたるあハち嶋山
天 天下太平〜
以上の前句四十六である。この中から各自思い思いの前句を題として選んで、附句を考へたのであるが、前句が七七の場合には五七五の句を案じ、前句が五七五の場合には、それに七七の短句をつけたのである。

(つづく)

水煙抄

黒川紫香選

今治市 野村京子

過去捨てた町にぼつんとある影絵

愛しあう夏の小指はお人好し

五十路来て母に重なる三面鏡

髪を梳く女の掌から鬼が出る

そして秋コーヒーさめて恋終る

尼崎市 田中晴子

やさしさの渦がわたしを弱くする

戴いたおはぎで済ます遅いひる

さびしくて音を拾いに街へ出る

約束を軽く破られそれっきり

よそ様の事情は軽くききながす

熊本市 永田俊子

わき道にそれた孤独に虫がなき

パズル解いて笑ってひとり敬老日

今日の風とにかく無事な風車

噴水の同じ高さに自嘲する

ヤジロベエふと造反がしたくなり

西宮市 紀市郁栄

過去帳に誰も知らない染みがある

暮参する姉も老いたり妹も

美しいうちに別れることにする

裏口でようやく首をたてに振る

知恵のない男が美人つれてくる

藤井寺市 赤木和子

ビードロの熔けゆく速さ秋が逝く

分別が憎しいとおし戻り橋

二、三日経って情けが沁みてる

聞耳を立てていたのは薔薇の花

憂きことがひとつ極楽とんぼにも

八尾市 高杉千歩

自負捨ててえのころ草と対峙する

水に流す術も心得老いの膳

四ツ橋で船場育ちを自慢する

仕事した汗憚らず昼の風呂

栓ぬきを思い出せない台所

尼崎市 福田 礼子

寝転ぶととても大きく見える雲

ライバルに情移ると攻め難い

小さな男と乗った丸木舟

秋夜長太宰治に酔うグラス

遠花火二人の闇が深くなる

熊本市 宇野 昭代

いい便り真赤なバラを買いましたよう

忙中閑コーヒー沸々わいている

親と子と言いたいことを言える幸

初孫にカメラ休まる暇がない

飽食のつけ胃カメラにのぞかれる

熊本県 大川 幸子

掴み取りなどは望まぬ短指です

堅い背まだまだ妥協望まない

紙くずが風の所在をたしかめる

突然の事で標準語が出ない

この所メリハリのない日が続く

大阪市 清水 康恵

雨上り路地の女がよくしゃべり

愚痴つめたふくろの置場所考える

にわか雨ひと息ついた花時計

珈琲館までがいつもの散歩道

米びつの中をロボット覗くなよ

和歌山市 後藤 正子

りんどうが咲くと逢いたい里の秋

澄み切った空へいつ気を書く便り

二泊三日イビキも愚痴も聞く枕

コーヒーゼリー名残りがつきぬ喫茶店

雨の日も風の日もあり米を研ぐ

高石市 浅野 房子

萩の露素足をぬらす貰い風呂

コーヒーが好きで序でにケーキとる

ひよんな町欲求不満が顔を出す

佗び住居出入りするのは猫ばかり

持札がもう無いと知った日の焦り

和歌山市 福井 桂香

赤ちようちんの上にまあるい月が出た

口づけがこんなやさしい白日夢

三角形でいると頂点から崩れ

虫ちろろちろろグラスを傾けて

台風の目の中で聞く平和論

大阪市 上田 柳影

雷がでかい散水して帰る

泣き言を言いにペットを抱いて来る

肌寒うなつて母から宅急便

家一つ潰した男の手が奇麗

自慢する相手がいないコレクション

尼崎市 丹下 玉子

花の種つけた風船使者となる

攻撃的な男の言葉胸を射る
塩壺が割れて夫婦の仲違い
躓いた坂から寡婦は強くなる
紙一枚に包む情けだつてある

長岡京市

木本如洲

生涯を頑固に父の重い靴
青年の主張に売れる絵が描けぬ
より添うて裏町をゆく恋もある
口笛を鳴らし近道して帰る
信楽の狸犯人知っている

高槻市

竹内花代子

新患が来た病室の賑やかさ
回診の医者 of 無口が気にかかり
もう少し生きててほしい妻の愚痴
汗も出ぬ杖もつけます黄泉の旅
点滴に酸素吸入痛々し

近江八幡市

前川千賀子

洗濯機回しおんなは救われる
衿あしのほくろの見える位置で泣く
モデルガンに今日も撃たれる台所
子に合やす歩調へ軽い靴を選び

富山市

舟渡杏花

下馬評へ浮かんで消えて元の椅子
何もかも老化で医師は片づける
ほんわかからキス迄時間かららない

バーゲンへ淑女の面がずり落ちる

名古屋

藤井高子

虚と実の谷間で少し寝ておこう
片耳であなたの噂聞いてます

そこは女蝶々むすびで締めくくる
今日華燭明日は喪の花はな屋の荷

尼崎市

野瀬昌子

夜の闇に不安なベルが鳴っている
会ったに小さくなって母老いぬ
ハイミスのいけずな話耳にする
静けさの森と一つになっている

宝塚市

丸上よし津

商人に算盤の音遠くなる
ゴキブリを見た真白いレストラン
友の計に暮しの乱れ整える
ぎりぎりに生きて金魚運ばれる

高槻市

笠嶋恵美子

秋立ちぬ歩道橋の風涼し
虫時雨庭の草引きあきらめる
磨かれる石の素直さ残されて
千羽鶴個室の窓は閉じたまま

豊中市

満仲きく子

裏口へまわってみたがやはり留守
挨拶はしないで済んだサングラス
上弦の月へジョッキの泡がとぶ

ちぎれ雲ひとりぼっちのキリギリス

伊丹市 榎谷郁子

新築の窓から送る大文字

赤とんぼ飛び交う白い駐車場

朝露に朝顔やっぱり夏の花

風鈴も夏のノートと共に寝る

鳥取県 中原汲香

安らぎをいつも視点の中に置く

熱い番茶から安らぎを溢れさせ

仏心の届くところに住む願い

救急車うなり私を通り過ぎ

吹田市 茂見よ志子

気障なこと書いた日記に若さ見る

鳩の待つ公園で播くパンの屑

句も出来ず一日が往く秋の雨

帰省した娘に付き合ってコンサート

寝屋川市 平松かすみ

脱出の人がこんなにパスポート

やっとこさパートが続く一カ年

コンサート先ず母さんに売り付ける

お灸の話でお齡がばれました

寝屋川市 岸野あやめ

自信家で毒も薬も寄せつけず

情熱の捨て場をさがす旅に出る

じゃじゃ馬と言えば可愛く聞こえるが

嫁ぐ娘の黙って焼いている写真

羽曳野市 吉川寿美

慶びは秋の走りの風に乗り

病室がいつち安らぐ病夫の傍

千羽鶴空の蒼さへまだ翔べぬ

大らかな気立てで妻の物忘れ

京都市 松川芳子

子の帰省祖母もビールを所望する

耳打ちをしても夫の無表情

石積んで旅の思い出残しとく

孫の無事願うた地蔵のよだれかけ

尼崎市 児玉歌子

思い切りサンマが焼けるマイホーム

口ほどに別れて居らぬ女の手

辻褄を合せてくれた借りができ

引出しに別れ話を仕舞い込む

尼崎市 吉永伊三郎

七色の薬を入れた袋提げ

マンシヨンの窓の数だけ月が出る

粋な影傘一本に包まれる

合鍵を静かに回す朧月

岐阜市 市川鱗魚

援護射撃する子が父にいる強さ

木守柿里の渡しはこの辺り

待ち呆けの顔がきびしいコンパクト

季が変る花屋の彩も秋になる

滋賀県 安田志津

盆三日休めぬ人の靴みがく
パンたべに来る雀にもボスが居て
ナイターが流れ一人でみるドラマ
何かある無口の孫がよくしゃべる

大阪府 古川美津枝

健康が一日ずつの銭を生み
男湯へ今日も三人子沢山
職人へ一言そえてお茶になり

台風の進路でんがな周遊券

東予市 小山悠泉

ライセンスに夢を燃やしている野心
夫婦舟暮しの舵は妻が取り
スラックスの裾から秋が忍び込み
特売をメモして妻の市場籠

吹田市 栗谷春子

すだれにも秋を覚える陽の光
薬草の香に似合わないしおらしさ
季節への移り変わりは鬱となり
転勤をとび立つ様な声で告げ

守口市 結城君子

フルコース真ん中辺で待たされる
同性の別れはゼスチャー丈のこと
水平線の雲の動きで日課くむ

ゴキブリホイホイ入場料はいりません

尼崎市 山田保蔵

仲直り拗ねた時間がおしくなる
バーゲンのメールが切手不足する
ハッタリのすきな男に芯がない
メガネ越しニラムじいさんお留守番

熊本県 高野宵草

お買得ですと儲けは伏せておく
シャッターを降ろせばデパート巨大なり
心配の固まりとして母老いる
のし紙は心ばかりと思うてず

高知県 山崎広風

民謡の海で生きてる大漁旗
円周を走り続ける駄馬の汗
歓びの視野に輝く万国旗
世界地図広げときめくパスポート

鳥取県 灘尾民子

都市砂漠隣鬼やら仏やら
ケースからときには出たい京人形
アンコールに応えドン帳揺れている
早耳が洩れる噂をかき集め

西宮市 松本一郎

家事育児深い眠りの中に妻
嬰兒の拳未来を握りしめ
小さな男大笑してみせる

地蔵盆牛乳びんに花も入れ

京都市 森川春子

気に入ったコマール出で母を呼ぶ

蚊に刺されつつ北斗星探す

名月を昼の空見て諦める

十六夜の月ものぞかぬ池の船

大阪市 布施サチコ

四捨五入してイコールの差で揉める

割引いて読むペンパルの世辞の妙

予選パスしたばかりに肥る慾

辛うじて禁句封じた電話ベル

西宮市 山片紀雄

秋高く一膳多いとろろめし

万葉をじっくりと詠む定退後

十人で十の正論政治談

女房は自由な金では買氣失せ

米子市 茂理高代

会う度に仲間の欠ける秋さみし

Ｕターン先ずはスタミナつけさせる

縄電車虹のかけ橋追って見る

帰省して茶漬の味に亡母偲ぶ

和歌山市 桜井千秀

サンルーム可成り暇そうな顔揃い

ペダルとめ落穂拾いと立ち話

願かけることとてないが朝参り

呼びリンヘ犬の態度で対処する

吹田市 井上照子

順を待つ病院の椅子色もなし

過疎の村枕木朽ちて草の中

スーバーに雨避け手提げ重くなる

夢詰めた宝石箱は閉じたまま

鳥取県 羽津川公乃

ロボットの誤算恋人欲しくなる

途中下車記念スタンプ又一つ

芒の穂しばらく秋を一人占め

年金の暮らしも税金追って来る

愛媛県 八塚三五島

肩書が落ちて気楽に出る説

パソコンは好き分数は大嫌い

立話四国の人と見破られ

再婚の話アイロン焼けすぎる

和歌山市 山川克子

香水をあげたら照れた母の鼻

内緒事安心出来る母の耳

高い靴履いた事ない母の足

村捨てた子等を責めない母の腰

和歌山市 神平狂虎

神さまと飲めば小さな灯が点る

神さまはけっしてしない種明かし

神さまを避ける帽子は深くする

神の掌の中で喧嘩をする夫婦

和歌山市

寺田裕美

大根へバトンタッチの甘藷を掘る

カマキリが秋の戸口で身がまえる

口数の端に本音を見破られ

鬼の目の涙もきつと温いだろう

出雲市

落合正江

袖着て私も強くなる覚悟

ささやかな背信夫を驚かせ

従いて行こ夫を信じて居る歩幅

鉛筆を削るとニコニコ朝の唄

守口市

森川まさお

貨物駅のバラック昼間も灯をともし

知らぬ町の橋をゆつくりわたるなり

夜のフェリーお伽の国に行かんとす

漁火は動かず煙草ながく吸う

竹原市

岩本笑子

じゃがいものこころをこう書けば夫の顔

菊活けて菊の願いを聞いてやり

実りの秋へ蝶は静かに舞い納め

明るさに支えられてる母である

弘前市

田中叶

たよりない男で皮をむいてくれ

労働歌ズックの底にガムがつく

手にのせて程よき石の重さかな

和歌山市

森敏子

暮れかけて洗濯ものに陽があたり

せかされて私の風車から回り

すがりつく思いで夕陽に染まってる

貝塚市

池田寿美子

韓国の松茸盛って客を寄せ

エレベータービルの匂いで満ちている

モーツァルト聞いて読書の秋愉し

芦屋市

上田佳秋

定年の老妻へ心で掌を合わす

定年の老妻パートをまだする気

子無し老妻結構俺で手がやける

倉吉市

淡路ゆり子

脱皮する子に手助けもしてやれず

譲る話を聞いてしまった鬼瓦

海へ来て長い手紙を月と読む

吹田市

西岡豊

会長と奉られてサロンパス

どの鍵も叩けば同じ自己主張

非常勤気ままな風に揺れている

竹原市

信本博子

届かない赤い夕日を電車追う

存在を主張しているごみの山

涼風に揚げ羽の行方定まらず

尼崎市

鈴木良征

一服の茶うけのうしろ厚く切る
子に添寝妻の団扇の風とまる
飲む打つ買う皆やったので呆けてくる

鳥取県 岩佐 富子

でも残暑のどこかで秋の音を聞く
白い花咲かせて日蔭の小さな意地
風鈴の素直さはただ風にだけ

豊中市 小畑 幹子

長旅の最初の宿の夜になり
決断の手紙ポストへ深い音
買替えた眼鏡で一人洋画見る

尼崎市 佐藤 美代子

注文をつける女のアイシャドー
ポーカーフエイス後のカード見抜いてる
一坪の庭蝶は友をつれて来る

唐津市 浜本 ちよ

ライオンの無情な愛を見習おう
底辺に人の情が滲み通り
訃を聞く日雨も哭いてる沈んでる

指宿市 渡辺 伊津志

手を挙げて稚気を楽しむ横断路
橋渡る傘に追われた蝶の恋
母宛に筆は大きいのを使い

大阪市 山田 妙子

マンションの迷子こおろぎいとおしい

旗色が悪いと夫いびきかき
ハガキからワンパク顔が飛び出して

島根県 堀江 百代

孫の守り行きつもどりつ黄昏れる
夕立のはげしき音に針休め
ささやかな秋を見つけた萩の花

羽曳野市 麻野 幽玄

幸いというべきか妻もすこし飲め
手の汚れ流す蛇口の光る水
嘘発見器より正確な母の勘

大阪市 松本 ただし

落ちた陽の冷たさ抱いて訃報来る
よく喋る男とおんなの終電車
ロボットが生理休暇をおねだりし

兵庫県 脇田 米朝

恋心だけは見抜けぬレントゲン
ソロバンを弾くとどこか水臭い
去勢した男がだんだん増えてくる

兵庫県 円増 貞子

ちっけな意地を通した日の誤算
友の死を思つてわびしい雨の音
うたたねへ手近なタオルかけてやり

守口市 長谷川 司

万人が認める美人にある毒矢
坊さんの肩でおつとめしてる蠅

作業服油がついている平和

兵庫県 奥野テル

炎天下雑草だけは濃い緑

廻り道人目を避けて水子塚

二百十日雲ゆるやかに赤とんぼ

出雲市 小玉満江

紬などシャッキリ着たい秋の風

運動会情無情の雨となる

店頭にずらりとほしい秋の靴

新宮市 山田平和

大掃除山高帽がありました

枝豆でググツと女の大ジョッキ

サンガラスかける程でもない女優

大阪府 長岡周太

真っ直ぐに生きて長屋に四十年

看護婦が異性に見えて回復期

銭湯に重役タイプ独りぼち

高槻市 芦田静江

潮花先生をいたむ

魅力ある披露淋しく耳の底

アドリブが生きて楽しいプロの味

ジョギングに秋を拾った廻り道

姫路市 人見翠記

子も孫も祖父そっくりの咳ばらい

墓守と話すひととき蟬しぐれ

孫達と枕並べた盆休み

新潟県 高野不二

釣銭の一円玉は貰つて来

クラス会酒呑む女になつて来た

カラオケは唱い手がまず満足し

豊中市 奥田満女

ギャンブルの法螺はみんなを楽しくし

老いてまだ花一杯の山の夢

職員もちよつと変だよ精神科

愛媛県 石手武

売店の手持ち無沙汰な雨が降り

倒産の余震が続く作業服

発車ベルバントマイムの別れする

枚方市 二宮山久

くるしさにたえた涙の美しさ

靴のひも締めて男の道を行く

パン食と向いあつてのおみそ汁

大阪市 日阪秋子

共同戦線時に嫁と手をつなぐ

すさまじきは猛暑蟬の亡骸よ

寺の塀落葉を焼いている煙

大阪市 渡部さと美

松茸は到来ものを待つとする

束の間の恋は成ったか蟬しぐれ

したたかに残暑へ笑顔のさるすべり

西宮市 朝山千世子

こぼれ萩逝きし趣味人懐かしむ
息子の仕事電話をメモに呆けられぬ
許し合つて欠点気にせぬ老夫婦

広島市 望月晴彦

おしゃべりな人面倒になる鸚鵡
子のためを考えている通勤車
謝罪する言葉が多いきりぎりす

樫原市 西本保夫

すぐ人に聞きたくは無い道を行く
会社への過去断ち切った朝の風
ひらめいたヒント風呂場の中にある

高槻市 梁川吉子

逸早く追悼商戦才女逝く
ひとり言言つてしまつてまわり見る
ビール注ぐ娘まばゆい年頃に

高知県 山下登舟

手花火に古里の夜は更けやすし
久かたの墓参ついでに栗拾う
稲架けて人影も無し千枚田

岡山県 小林妻子

屋根瓦私も日影欲しい顔
子育ての母の食事は何時だろう
人は皆地球のしわの中に生き

岸和田市 奥札子

親展の二文字に心乱されて
白たびの汚点ひとつが物語り
傷口を洗い流せる言葉選る

大阪市 北山悟郎

停年へ未だ働きたい服吊す
雨足が近所の暮しの音を消し
来世の契り妻から断られ

八尾市 古川覚然坊

一年に一度だけなり墓に水
貧しくもくつろぐとこのある暮し
温泉街穴場を探す宿の下駄

和歌山県 山田久子

新盆や去来する者しきりなり
子育てを終えた乳房にふれて見る
両の袖通す手のあるありがたさ

米子市 足立由美子

残暑から秋が走つてやつて来た
秋風が私詩人にしてくれる
親孝行せめて電話をかけてみる

岡山県 戸田種子

シッカロールつけすぎ芸妓の首になり
ストレスが溜まり本音を皆喋り
したたかな顔もニュースが映し出し

雲ゆきが悪く補聴器抜いておく
大阪市 稲本凡子

暦では秋現実には三十五度

五人目の外孫デンデン太鼓ふと忘れ

羽曳野市

天崎 只士

ガラクタを残したままで父は逝く
かくれんぼしたい男がもう居ない
転勤を知らないボトル隅で待つ

岡山県

藤瀬 比沙子

敬老日母の日だけはいたわれ

赤トンボ精霊船を去りやらず

終列車母を墨絵にして残し

米子市

堀江 純子

亡母に似た姿へ暫し佇ちつくす

留守させた老母へ駅弁買ってくる

翔んでいる女にゆれるイヤリング

山口県

高崎 雀声

四捨五入しても美人の枠にもれ

物干を一ぱいにして雨模様

上げ底で中元義理をすませおく

岡山県

後安 ぶさえ

帰り際ふとした言葉気にかかり

十五夜だゆっくり帰ろう影法師

仲間はすれされた子供が石をける

兵庫県

森脇 和子

子の夢を余白に画けるすばらしさ

愛嬌をふりまきさつさと孫は去ぬ

うたた寝の母へ気づかり羽根ぶとん

大阪市

横山 為子

宅急便注文外の母の愛

温情に心の鍵が音を立て

こんな日もあったと写真言ってくれ

熊本市

北川 一進

鐘の鳴る丘を歌った子も大人

精一杯知恵も借ります入試前

新聞のクイズに孫の知恵も借り

八尾市

鷺見 章

病むベッド月見ることもない眠り

難民の飢えを満たさぬ月が冴え

かき氷踊り浴衣を並ばせて

岡山県

伏見 すみれ

かくれんぼ仲間外れが鬼にされ

ささやかな生活に詩の灯をとぼし

習慣は時間が来れば腹が減り

青森県

富士 トキ

ど真ん中太刀打ち出来ぬ津軽弁

クロンボが二人生れて夏終る

待ちわびた雨の流れを飽きず見る

高知市

北川 竹萌

風鈴の吊り場去年の釘探す

豆の蔓くるくる絡み秋の空

親離れた子に苦勞強いられる

泉佐野市 大工 静子

老いてなお出会い頭に服の色

角とれたと孫手紙に書いて来る

鈴虫に茄子の木一本残し置き

吹田市 山田 里子

近頃は雷親父の稀少価値

夜勤明け夫に食べさすトロロ汁

アパートの小さな窓よりエレクトーン

西宮市 秋元 てる

台風に十和田湖の夏連れ去られ

酒が入りなめらかになる里言葉

おはじきを集めたように薬飲む

鳥取県 福田 あや子

率直な意見は何時もうとまれる

非行児に挨拶された明るい日

名月へ病母の願い有りつたけ

竹原市 石原 淑子

愛故に桔梗紫実に濃く

人生の折返し点だから焦り

ダイエット体重計がいけずする

羽曳野市 田中 隆二

十郎の宝を積んだみかん船 (大矢十郎氏還暦句集発刊)

泣き言もお世辞も言わぬ父の靴

中年のマネキン少し太いめに

寝屋川市 立床 晴風

ペンダコに暇な日が来る日曜日

おはじきにされて一円鈍い音

満腹へ聖徳太子置いて去に

大阪市 町田 達子

一坪の庭にも月が覗く夜

時々は初心に戻る経を読む

一羽の雀が孤独に見える小半日

川西市 野村 静雄

打ち明けて古傷一つ残される

ボinasの出ない会社も盆休み

茶柱が立って化粧に念を入れ

米子市 光井 玲子

針箱を開けぬ女で錆びて行く

手の鳴る方へ二度とはゆかぬ老いの坂

思いきり空を翔びたい籠の鳥

桜井市 前山 美恵子

ペンネームつけて自伝を書いてみる

秋のページ押し花きれいに出来上がる

草を抜くどんな隣が来るのやら

八尾市 椎尾 公子

今日もまた話がつきない友でよし

大福餅のおいしかった港町

裏道にスクールゾーンの白い文字

豊中市 小林 一夫

つま楊子ばきんと折った平社員

政治家は舞台の上でする握手

榎原市 中 島 正 次

治らない薬ばかりを飲まされる

めった斬り自分のことを棚に上げ

岡山市 千 原 理 恵

抱かれたネコ迷惑そうな顔してる

スキャンダルにフラッシュの音谷敷なく

西宮市 松 尾 志 保

情景が絵になっている片田舎

気を許す友と夜を徹し語り合う

今治市 月 原 つくし

血の絆切れず引かれて踏み絵ふむ

妬心抱く女にクイズ解けぬまま

出雲市 小 白 金 房 子

トッパ切る口三味線で母おどる

盆提灯箱に納めて亡父送る

竹原市 信 本 博 子

曇った鏡の中のファンタジー

はかなさを花火に想う夏祭り

西宮市 飯 森 泰 世

セーターを八十八歳遅々と編む

隣にて外人うどんするすると

泉南市 坂 根 流 水

秋風にグリコ事件は紛れこみ

辻地蔵落葉をあびて正座する

島根県 福 間 芳 枝

ご好意に揺らぐ女の細い眉

毒舌の一つが毒消し役になり

和歌山市 玉 井 豊 太

酒代は父の財布で飲みに行こ

警官が隣で何か話してる

益田市 里 本 たかし

白鷺が川に竹ちつづける余白

ゆっくりとクレール残暑の隅に廻る

島根県 園 山 世 似

朝顔にお早うさんと通り抜け

使い捨て時計でさっそう通学生

岡山市 松 本 元 江

嫁姑争うドラマ嫁と見る

嬉しい事の多くて今宵ねむられず

岡山市 矢 野 山 人

喜びの票の重さを胸にとめ

誇りなど捨てた余生がペダルふむ

和歌山県 森 三 枝 子

インテリの素顔のぞいた縄のれん

小遣をはずむと言えばいい返事

大阪市 田 中 節 子

お社をぬけてからすぐ山に入る

ゴロ寝して炎暑の刻をやり過す

鳥取市 武 田 帆 雀

ネクタイを日々替えて点取虫
艶やかなママで喫茶が混む理由

岡山県 二宗 吟 平

娘の家で語れば夜が更けてくる

看護婦さんよい人ばかりとほめている

島根県 田 中 ヒデ子

言わずとも心が通う古い二人

ふるさとの匂いただよう終列車

大阪府 今 西 静 子

睡眠薬いらぬ凡妻よい寝顔

これ以上言うてはならぬ茶をいれる

唐津市 山 口 高 明

道祖神拝んだ後の草枕

あの人を虜にしたい草の罨

八尾市 向 井 しづ子

台風雨が瓦に湯気たてる

甲子園熱球消えて夏移り

八戸市 島 田 昭 治

不況でも虫の音色が変らない

としよりの日課の一つ医者通い

島根県 深 田 ふさえ

止まれば淀む流れに竿をさす

望郷の想い電話の声うるむ

米子市 宮 本 佳女男

五十年母と妻とを使い分け

組に九死一生希う魚

岡山県 牧 野 秀 香

さびしきは怒ってくれる夫が亡く

只今と元氣帰った日の百点

高知県 小 沢 幸 泉

いじめっ子今日はチビちゃん連れ戻る

読みかけたページじやまする秋の風

大阪府 川 原 章 久

冥土には迷いかけたがまだ行けぬ

重い腰孫の喧嘩を詫びに行く

岡山県 赤 沢 沢の藤

茶が冷えてやっと切り出す肚の底

幸せと砂に書いた風が消す

岡山県 結 城 太 郎

あう度に挨拶なしで句の批評

にわか雨隣の分まで入れておき

兵庫県 野々口 ゆう也

紅葉に染まる切符で彼誘う

風の中八十路が秘めしある出逢い

米子市 大 田 みさと

途中下車やっぱりするんじやなかったな

玉手箱おばあさんにも上げたいな

弘前市 真 喜 内 實

一日の無事こおろぎの歌に佇つ

今日の日の成果を見抜く風呂かげん

鳥取県 牧 田 文 子
遠い糸たぐれば回る走馬燈
歳月に痛い拳が温くなり

岡山県 山 本 玉 恵
一本の糸をたぐって亡母に逢う
女に戻って帯をすこうし高い目に

大阪市 田 渕 晴 子
人情も金で割切る世相なり
気の利いたガイドだったとバスの旅

大阪市 堀 口 欣 一
あの人も土に還った曼珠沙華
湊町駅を大阪人知らず

西宮市 待 田 麻 黄
野良猫も情けがわかる膝の上
道端の人情厚い田舎道

島根県 森 山 竹 野
神妙に解らぬままのお経聞く
鈴つけた猫に足元うろつかれ

青森県 波 田 だ お
パーセント外れて傘は邪魔になり
十六夜の月が窓から覗いてる

高知県 山 下 登 舟
暎をとじて過去を振り向く雨の音
捨てて来た村が恋しくなる真夏

鳴門市 八 木 芳 水

ねずみ草たけた男でよく太る
お疲れさん自分に聞かす縄のれん

大阪市 板 東 倫 子
お家芸も大和魂では勝てぬ
孫と居る一刻マリアに近くなる

大阪市 山 脇 正 之
古里に時代の嵐吹きまくる
同情の口につられて詐欺に逢う

鳥取県 松 本 み ぎ
政治家は握手が好きで票かせぎ
花道をしらぬ老母の手内職

大阪市 権 安 達 一 郎
情だけを無心に欲しい宵がある
お墓にも詣りたいのだが遠くてね

岡山県 富 坂 志 重
全世界愛の一字で結びたい
年老いてとほける術も身につけて

新宮市 船 越 正
買い溜めし禁煙記録更新中
四、五階へ上がれば見える遠花火

八尾市 葛 幸 子
おばけかと馬鹿にしたよな四歳児
捨てた猫気になりさがす夜の辻

八尾市 松 下 蕉 露
又一人減って恩師の墓参る

棒グラフ無口な奴ほどよく伸びる

和歌山県 西村重彦

子育てに中年親の恩を知る

宝山寺登りつめればどつと汗
名月に人それぞれのドラマ持ち

中年はたまには浮気したくなり

豊中市 辻川慶子

大阪市 塩田新一郎

老年の厚かましいのもボケの内
仲裁には力不足で先に逃げ

草の中すつくと立って百合の花
枯れてなお老松巖と岩の上

大阪府 岸本豊平次

富田林市 松本今日子

見飽きたか添乗員の無表情
地蔵盆ゲートボールの仲間たち

草叢にスネたボールの昼寝みる

大阪府 松尾柳右子

大阪市 橋本悦子

栗はせて顔赤くした柿の群れ
けつまずく石は無いけど歩道橋

毎日を燃焼しきって暮したい
ポーツとしたハンサムな医者に手をとられ

大和郡山市 岡田すみれ

島根県 高尾よし子

湯の町の里の内湯がなつかしい
孫電話友と語りて楽しそう

ジーパンを干して少女に秋の風
病む夫涙もろうてよく笑う

和歌山市 三谷周三

岡山県 池田半仙

ビール瓶並べ肝臓まだ元気
指折ってする足し算で指たらず

辞書にない和製カタカナ語に困り

和歌山県 北山凡太

大阪府 山本炉斉

剪定が過ぎて庭木に詫びを入れ
撮りたいが撮られたくない行楽地

病み上がり手当り次第に食べ歩き
夕立に昼間の疲れ忘れさせ

大阪府 高橋八重

兵庫縣 平和茂一郎

口程に身体動かぬ情なさ
許さないこともままある浮世には

九回裏情無用のホームラン
物忘れひどくなったと妻が言う

島根県 岩田三和

わが村はコケコッコーで夜があける
竹筒に情を詰めこみ宅急便

大阪市 服部 頼一

愛情を忘れ生徒に揺さぶられ
子の左遷暮しのリズム狂わされ

岡山県 後安 江山

庭の虫鳴いて初秋の日暮時
夢に出る亡夫は元気でやさしくて

大阪市 平井 霧芳

鶴折って平和を願う戦争展
かきしじみエクスにすれば高く売れ

兵庫県 伊沢 午郎

日韓首脳会談心で情通い合う
佐度情話米若師匠の名調子

島根県 喜島 ノブ

鐘の音に学童陸橋駆け上り
群れて咲く百合が病者をなぐさめる

唐津市 相葉 あき

食欲が目立つ娘の成長期
福相な貌に微塵の欲もない

ジュニアの部

藤井寺市 赤木 奈々

秋ですネオロギたくさんないている
プレセントいっぱいほしいたんじょうび

枚方市 二宮 摂子

社 告

若柳潮花氏死去に伴い60年度より路郎賞並びに川柳
塔賞選考委員は次のとおりになります。

■路郎賞選考委員

■川柳塔賞選考委員

橘	高	薫	風	高	杉	鬼	遊
正	本	水	客	谷	垣	史	好
黒	川	紫	香	河	内	天	笑
野	村	太	茂	津	板	尾	岳
西	田	柳	宏	子	小	出	智
							子

やつきよくや顔の薬はないかしら

大ぜいでピールのむときやえんかいだ

枚方市 二宮 正よし

くつをはくくつべらわすれたお父さん
母さんが手づくりケーキつまみぐい

豊田市 いぬづ かゆかり
(五歳)

おじぞうさんはなにつつまれきれいだね
かゆいなあまつくろいかにさされたの

米子市 金岡 みさと
(三歳)

ありさんも汗がいっぱいでてるかな
かたつむりのろのろなのにもういない

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

田中笑風

不倫の恋汚れた足袋をそつと脱ぐ

鈴木良征

不倫の恋を汚れた足袋と重ね詠みした表現もよく、下五「そつと脱ぐ」で罪の意識と反省で救われたのが印象的にした。

人形で死にたくなって笛を吹く

茂理高代

きわめて素直に人間の脆さを見つめて時の大切を詠いあげている。

敗けた背を叩いてくれる影法師

田中晴子

拍手を送ってくれる影法師に敗者は心の安らぎを覚える。人間愛の真随である。

噴水が別れ話を聞いている

上田佳秋

噴水を客観者に見立てたところが面白い。寝ころんだ指が植木を指図する

竹内花代子

中年夫婦の平和な一コマを見るようでユー

モアさを感じる。

半分はわかつて欲しい鼻の汗

舟渡杏花

実感句だろう。他人の受け止め方の如何によつて虚しい時がある。

横丁を曲ると人情もろくなる

福田礼子

市井川柳と言ふべきか、庶民のお人柄が伝わってくる。手馴れたものである。

ああ中年妻はバイトで子は塾へ

田中隆二

愚痴だけではない。「ああ」で中年男の寂しさが胸を打つ。

風船の遠くに飛べぬ空もある

木本如洲

社会性を見事に風刺表現されている。誇る子は居ないがみんな親思い

小西悠泉

さりげなく言い切っているが親と子の絆を一層鮮明にして心温まる。

暗算の下手な男で嘘を言う

紀市郁栄

人生観の客観視にそつがなく、嘘を言う語で人間臭がにじみ出ている。

来客の去つて扇風機だけ廻り

高崎雀声

一つの状況でも、「去つて」は逆のところに目をつけた描写表現である。

誕生日ローソク吹く息貸してやる

山口高明

ほは笑ましい誕生日。小さな子か孫の期待

と自立心を願っている。

ロボットよ愛情并当作れまい

山田里子

現代世相へ怒りをこめた主婦の愛情がにじみ出て共感させられる。

四つこはぜ一つ外れて出る噂

吉川素美

他人の位置ほど恐いものはなく、むつかしいものはない。人格を疑つた目で噂も深刻に広がっていく

致死量に女の賭けが隠される

児玉歌子

人間不信になったとき、思いやりは一瞬に失せて自分本意に誘われる。半分は心の隅で生きていたい願望があつて一粒の差にギリギリ命を賭けるあり様に同情はない。

面白いとこへは少し酔うて行く

野村静雄

自問自答が素直に出て、男性の半面を覗かせる。表現に笑えぬものがあるのは、人ごとでない所以である。

母という鏡を抱いて狂えない

淡路ゆり子

道順を変えて思わぬ裏に落ち

灘尾民子

レーガンの言葉で揺れる世界です

西村重彦

言訳を考えているイヤリング

浅野房子

耳よりな話へ悪人ついてくる

二宮山久

龍神温泉

スケッチの旅

西尾 栗

ちよつと變つたツアーに参加した。

昭和五十九年八月三十日午前九時大阪駅西口に停つたバスは、朝日新聞のマークをつけていた。このバスのタイトルは、奥高野と龍神温泉へという名のバスで、肩書には楽しいスケッチの旅と涼しい竜神スカイラインというキャンペーンがついていた。

ゾロゾロと乗り込んだ人々は、画板を抱えた者、画板を肩からかけた者で、ちよつとした芸術家スタイルの人々であった。ころもに添乗員のNさんに参加者の人数をきいてみると、男十一人女二十四人、内カップルが四組で、指導者の河本和子先生（光風会会員）を入れて三十六人という総勢だった。

渋滞の都塵をぬけて河内平野に出て、高野

山頂、清浄心院へ着いたのが十二時であった。精進料理の中食を了えて庭に出ると、沙羅双樹の樹があつて、既に双樹をスケッチをする人があつた。

十三時にバスは発車して、芒の穂のなびくスカイラインを快適に走って、護摩壇山を十三時四十分に通過して竜神温泉へ着いたのが十五時丁度であつた。休憩後部屋割があつて私の部屋は三階の「あやめ」の間で八畳に四人であつた。明治四十二年生れが二人、明治四十五年生れが一人、大正六年生れが一人であつた。そして、必要道具をもつて三々五々宿をあとにした。日高川の溪流に下りてゆく人、橋に佇む人、ガードレールに腰かけて山々を遠望する人、と思ひ思ひの足場を作つてスケッチブックを拡げて絵の具をといていた。六時半が夕食だから、それまでに描き上げるよう申し渡されていた。私は常々スケッチが好きだが、どこから手をつけてよいか、構図のとき方、省略の仕方、などは非先生の絵筆を確めたものと狙つていたが、男物の古いペラペラのパナマをチョコナンと冠つた先生は、谿に下り、丘に上つて、スケッチをする人々を見て廻つて何かとアドバイスをしていた。私も描かないとアドバイスしてもらえないから、道端の石に腰をかけて、川向いの露天風呂を描いていると、先生が廻つて来て親切丁寧にアドバイスしてくれた。そして、先生の曰く「宿の女将さんは指導者の先生は

アナタと思つていましたよ」と挨拶されたのには驚いた。例のカラシ色の帽子の下に白髪のカウチのウエーブがのぞいているスタイルは貧乏画家に見えたのであろう。

スケッチの見上げる空は既に秋

私は一時間余り描くと嫌になつたので、止めて露天風呂に入った。入湯料は二百円だった。風呂は河原の石を組み合せて些かぬるい細長い風呂だった。二〇〇〇円の値打は全然なかつた。かてて加えて、蛇が翺んで来て、肩先と左の腕を射した。早々にして宿に帰つて冷蔵庫のビールを出した。ビールは黒ビールで値段書に五〇〇円と書いていたのにはいたく感激した。十日程前に泊つた羽合温泉のビールは七五〇円だったからである。そこへ芦屋のMさん、仁川のMさん、貝塚のIさんが帰つて来た。そして次々にビールをぬいて罐詰を開けた。何のことはない、山賊の酒盛りという状態となつた。

二階の夕食場へ下りてゆくと、私達は一歩あとで、先生の横に四人の座が残つていてビールにジュース、日本酒が適当に出ていて鮎の塩焼、鯉の洗い、卵焼、山菜、高野豆腐、とりわけ珍しかったのは虎杖の和えもので、ナンとも素朴な味であつた。

食後、部屋の片隅に添乗員のNさんと先生と陣どつて、寸評をする段取になつていた。先ずNさんが、今日のスケッチを会員の方にむかつて紙芝居のようにして差しあげると、

邪馬台国の卑弥呼のような真赤なドレスを着た河本先生は「ここんとこを省略してしましましょう」、「空の色が秋の色ではありませんね」、「川の流れがよく出ています」と一枚一枚、Nさんがかかがる絵について批評されると、あやめの間の四十二年生れの二人は口数が多くて、先生の寸評に寸評を加える。笑いで何時の間に、あやめ組というネームをもらった。

スケッチをされるような人達は、流石優雅で八時半には解散した。

この温泉は宿の内風呂が総横造りの湯殿と、町の共同風呂と露天風呂の三つから成っていた。

寝る前の一浴びにと、横造り内風呂へ下りて行った。丁度十畳位の湯槽と六畳位の洗い場で、浴槽は底も框も横の木造りで清潔に掃除されていた。湯は「役の行者発見から、弘法大師云々」の効能書のある蛇口から、こんこんと落ちて框から温泉は溢れ出ている。自分分は先刻入った露天風呂の仇討をここでとったような気がした。あやめの間へ帰ると、三人は布団にごろ寝して雑談をしていた。私は横の風呂の優雅さと素朴さを激賞した。

クーラーをとめて窓を開けると、さしもの残暑もここだけは別天地だった。日高川のせせらぎの音が耳について眠れなかったが、何時しか夢路に入った。

六時に眼が覚めた。夕べの風呂が忘れず

早速楊子を咬えて下りて行った。先客が一人あった。今度のツアー参加の一人の八十歳のお爺さんであった。昨日画板を抱えて橋で会った時は杖をついておられた。

あやかるように、背中を流ししようとうとうと夕べあやめ組の方に流してもらったから結構だと言った。そう言えばMさんは、そんなことを言っていた。健康法を訊ねたが、若い時に自強術をやったが、今は別に之ということをしていいえや、自己流の体操だろ

うかねと江戸ッ子がとびだしたのは驚いた。湯から上って川風に吹かれてみると、床板の上にカナブンが仰向けになって死んでいた。

それから、今日のスケッチの下見に出かけた。吊橋の方へも行ってみた。温泉寺の方へも上ってみた。どこも余り景色が佳すぎて、絵ハガキのようなとり合せであった。宿へ帰る道すがら、露草がブルーの色鮮やかに朝露を含んでいた。水引草の紅が目についた。自分は思わず水引草の一本を手折って宿の洗面所のコップにさした。朝ご飯に下りる時、仁

川のMさんは「西尾さんがさしたの、風流ですわね」とほめてくれた。

八時の朝食後、十一時半迄スケッチというスケジュールであった。自分は先ず郵便局へ行って、例の記念貯金をした。そして温泉寺の樹影の坂の上に陣取った。

温泉の町の坂の下りの下駄の音

その境内の一隅につくばい(蹲)があつて、宛から清水が落ちていた。例の大菩薩峠の机竜之助が失明寸前、この奥の曼陀羅の滝で洗眼治療したところより引いてある清水だと、立礼は物語っていた。

十一時半にバスは出発した。そして一時に高野の奥の院へ着いて各自食事をした。

名刺交換から、私が川柳をやるということがわかった。

「先生ノ井上信子さんという人知っていますか」

井上剣花坊の奥さんのことかと思うと、京かがみの自転車井上さんのことだった。

「私の元の姓は西尾ですわね、嫁いでMになってますけど、先生、なんとなく、なつかしいもんですな」

自分の何時もよく言う、同じ故郷で男女同権(県)やな、なつかしいアのお株をとられたような気がした。

帰りはもと来た道をスイスイと走った。そして河内長野をすぎて高速に入ると、今日の午前中のスケッチの寸評を昨夜のようにされた。あやめ組は疲れたのか、軽い寝息をたてて、寸評に半畳を入れてこなかった。

この閑静な山の出で湯で、川柳和歌山と川柳新宮と大阪の各句会と合同で川柳大会をしたいものだと思った。旅館の名は下御殿だったが、五十名が目一杯限度であるのが残念に思ふ。やれば分宿でもせねばなるまい。

愛染帖

橘高薫風選

青森市 工藤 甲吉
街行けば麻生路郎に似た人も
碩のままで鶏頭赤くなり
大阪市 西森 花村
頼杖の頬も冬枯れして来たり
仁王さんどちらが強い右左
木子市 八木 千代
おとなしく寝たふりをするマツチ箱
声をかけ合う鶴たちの旅支度
藤井寺市 赤木 和子
えんぴつの木の香に想う故郷よ
前世はスピッツだったような気も
大阪市 小出 智子
人はみんな他人で銀杏が散っている
ふるりの堀を忘れる筈がない
寝屋川市 堀江 光子
色褪せる写真も齢をとるように
近ごろは眼鏡を外すほど泣かず
今治市 月原 宵明
少年と少女螢を捕つただけ
世話女房に毎朝財布調べられ

笠岡市 木山 遠二
男の友情女は知らぬそれでよし
寝たきりの窓を動かぬはぐれ雲
弘前市 波多野 五葉庵
寮歌祭弊衣破帽の声になる
説法が身近にせまる五十坂
富田林市 岩田 美代
空蟬がはらりと夏の葬送譜
この人も針の筵を知らぬらし
和歌山市 西山 幸
逼塞の庭にも秋の草が咲く
秋の燈とひとの表裏をみつめる
羽曳野市 麻野 幽玄
月見草私は疲れてねむります
客の過去知らない嫁の愛想よし
守口市 結城 君子
バス席の前のうなじが亡姉に似て
端正な桔梗に蝶はためろうて
岡山市 川端 柳子
それからの挨拶お身体いかがです
わたしには無いものがある歩み寄る
堺市 高橋 千万子
当人に会えば笑ってけりがつき
実家もつ親はたよりにならぬ位置
寝屋川市 江口 度
頑固者首振りだすと止まらない
入るのは止そうもの巢にくもが
島根県 堀江 正朗
幸に馴れると塩からさも忘れ
雨音へ草木は背伸びするんだな
大阪市 中西 兼治郎

逆転の出来ぬ巨人へ腰を上げ
宴会の位置で社長を判断し
伊丹市 榎谷 寿馬
遺品あり時計の電池まだ切れず
弘前市 田中 叶
墓の前定刻どおりバス通る
唐津市 浜本 義美
退院を報告にゆく父の墓
唐津市 浜本 ちよ
声荒げ入院の夫はげましぬ
高槻市 河瀬 芳子
煎餅が入っている程葉くれ
米子市 林 荒介
潮騒のなかで葉書を待っている
名古屋 越村 桔梢
履き捨てられた草鞋は千里の旅想う
羽曳野市 中村 優
曇る日も疑いもためぬ向日葵よ
指宿市 渡辺 伊津志
幕揺れるように山峡雨が降る
鳥取県 新家 まさる
神々を埋めた砂漠に還る風
和歌山市 神平 狂虎
秋風よ垣根を越えて来られるか
尼崎市 春城 年代
美しく老ゆる紅ならたじろがぬ
尼崎市 春城 武庫坊
遮断機でエアロピクスの足ぶみを
米子市 光井 玲子
母の毬解けぬ謎々たまつてる
西宮市 朝山 千世子

萩こぼれ逝きし趣味人懐かしむ

富田林市

藤田泰子

まだ早い出口を探す齡でない

西宮市 松本一郎

鬼ごっこ深追いしすぎて日が暮れる

米子市

堀江純子

瞳そらすとボール勝手な方に飛び

米子市 菅井とも子

一匹の蝶が道草ばかりする

米子市

堀江純子

日曜日神の福音亮りに来る

宝塚市 丸山よし津

行列のひとりて後へもう引けぬ

米子市

林瑞枝

人妻の逢わぬ逢わぬの糸ぐるま

近江八幡市 前川千賀子

頭上からキジ鳩週休一日制

島根県

小砂白汀

大正女荷物は負うてまいります

米子市 野坂なみ

還暦の秋から低う締める帯

寝屋川市

岸野あやめ

神様の後姿がみえてきた

米子市 政岡日枝子

割り算で残る情けを未練とや

羽曳野市

吉川寿美

八十を過ぎると齡を言いたがり

大阪市 朝倉利義

自我埋める砂地くずれてばかりいる

今治市

月原つくし

喜怒哀楽彩さまざまな積木積む

大阪市 江城修史

老兵の意地をつらぬく五分前

和歌山県

天満三千代

決断をする度虹が小さくなる

益田市 里本たかし

誕生日一人で祝う黒ラベル

豊中市

田中正坊

夕焼に喝采聞こゆ過去を追う

吹田市 井上照子

ふところに亡母がまだ住む三回忌

岡山県

山本玉恵

片隅は仕事の話通夜の席

唐津市 仁部四郎

精薄の妹哀しサラ金禍

八戸市

島田昭治

曖昧に受けて答えて通し合ひ

高槻市 笠嶋恵美子

山里に稲穂うねって海憶う

兵庫県

野々口ゆう也

秋風へ女失うものばかり

高知県 赤川菊野

円やかさ禅を極めているそつな

倉敷市

藤井春日

駆け足でくる冬音に寒い耳

島根県 堀江芳子

野良犬の奇麗な方は妻だろう

岡山県

土居耕花

世渡りの下手な男が簾を買う

島根県 木村はじめ

最善の策を封じた多数決

岡山県

直原七面山

八尾市

古川覚然坊

新札の肖像けなす縄のれん

唐津市

久保正敏

りんどうを摘めばモンベの青春恋し

大阪市

渡部さと美

飲めるだけのんで酷暑を耐え通す

和歌山県

浦野和子

最夜中の思考は虚無へ辿り行く

大阪市

兼松宏安

地蔵盆子供毎年減ってゆき

島根県

榊原秀子

振りむくをたしなめられてからの日々

和泉市

岡井やすお

甲子園男が肌を焼くところ

和歌山県

松原寿子

運命には逆らえぬまま花言葉

島根県

松本文子

秋の詩デジタル時計も一人言

羽咋市

三宅ろ亭

綱渡り下手な男も生きており

岸和田市

古野ひで

老いてなお一途になれるものを持ち

高槻市

奥田みつ子

姑と亡母いつしか影が重なって

高槻市

田崎あき子

友情の中で疲れる病弱者

弘前市

真喜内 實

先妻と後妻の写真笑あわす

大阪市

上田 かつみ

老醜にオーデコロンも匂わない

羽曳野市

天崎 只士

降圧剤飲んで今宵もデートする

羽曳野市

天崎 只士

和歌山県 北山 凡太
指先が触れた途端に死ぬ羽虫

岸和田市 原 さよ子

披露宴仲間が宴を盛り上げる

鳥取県 福田 あや子

ライバルの直球ファウルばかり打ち

芦屋市 竹中 綾珠

航跡は暫く白く尾を引いて

鳥取県 淡路 ゆり子

山びこにたずねて見よう子の位置を

鳥取県 川崎 秋女

夫には内緒真黒い真珠購う

高槻市 梁川 吉子

アンケートだんだん本音にふれてくる

岡山県 千原 理恵

大人の恋ちよつと気取ってさようなら

米子市 小西 雄々

鉄置く場所に鉄のないあせり

平田市 久家 代仕男

耳の栓すこしゆるめて聞く噂

新宮市 山田 平和

人類の葬送の曲聞こえろ

米子市 雑賀 美世

フルムーン気に向くままに途中下車

堺市 吉本 千代

手術後のあかい顔も又心配

大阪市 北 勝美

女人堂お竹地蔵にみる哀史

高知県 山下 登舟

憤満の汗へ扇子をばたつかせ

出雲市 園山 多賀子

合鍵のない箱女は一つ持つ

名古屋市中区 藤井 高子

満月のそれは喪の日も華の日も

倉敷市 斉藤 通風

つくづくと出湯で眺む老いの爪

豊中市 満仲 きく子

吾亦紅思い思いに子は巢立ち

西条市 片上 明水

定年後だんだん財布小さくなる

鳥取県 松本 みさき

二次会と朝寝をまとめ愚痴をきく

米子市 茂理 高代

許せるかたつぶり時間かけてみる

笠岡市 松本 忠三

老母への見舞いに哀れ無表情

愛媛県 石手 武

サングラス取ればやさしい目に出会い

広島市 望月 晴彦

野良犬が性に合ってるアルバイト

西宮市 津山 冬子

ひとり居の小さい庭に救われる

大阪市 大野 武太

切ないが百まで生きたフランタて

今治市 野村 京子

ネジ巻いて巻いて背中が丸うなり

鳥取県 佐々木 裕

Uターンが赤い新車を乗り入れる

岡山県 松本文江

いたわりの言葉素直に出てこない

山口県 高崎 雀声

教え子のいたずら許す年齢になり

和歌山県 木本文子
暑さまで夫婦げんかの種となり

吹田市 栗谷 春子

うとまれた夏も終りのすだれ巻く

仙台市 川村 映輝

きらいな物まで食わせて呉れる妻

鳥取市 武田 帆雀

弾倉にいっぱい詰めた話し方

和歌山県 桜井 千秀

夢一度叶ってからの神信じ

米子市 青戸 田鶴

木綿縫う糸のきしみに耐えている

米子市 青戸 田鶴

投句先 千560 *

豊中市中桜塚三丁目13-15
橘高薫風苑(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「歩く」 選者 森中恵美子

締切 11月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市東区馬場町3-43 NHK
大阪放送局「さわやか広場」係

発表

11月25日(日)ラジオ第一放送
午前11時5分から



若柳潮花氏を悼む

昭和59年9月10日 歿

9月12日 告別式

弔 辞

謹んで故若柳潮花君の霊前に捧げます。

潮花君よ、何故先に逝ったんだ、そんな野暮な事は言いたくありません。

生前の或る日、三人の中で一番先に死ぬのは僕だからきつと君が面倒を見てくれるだろう安心して死ぬると言った事がある。その時は冗談と思い「馬鹿言うな、病氣もあれば不慮の事故もある、誰が先に逝くかも判らんがその時はお互いに助け合おう」と言った事があった。

亡くなる直前、家族の方に「わしが死んでも紫香君が後々の面倒を見てくれるから心配するな」と言われたそう。私が急報で駆けつけ、君の言葉を聞いた時、暗然としました。それだけ私を頼りにしてくれた潮花君、君とは大阪の中津第一小学校で知り合い、お互い

の小ささをかこち合いながら意気投合し、その後君は日立造船へ就職、私は阪急電鉄に勤めても交友は変りなくつづき、同じ文芸に興味を持つ正本水客君と共に文芸同人誌を発行し、ひとかどの文士気取りになっていた少年から青年期へ。

時、ちょうど大鉄局川柳会の指導に來られていた麻生路郎先生とお知り合いになり、ご指導を受け川柳一本にしばって勉強するうちに先生のご厚情によって不朽洞会員に推薦され、やがて句会部、編集部のお仕事のお手伝いをするようになりました。その頃が華で特に君は川雑婦人友の会の世話人として東奔西走、一時は百余名を集める賑やかさで川柳雑誌発展の一環を担い、麻生路郎先生をして潮花君は女性を異性として見ないのと同様、女性からも潮花君を男性として見ないのではありませんかと言わしめたほどで、女性にはよくもて

て私等を羨ましがられたものでした。

そうそう箕面の私の家で素人芝居を演ることなり、曾我対面が私で工藤祐経、潮花君が五郎と舞鶴の二役、その頃から多少踊りの素養があったようでした。

踊りと言えはいつの間にやら名取りとなり竹内潮花から若柳潮花に変わった。川柳と踊りを両立させる意気込みを路郎先生も期待された。得意の女舞いは可憐で美しかった。近年足を傷めて踊れなくなったのを非常に残念に思います。

君と水客君と私は川雑の三羽鳥として自他に共に評価され、路郎先生も異色の存在としてご自慢されていたので、そのご指導によって句集「三人」も昭和三十三年出ました。川柳雑誌が川柳塔になっても三人の堅い友情は変わりなく、お互いに誰が頂点とも底辺とも判らぬ三角形を築いて来しました。

その三角の一角が今、正に崩れようとして
います。今年六月、三者の喜寿を祝して近江
八幡吟行を行い、記念句集刊行を企画、その
完成を眼の前にして先立たれたことは返す返
すも残念、しかも六月に誕生したばかりの川
柳サークル卯の花の会長として第一歩を踏み
出したとき、良き指導者を失ったことは痛恨
の限りです。

悲しい哉

残された二人は君の友情を支えにいついつ

迄も君の意志を嗣いで行くことをここに誓い
ます。

潮花君よ安らかに眠ってくれ給え。

いろいろ言いたい事がありますが、今日は
万感胸に迫って何も言えません。唯ご冥福を
祈って弔辞の言葉と致します。

昭和五十九年九月十二日

川柳塔社副理事長

黒川 紫香

弔 吟

秋風に鼎の足が一つ折れ

閉じたまま聞くことなき舞扇

舞扇しずかに閉じけり月の影

潮ひいて花みちに月師匠ゆき

秋天の翳りし想い舞い納め

彼岸花咲く道づく雲の峰

花道に萩をこぼして逝きたもつ

三人の絆幽明分つとも

秋風に誘われ巨星散り急ぐ

枳殻亭の句座に笑顔をおいて逝き

無に帰るいのちを惜しむ舞扇

極楽の門ふんわりと今開く

西田柳宏子

笠原 吸江

児島与呂志

川口 弘生

野村太茂津

堀端 三男

神平 狂虎

浦野 和子

内芝登志代

福本 英子

西山 幸

大矢 十郎

訃報まだ信じられない柳誌欄

まっ直ぐに浄土に向う旅に立ち

思い出を涙にかえる桜土手

おもかけを偲べば浮ぶ舞扇

よろこびの句座残してひとり旅

慈眼いま蓮のうてなで舞い給う

萩の道遠ざかりゆく舞い姿

西方の雲を舞台の舞扇

句も愛し静かに喜寿の舞い納め

天国の三味にあわなない舞姿

秋風にもう開かない舞扇

艶やかに舞の手かざし逝き給う

極楽で師が出迎えた舞扇

今からの舞いには月の笛が鳴る

秋さみし死出の旅路に舞扇

川上 大輪

川大 溪水

堀江 正朗

吉田 笑女

妹尾 春江

林 はつ絵

奥田みつ子

津山 冬子

奥山美智子

菊田いさむ

春城武庫坊

春城 年代

辻 白溪子

八木 千代

黒川 紫香

中秋無月

正本 水客

今年の名月を見ることもなく9月10日の夜
卒然として潮花君が月に帰って行った。今頃
はかぐや姫と楽しく話し込んでいるかも知れ
ないと自分の心を慰めてみる。

紫香君とは小学校からの同級生だったが、
私は昭和の初めに東京から生れ故郷の大阪に
帰って来てから紫香君を介しての付き合いで
あった。

特に何処へ行きたい、何を食べたいという
ことはなく、私達と一緒に話しているのが一
番楽しいようだった。古い昔のことを事細か
に覚えていて、君独特の能弁で話してくれる
前になんべも話したことも忘れてくるのか
そんなことは百も承知で、それをレクリエー
ションにしていたのか、今は聞きただしてみ
る術もない。

半世紀にわたり川柳と若柳流日舞を趣味以
上の分身として生きてきたが、52年の暮れに
左脚骨折の事故に見舞われて舞台に立つこと
は諦め川柳一筋の生活であった。

京都塔の会の句報の「もう妻の歩幅に負け

る歳になり」が恐らく発表された最後の作品であろう。むかし奥さんに対して不義理なこともあったが、晩年は花代子さんなしては生きて行けない日々であったと思う。妻の歩幅に負けているのは、精一杯の感謝の気持であったのであらうと今にして思い当る。

多情多恨、趣味多き華やかな生涯であったが私には一抹の淋しさが感じられてならない。今は君よ、安らかに心ゆくまで語り給え。

かぐや姫と月に話して満ち足りん

嗚呼 潮花先生

小西 富士子

「今日は潮花先生のお葬式だったそうです」と聞いた時、私は「あつ」と電話口で一瞬絶句しました。暫くすると昔の遠い日の想い出が次々と糸を引くように出て来るのです。思えば先生は、天性優れたセンスをお持ちの上に、何事にも誠実で、奥行の深い方でした。昭和廿九年、婦人友の会が結成され「金泥集」の名の下に、葎乃先生選に依り、男子禁制の川柳発表欄が月々の柳誌に設けられました。潮花先生は諸々のお世話一切を、持ち前の小まめさで処理して下さり大きく発展

をしましたが、五周年を機に「潮花賞」をご寄贈されて、以後は運営を女性のみ手に委ね勇退されたのです。篠山でも友の会を催して頂き、桜咲く日、葎乃先生と共に会員の方々を勧誘してご訪問下さいました。

先生の作品は詩的感覚に優れ、美しく、女性性は勿論、男性まで「僕潮花さんの句好きや」「ほんまやね」と皆感心したものです。

虫も死ぬ落葉のうずに包まれて
夕食の膳は仏の灯と向い

まだ雨に濡れた柳の葉をむしり
砂を踏む音だけでよし恋といて

また「女性作家訪問記」「川雛夫婦善哉」等を誌上掲載され、生々庵・小石二夫妻を筆頭に数組のご夫婦を訪問され、私宅までお越し頂き流麗な筆致で誌上を賑わせて頂きましたが、いつの場合もすぐに丁寧な御礼を几張面な字で下さるのです。いつも無鬼も「これはご帰宅の晩に書いておられるのだなあ」と筆まめ、小まめさに感心したものです。その後すっかり怠け、川柳から遠ざかって行ったら私が遺句集刊行のため伺った川柳会で、廿数年振りにお会いした時、又わらじ酒発刊記念句会の席上、無鬼につきお話頂きました時の

感激は格別でした。川柳もさる事ながら、男性性としては小柄なお体を生かされた若柳流の女舞の美しさは、知る人ぞ知るで川柳会には欠かせぬものでした。返す返すも惜しまれてなりません。今は唯々ご冥福をお祈りする他術なくなっていました。

合掌

潮花さんを偲ぶ

阿 萬 萬 的

潮花さんというと、私には水客さん達の影にかくれて思い出せない部分が多いのです。

潮花さんとのお付き合いはとなると、昭和八年川雛大鉄局支部からのことで、もう五十年にもなるのですが、私が局から電力事務所、管内の変電所等を転々とし尚且つ徹夜勤務などがあり川雛本社との間が疎遠となり潮花さんとのお付き合いもブランクの形となっていました。

その間に潮花さんは婦人友の会を精力的にお世話され、その筆まめさも手伝って婦人川柳家の間で絶大な信頼を得て、いつの間にか川雛幹部の一人になっておられました。

最後に句の事になりますと流石にお色気の句が多く

奥さんに知れたらうちが死んだげる
泣いている膝へハンカチはってやり
送る気の女 肩かけ取りに立ち

ともかく潮花さんは川柳を通じて倅せな人生
生だったように思えて羨ましい限りです。
御冥福を御祈り申し上げます。

潮花さんを偲んで

辻 白溪子

九月十日、紫香さんから潮花さんの歿くなられたことを聞き、とりあえず水客さん、紫香さん、逸さんと駆けつけました。八月の卯の花句会へは腕が痛く指先が動かないので欠席するから頼むと電話があったので、句会の帰りに報告を兼ねお伺いした時は少し弱っておられたが、こんなに早くお訣れするとは夢にも思いませんでした。入院をされて肺の水を抜いたので少し楽になったと聞いておりましたのに本当に残念です。

私が潮花さんを知ったのは、水客さん、紫香さん、潮花さんの「句集三人」の発刊以前ですから随分昔になります。水客さんが国鉄

出身ですので、国鉄関係の句会には必らず三人で出席していただいていたました。大鉄川柳の行事の四十五周年、五十周年にも参加、記念合同句集に出句等、本当に心強い協力者でありました。私は新幹線転動で暫く川柳と離れましたが、潮花さんとは家が三十分足らずの処ですので始終句会で一緒にさせてもらい、その抒情的な句風に敬服していました。個性が滲み出る巧みな表現、素晴らしい一言に尽きます。本社句会への往き帰りの地下鉄での川柳雑談、路郎師の思い出、作句心得等次から次へと話題が豊富で乗車時間を短かく感じたものです。その楽しさも終わったのかと思うと惜別の情に堪えません。

本社のご尽力で発足した高槻川柳サークル卯の花にも会長として推され、人柄、句歴共に最適の指導者として、今後をお委せし、頼りにしていたのに、これからが軌道に乗るという時に計報に接するとは残念でなりません。私達はこれを試練と受け止めて力を合わせ会を発展させるよう努力します。

最後に、柳歴五十周年の記念吟行近江八幡めぐりを私が8ミリ映画にしましたが、映写した塔の会（八月二十八日）には欠席で見てもうえなかったのが心残りです。ご家族にはいずれお見せしたいと思っております。

第26回

豊中市民川柳大会

日時 昭和59年11月25日（日）

正午開場、一時〆切

場所 豊中市立中央公民館

（阪急曾根駅下車南約一〇〇メートル
三叉路東へ約五〇メートル）

会費 一、〇〇〇円

（呈記念品・発表誌）

兼題と選者

技 尾谷 清風選

襟 卷 米沢 俊夫選

美 女 中尾 藻介選

ぶらんこ 山本 翠公選

サロン 橘高 薫風選

時事雑詠 広瀬 反省選

市民 永田 帆船選

外に席題一題・各題2句

市長賞外各賞あり

主催 豊中 川柳会

後援 豊中市立中央公民館

中国吟行の旅

・59年 9月24日～29日

上海・蘇州・桂林



「川柳塔」訪中記

田中正坊

このたび川柳塔社訪中団が九月二十四日から二十九日まで六日間、上海・蘇州・桂林を歴遊して、全員無事に帰国いたしました。各地での見聞や感想については、参加したみなさんがレポートされることとなっていますので、私は旅程のあらましと中国側との交流にしばって報告させていただきます。

西尾栗主幹を団長、橘高薫風副主幹を副団長とする一行は、二十四日午前十時半、大阪空港に集合、特別室で団長あいさつの後、黒川紫香氏はじめ同人や家族に見送られて十二時四十五分、一路、上海へ飛び立ちました。団員は榎谷寿馬・郁、春城武庫坊・年代のご夫妻、東野大八、板尾岳人、宮口笛生、白岩文衛、田中正坊、赤川菊野、田形美緒、藤田泰子、山崎君子、秋元てる、飯西ミサヲ、平野百合子の同人・誌友と「老朋友の会」の村田円治、渡辺慶治、木嶋隆道、添乗員の高瀬竜二の二十三名でした。

私たちを乗せた中国民航機は午後二時三十分、上海に到着し、中国風の建物の西園飯店で旅装を解いた後、中国国際旅行社上海分社の通訳、王斌氏の案内で虹口公園内の鲁迅墓など市内をバスで見学し、壮麗な上海展覧

館に付設された友誼餐厅で夕食をとりました。二十五日は早朝五時十五分に出発、蘇州への日帰りツアーを行いました。広軌のゆったりの軟座車による列車で蘇州駅に到着後、南村飯店で朝食をとり、通訳の申錫出氏のガイドで「楓橋夜泊」の詩で有名な寒山寺と留園、虎丘、北寺塔、宝帯橋や刺繍研究所、玉石彫刻廠を見学しました。

二十六日は、上海での通訳が女性の朱承蓉さんと交代し、明代の名園として知られる豫園、玉仏寺などを観光しましたが、大鴻運酒楼で昼食をとっている時、中国対外友好協会上海市分会の幹部、陸明海氏の訪問を受けました。

川柳塔社では出発に先立って西尾主幹から「貴国の文学界と日本の文学界、特に漢俳と俳句との交流がここ数年來、盛んとなっています。川柳と俳句は同じく中世の俳諧を源流とする短詩型文学で、主として俳句は自然の風物を題材とするのに対し、川柳は人生や世相をテーマとするところが異なっていますが、貴国の文学界には川柳については紹介されたことがないと思いますので、今回の訪中を機に、川柳についてご理解をいただければと願っています」というメッセージを送ってあり、それに応じられたものです。

陸氏は「今回の川柳塔社のみなさんの訪中を心から歓迎します。文学を通じて交流することは、中日友好を深めるために非常に有意



陸明海氏を囲んで榮・大八・薫風・正坊・文衛・千代

義であり、川柳作家のみなさんが中国の各地を視察され、作品を通じて中国の姿を紹介されることを期待いたします」とあいさつ、西尾団長の答礼あいさつの後、桶高副団長から誌寿還暦記念句集『川柳塔』、『なにわ川柳』の一句」と日本人形を贈呈しました。

今回の訪中時期がたまたま三千人の日中青年大交流とちか合ったため、現地がその準備に忙殺され、私たちが希望した中国の文学者との直接の交流は実現できませんでした。最終日に上海空港に向かう車中で、「結構な

プレゼントをありがとございました。時間の関係でみなさんとゆっくりお会いできなかったのは残念ですが、これからもお互いに交流と友好を深めていきましょう」との対外友好協会からのメッセージが王通訳を通じて伝達されました。

さて話は前後しますが、上海から二十六日午後五時二十五分の日致時、桂林空港に到着した一行は、近代的なホテル、達華賓館に入り、その夜は漓江劇院でチワン族の民族舞踊や中国歌曲などのアトラクションを楽しみました。

二十七日は午前八時半にホテルを出発し、待望の漓江下りを行いました。コースは楊堤から画山、興坪、陽朔までの船の旅で、心ゆくまで兩岸の山水を觀賞しました。翌二十八日は若い通訳の李健齡さんのガイドで疊彩山やパンダのいる七星公園、鐘乳洞の芦笛岩など桂林市内の名所を觀光した後、再び上海に帰って宿泊、全行程を終了して二十九日朝、上海空港発の中国民航機に搭乗し、日本時間の午前十一時三十六分、大阪空港に帰着しました。

なお、私たちの訪中は、九月二十四日付の『毎日新聞』朝刊で「川柳で、紫顔の中国」をきょう吟行の旅」という見出しで報道されたことを付け加えておきます。

書道ウルトラC

宮口笛生

上海二日目の朝、ホテル西園飯店出発前に土産品売場へ買物の物色に寄る。

入口のところで画仙紙に寒山寺で有名な詩月落烏啼・・を書いているのを見る。中国人は達筆で感心しながらしばらく見入っていた。筆持った手首の回転がとても器用であんな真似は出来ない。書き終えたあとと左手をポンポンたたいて見せる。何かなと思っていたら、にやにやしながら私の名札を見て筆を左手に持ち替えた。左手でも書くと言ったことだった。そして左手で宮口賢治先生雅属とアツと言う間に書きあげた。右手と変らぬ達筆でびっくりと共にえらいことになったと驚く。そのあと、甲子年中秋、署名押印して出来上り。

横におられた東野大八先生が買ってあげなさいよと言われる。私の名前書かれた以上、要らないと言えず買うこととする。中国円で拾五円、日本円千五百円だった。なかなかの達筆で西尾葉先生も達筆を賞められた。

最初にも述べた通り中国人は達筆家多く、いたるところで書いているのを見かけた。寒山寺でも管長さんが一生懸命書いて居られ、買うと為書しておられる。



年代・生苗 仲窓車

もう一つ。桂林のホテル格湖飯店で筆を両手に持って、同時に二行ずつを左右違った字を書いていたのにはびっくりした。一ぺんに二行の出来上りである。いわゆる二刀流の使い手と言ったところ。また一行を両手で上下に同時に書いたりもする。同じ字を両手で同時に書くのならわかるが、左右同時に違った字を書くということは一寸出来ない。それも早くすらすらと書くのだから驚きである。毎日書いて馴れているとはいえ書道のウルトラCであると感心した。中国吟行旅行で感心した一コマ。

春城 武庫坊

纏足をいたわる老いの足平和

上海豫園商場といえは、上海の名庭園「豫園」の西隣りに接する盛り場で飲食店、煙草屋、衣料、雑貨の店が狭い道幅をはさんで並んでいる。他の市街地に見られぬ美しい店が多い。

上海では産業界が業種別に週休日を決めているので繁華街は連日混雑しているとか。その雑踏の中を「豫園」を見物した我々がきよ

ろきよろお上りさんスタイルで、はぐれぬまう歩いている横を相当老齢の夫婦が追い越して行った。見ると婦人の足は纏足である。終戦前も都会では余り見かけなかったが……。老夫と手を取り合って混雑の中に姿を消した。その姿を見てはつと感じた。あの年令であれば若い世代から戦乱の巷をくぐって幾多の苦勞を越えや々と昨今落ちついて老後を過しておるように思えた。

為政者の誤り？が民衆を戦渦に捲き込む、

こんな不幸は絶対おこしてはならない。

あの老夫婦のこれからの幸せを祈りながら豫園商場の人の流れに身をまかせてバス乗場に向った。



ほんとうの玉の肌

上海西北部、安遠路の玉仏寺前でバスをおりる。

屋根の端がそりかえった中国式の山門をくぐる。「大雄宝殿」の額が掲った本殿が見える。本殿の横を通って裏に廻るとその奥に清代一八八二年建立の時ビルマより運ばれた玉仏座像「白玉釈迦牟尼佛」が祀ってある。

周囲金色内部赤色の光背をつけ、おだやかなお顔、朱色の唇、宝石をちりばめた仏具をまとった御本尊の象牙色の肌の輝き、古色蒼然たる日本の仏像ばかり見た目には異様に感じられたが、相対して眺めているうち、この大陸の仏像に感服、仏前の座布団に両膝をそ

ろえ今後の幸福と旅の平安を祈って三拝した。横に廻ると「白玉臥佛」これも白い玉で出来た仏像で、ルビーの宝冠が光り輝き玉の肌という言葉そのままでのビルマ仏教の偉大さを私の心に写してくれた。

このお寺は外国人、華僑に限り毎日開放、中国人は原則として陰暦の一日しか入場出来ない由、これも思想上のことか外貨獲得のためか？ 最近中国人の参拝も増加しているとのことである。

玉肌の御仏お恵みいと深く
玉肌の釈迦如来には三拝す

蘇州有情

八木千代

上海も桂林も心に残る街ではあったけれど今度の中国の旅の中で蘇州の余情がいちばん濃いの、国際旅行社蘇州分社「申さん」の飾らない明るくて優しく誠意のこもった案内によるものだと思えてくる。旅人の身になってコースを変えてもくれ、生いたちのこと、独学したこと、私生活のこと、貯金の額まで話して親愛の情を示す申さんと、人間の心を詠もうと苦しむ川柳人との交流は「老朋友」のように溶け合って、別れたあともいつまでも旅情をゆきさぶりつづけた。

九月二十五日、上海の西園飯店の朝は窓外

の雀で目覚めスツケースにしのばせてきたステイックで夜明けのコーヒ―と洒落て、五時十五分バスはすずかけの並木路を駅へと向う。町の店は開き人々ともう動いている。六時二〇分上海駅発。軟座車（グリーン車）硬座車（普通車）に区分された汽車に乗る。

軟座車のコンパは楽しジャスミン茶

四人席のシートは深紅で小テーブルにはレースのクロス、アスパラの小鉢も置かれて小さな応接間みたい。やがてボーイさんが熱いお茶を運んできたので甘栗を出す、通路をへだてて隣り合う中国のグループへ分けてあげられたのは大八先生。「謝々」と向うからはマドレーヌの箱が廻ってくる。友好ムードのたのしい空気の車中となったところで窓の外はひろびろと江蘇の田園がひろがる。ここらあたりは呉の国、春秋時代に越王勾践が呉王夫差に贈った美女西施のことから姑蘇台のこと、会稽の恥、鼎の軽重、宗襄の仁、背水の陣、中原の鹿……の語源など大八先生の尽きぬ蘊蓄に耳を傾け眼を睜りなんと充実した得難い車中のひとときであった。このときばかりでなく先生のおかげでどれだけ旅が深められたかと、今でも有難く懐しくおもふ。

白粥に旅いたわられいとしまれ

南平飯店の朝粥とうす味の料理に満腹して手を合せていたらボーイさんが五人ほど寄ってきて「テンハオツ」と笑いかけて何度も教えてくれる。旅立ちの前に、いったいどんな

料理をたべさせられることやらと思っていた危惧も吹っ飛んで、ああ、ほんとうに御馳走さま。バスは城門を出て、青い柳と流水と、行き交う舟、郷愁をそよる景色のなかを名園「留園」に着く。明の嘉祥年間に四十五年かかってつくられた高宮の私邸の庭園。足を踏み入れると花窓があり美しい庭が透けて見えて期待感が増す。長い曲廊は築山をめぐり中庭を通り池のほとりを廻り、華麗な建物には緻密な彫刻、湖石、青い竹、柘榴、藤、芭蕉が魅力的に配置され、うっとり飽きる。ことがない。地上の天宮といえはよいだろうか。

蓮の花一会の旅は続くなり

荷花庁と呼ばれる広間の前は蓮の池、それも涼やかな黄の蓮、宇治以来心の奥に咲きつづける椿の紅と並んで、この蓮の黄も生涯消えることはないだろうと思うと、異邦のまんな中で涙があふれ出して困ってしまう。冠雲峰の大石塊もかすんでくる。どこを見ても美しく、岳人さんはじめシャッターの音が絶えない天界の景であった。

大根を切るよに石を切る虎丘

岳人

虎丘は呉王夫差の父、閻闔を埋葬したところ、三千本の宝剣が埋められた上に中国最古のレンガづくりの斜塔がある。岳人・武庫坊・年代・泰子・美緒さんらの健脚組にまじって斜塔の真下まで登ってみると、亭の椅子でアイスクリームを食べている申さんがいた。「ここで逢うたは百年め」と笑いがからアイ

スクリームを買ってくれる申さん。この虎丘の山上で同じ米子市で親しくしている戸田先生にバツタリ。シルクロード14日間の旅の帰途とか。「世界とは狭いものですねえ」と異口同音の邂逅も旅なればこそ。

塔あれば影 人あれば旅の影

そしてバスは、来てみればさほどでもなし寒山寺」と申さんが語る楓橋鎮の寒山寺に向う。唐代の詩人張継の「月落烏啼霜滿天……」の石刻碑文があり石碑の拓本を買い求められた方も多かった。荷を持つ体力の限界を考えてそれは見送り「楓橋夜泊」を雄渾な筆勢で書いた扇を私も一本求めて多々謝々。八角形の鐘樓に上り、ひとりひとり寒山寺の鐘を撞かせてもらう。みんなの韻は重なり合っでしっとりした境内に響きわたり、はるばると来たものだと思うすにいられない。

どこで撞いても一つしかない願いごと

早朝からの観光はみどころもたつぷり。適当に空いた胃のために飯店に帰る。蘇州の蘇はクサカムリに魚とイネ。新鮮な白魚の揚げものなどにビールもどんどん出て、今度は上手に「テンハオツ」。

午後は刺繍研究所と玉石加工場見学、一本の糸を四十八本にも裂いて一針ずつ鏡にうつしながら刺している少女たちは哀れであった。変色をおそれて採光は暗く、二時間ごとに十五分ほど眼のマッサージをして視力の低下を防ぐだけ。「お国の帯を刺しています」と説

明する申さんの表情も悲しそだった。熟練者で六十元(六千円ほど)の月収とか。これからは、つづれの帯を締めるたびにこの仄ぐらい刺繍所の青白い指を思つて泣くことになるだろう。今の気持としてはとても締められそうにない。

武庫坊さんの要請に申さんがOKして北寺塔を見ることになる。姑蘇諸塔之冠と称される九重の塔、八角形の二重庇のそりが深い。

蘇州では蘇州の歩幅塔二つ

薰風

天候に恵まれつづけた今度の旅でも塔と秋空の調和は人々に祈りさえもたらず。この門前で三つくらいの子があまりに可愛く抱き上げた。一人しか生めない今の中国には子供を見ることが少ない。子守りをしている祖父母の表情は切ない。

晩婚晩育あまりに愛しシイハミ小孩子

バスの窓まで来て手を振る童女と老祖父に体が熱くなって、そのあと水郷きつての名所宝帯橋を、泰子さん美緒さんと三人で歩きながらも私の胸の中の川は音を立てて流れていた。走馬看花(ゾーマーカンホア)の旅だったけれど、歴史の厚みに支えられて、中国とのふれあいも心と心との段階に入つたのだということ、人と人との触れあいこそ旅の本質だということを肌で感得して、蘇州駅の暮色の中に、水底にいるような淋しさ人恋しさに溺れていったのは旅愁が極まつたのだろ

うか。魂をもちど水と風に洗われたような

大切な蘇州の一日であった。

良い旅をありがと。神さま、申さん、二十四人のみなさま、ほんとにありがと。

春城年代

中国に渡りたい夢を胸にあためてきたのはいつ頃からだったか、それがうれしいことに川柳塔から実現していただけたのです。

昭和十九年、戦争も末期、便りも絶えて久しい夫の身を案じ、留守中に産まれた長女を抱きしめて華中の空に思いを馳せたものです。

その中国の地に夫と一步踏みしめたことは口々ににもまざる感激でした。中国の人達は口につくせぬ無念さを表面には出さず温かく迎えてくれました。蘇州夜曲、支那の夜、上海の花売り娘の唄と共に瞳に描いた上海、蘇州、桂林にや々と来たのです。それぞれのかなしみが染みついた街です。もろもろの想いが交錯して、とても物見遊山では歩けませんでした。

中国で口には出せぬノスタルジア

大陸の夕陽に戦士 風化する

上海泊りの翌朝は、四時二十分のけたたましいモーニングコールで飛び起き、五時十五分ホテルを出発、朝もやをついて走るバスの窓外には早や食物(パンなど)を求めて店頭を列を作る人々、生活そのものが各所に見えました。もうその時間には出勤らしい自転車

の群が道いっぱいに急ぐ様子もなく走っています。上海站(駅)を六時十二分発車、軟坐車(中国のグリーン車)にて蘇州着七時三十分。数日前に日本から到着したというまだ番号も入っていない新車のバスに乗り込みました。

その日の通訳・申錫出先生の説明で中国では人口問題のため結婚は最低で男子二十八歳女子二十五歳にならぬと許されず、子供は一人しか産めないこと、(二人以上は税金が高くなる、日本とは逆です)給料が安いので夫婦は大方共働き、離婚はご法度で非常にむづかしいこと、男尊女卑のお国柄が今や一転して女の方が強くなったとのこと、ご自身の暮らし向きも交えて赤裸々に情熱あふれる語り口に一同感服いたしました。苦学をして今の仕事についたそうで、日本についてもよく勉強され、いつか日本にゆきたいので貯金も相当しているという話は川柳塔の心やさしいおふくろさん達をほろりとさせました。

晩婚晩育宝のように子を抱き

桂林夢幻

白岩文衛

「走馬看花(ゾーマーカンホア)」という中国の言葉がある。馬を走らせながら花を看る、匆忙多事の間に美しいものをしかと見る

という意味だそうだが、私たちの上海・蘇州・桂林の旅は、まさしく、走馬看花のあわただしい旅であった。

私は、この匆忙の旅で、たくさんの美しい花を見ることができた。私が嘗て訪れたアジアの他の発展途上国のように、観光客に媚を売り、金品を欲しがる者が皆無であること、治安が行きとどき、泥棒もないこと、ここに新中国の香り高い花が咲いている。そして中国の各地で会った素朴で、人なつこく、真摯な人たち、すばらしい花だと思ふ。この美しい花が、これからの近代化の波の中で、汚れることのないよう、祈らずにはいられないかった。

走馬看花新中国のすばらしさ

ジェット機が桂林空港に下降し始めた頃、窓ぎわの乗客が、一せいに嘆息をあげ、から



満江下り一葉・大八・文衛

だを小窓に張りつかせたが、内側の席の私たちは、シートベルトに縛られているので、どうすることもできなかった。機が着陸し、ベルトを外すと、私たちは、そそくさと空港に降り立った。

広漠たる空港は、真赤に、夕陽に染められていた。そして、遙かその野の果てには、或いは、独り天に向って直立し、或いは、他山と連らなつて林立した桂林の美しい山々が、落暉に映え、急速に暮れてゆきつづつあった。濃く、淡く、その山々は、静かに、夢幻の世界へ溶けてゆく。いかなる人の絵筆も、この缥缈たる神韻を画き尽すことはできないであろう。東の国の旅人の私たちは、心みなこの暮景に吸いとられたように、しばし佇ちつづついていた。

桂林夢幻 旅のこころを吸いつくし

中国旅行に参加して

藤田 泰子
田形 美緒

大阪空港から二時間半（時差一時間）中国はほんの近くにありました。上海空港では目に入る風景、人、文字、なにもかも違和感はなく、外国へ来たという気が少しもしないのです。うっかり人波にまぎれてしまうと誰も

日本人と気付く人は居ないのじやないかと思う程でした。

ガイドブックで見た上海は、紅紅と灯るネオン、男女が腕を組み散歩している風景があり、私も上海の夜をたのしみにしていましたのに、ホテルは上海の街からは、ほど遠くタクシード、バスも日本のようにには無く、新築というペンキ塗り立ての蒸し暑いホテルで、故障のクローラーを叩いたり宥めたりして上海の第一夜は明けてしまいました。そして五日六日の旅も後一泊になり上海最後の夜、名残を惜しみながら、夜が更けるまで同室の美緒さんと語り合いました。

租界地に覆いかぶさるプラタナス 泰子

泰子 本場の中国料理どうやった。

美緒 そうやね、まず最初、機内食で失望したわ。桂林のお寺の参道にあった、おいしそうなシューマイの店、あそこのシューマイ食べられなかった事が心残りやわ。

泰子 そうやね、ホテルでもおいしい餃子出たけれど、一個しか食べられへんかったたしょう。あれ一皿位い食べたかったわ。

美緒 一日位満漢全席にありつけるかと、楽しみにして、腹八分目に耐えて、夢に海鮮料理を並べたのに。

泰子 あしたは夢が実現するかもね、なんて期待してたのに、一夜明ければ、又、又、おかゆにピーナツその他諸々、ああとrostとコーヒーが欲しい、なんて。

美緒 賢沢は言うな。そやけど中国の生活水準はどう思う、こちらではハイクラスに属する方たちと思うねんけど、ガイドの申さん達の月給が八十元、日本円やと八千円、自転車が二カ月分の給料位するねんて、自家用車、なんて一台も無いそうよ、泰子さん、市場行きに車を使ってるのは賢沢過ぎるよ。

泰子 私より助手席のあんた、反省しなさい。日本語のガイドになるには、大へんな勉強をしはったそやけど、日本人より日本語が上手やったね。洒落も良く分るし、どんな環境に在っても努力次第で世に出られるということやね。

美緒 アルバイトに日本語教えたり、翻訳したり、それがサラリーより上廻る収入になつて、田舎の親に仕送りしてるって言うてはったけど、家の息子に聞かしてやりたいわ。

泰子 中国では男と女で天を支えると言うことらしいけど、女にとって、しんどい話かも知れないけど、家事も育児も二人で平等にするなんて、私の理想とするところやわ。

美緒 でも一人っ子政策はアブノーマルやね。

泰子 自然の摂理に反するね。

美緒 日本でも危惧されてるように、何十年か先、逆ピラミッド型に人口が減つて、一人っ子同士が結婚して、二人で四人の親の面倒を看なければならぬなんて、子供がかわいそうやね。

泰子 日本でもそうやけど、政治家さんに充実した福祉をおねがいせんとあかんね。

そやけど、日が暮れて暗くなつてもバスの中電氣灯けてくれなかつたね。

美緒 あんまり明るくせん方が美人に見えていいやないの。バスの窓から見の人家も、電灯ついている家少なかつたね。中国に美人が多いと聞いたけど、夜目遠目のせいやろか。

泰子 確かに省エネに関しては、不言実行型やね。見習うべきやと思うわ。

美緒 そやけど、こちらの人は大らかやね。ホテルのドア鍵からへんかつたでしよう。寝てる間に襲われるかも分れへんわ。

泰子 そやけどその大らかさで戦争孤児を育ててくれはったんでしよう。謝謝やんか。

美緒 中国の治安がいいのは信じてるけど、同宿の日本人が危ないねんよ。

泰子 私等、襲う人あれへんから、安心し

山崎 君子

留園に同じざくろは待っていた

雲海に逢えて心が燃えてくる

はるばると訪ねて虎丘の蟬しぐれ

仙人も漓江下りを出てたかな

雁山は夕日を抱いて出迎える

さりげなく軟坐車に置くほづき草

一人しか生めぬ豫園の人の群

なさい。

美緒 あつという間に過ぎた、たのしい五日間やつたね。「おやすみ」

上海最後の夜、寝るのが惜しく、さ迷い出た街は、ただ暗く、一カ所七彩の電灯が灯るのをめざして行けば、終日操業の工場の灯りでした。唯一軒、閉めかけていた酒家で買ったワインとリンゴで最後の夜の名残を惜しましました。二度と訪れることのない上海の夜はちよっぱり佻しく更けて行きました。

コツコツと前進めざし積む煉瓦 美緒

〈翌朝〉

美緒 椅子でバリケードして寝たら、安心して寝過してしもた。えらいことや。

泰子 はよししないと放つとかれそうよ。

バスに滑り込みセーフ

美緒 皆さん おはよう 歯を磨く暇もなかったわ、えつ、朝の食事お弁当やて皆さん きつと暮の内ですよ。

開けてびっくり玉手箱

泰子 帰って主人に放り出されたら、上海で暮の内弁当公司作るわ。

美緒 私は上海の街角で、しゃれたコーヒースナックにカラオケの国営店を郭さんに申請するわ……

かくて大阪空港を目ざして心を残しながら飛び立ちました。

(泰子記)

情

辻 白 溪 子 選

手作りに母の情が味に滲み
感情の起伏読まれたホームラン
仲直りさせた情の縄のれん
愛情が重荷と思う反抗期
情けない事にサラ金からも見放され
許したい親の情けに子が乗らず
天と地の情素直に草は生き
同情の口につられて詐欺にあう
貸し傘へ田舎の駅が生きている
薄情な話を聞いたシャンデリヤ
追分は旅情溢れる海の声
肩書を付けた情が押しかける
同情はされたくはない汗をかく
友情を離ればなれにする母校
壺焼きのさざえと旅情話し合う
乾くまで多情を装う洗い髪
愛情がいつか縛れて家裁行き
満開の萩へ無情の雨となる
本当の事は言わない聴診器
情のある言葉が欲しい老いの坂
情ある言葉さえぎる修羅の風
友情にそむいて恋の灯に集う
ちっばけな情に大きく立直り
焼け石に水だが友情ありがたし
肩書がちと友情へ距離をとる

ゴキブリへ情が湧いてくる孤独
夕焼けの雲の情けよ亡母が浮く
止り木で貰う女のうす情け
冷淡な言葉も裏にはある情け
慕情まだ抱いてハイミスタイフ打つ
手をかかぬ事がリハビリーへの情け
紫陽花が雨の情に酔い痴れる
情濃ゆき女で情夫を二人持ち
僻ませぬ母の情味に育てられ
中流という意識人情薄うなる
置き傘の情裏切る人がふえ
雨慕情独りの夜をふかくする
秋の雨女の情にはめられる
人情話高座に白い髪が来る
本音には悲しい情が秘めてある
人前はそしらぬ顔でいる情け
先代の情に厚いところも継ぎ

有情無情風が地を這う流人塚
少しずつ非情になってゆく福祉
よくよくの事情と聞かぬことにする
サラ金の倒産同情など寄らず
愛情の邪魔を唇にされました

文楽の激しい情は首を振り
感情を殺すになれた外科のメス
再建へ情け容赦のない誠首

年 代 馬
たす子
規不風
悠 泉
克 子
七面山
代仕男
美 穂
冬 子
カズエ
武庫坊
雅 風
与呂志
はつ絵
本蔭棒
寿 美
ひで
軒太楼
兼治郎
かすみ
明 水
晴 彦
どんたく

許 す

小 野 克 枝 選

許すとはいわず産衣を届けられ
結局は許してしまいう好きだから
堪忍してと目尻を下げる鬼が居る
そこからは聞かないことにして許す
姉さんの許しを受けて次女嫁さ
かけ引きの嘘なら許す小商い
丁寧な白バイ許してはくれず
タデマエを本音で縫うて許します
犬の目が一度の咎を許さない
親の許さぬ時代錯誤の恋もあり
ヒロシマへ核は許さぬ列つづく
朝が来て女許してばかりいる
許されてすこし傷つく自尊心
許さねば家出も辞さぬ子に慌て
許されて明日が見えた高い空
この辺で許してやれと目で合図
美しい女を許す鬼の牙
遺言のどこにも許すと書いてない
罪の無い寝顔に許す外は無し
宣誓の偽証を許す神が居る
一杯の酒で男は許し合う
許すことばかり女の坂遠く
貝割菜許せぬ事が一つある

どのへんを許してくれるのか聴こう
無花果を食べる女と許し合う
まだ亡妻に許してほしいことがあり
許してと言わぬところが許せない
ええがなで許してくれた苦勞人
許されぬ恋は柘榴の味がする
世間さまが許さないよと子を論し
父ちゃんが許してくれたよしとだけ
もう一杯伺う顔に答なし
許さねば明日がこない子沢山
許す気になって蒲団をふたつ敷く
じやがいの皮剥きながら赦してる
許されて急に腹へる食べ盛り
目で叱る心で許す母と子と
許すとは思ひ上った花の芯
裏切りを許してしまう縄梯子
今日だけは許してあげる花を買っ

妻 子
耕 花
正 坊
やすお
ただし
倫 子
ろ 亭
忠 三
章 久
さと美
高 明
京 子
里 風
年 代
荒 介
元 江

注 文

越 智 一 水 選

許すとは言えない肩を撫でてやり
許さずに置けない人を連れて来る
許されて合わせ鏡に念を押す
何もかも許して老いを身纏う
許されて総ては終わる玉手箱
許す気になるおろぎを聞いている
許すとは決して言わぬ膝小僧
遅れても許す気でいる花時計
天 地 人

義 美
裕
文 平
テ ル
寿 馬
宵 明
枯 梢
雄 々
許されて渡りきる橋風の橋
年金で孫の注文聞いてやり
手描き友禪注文外れがヒットする
注文の品をさがしに宿の下駄
自画像に注文があり塗り替える
注文と違った人に嫁ぐ羽目
注文は裸で欲しいと婿の親
魚屋へ注文を出すめでたい日
注文はつけぬ農家の嫁さがし
早いとこ作れと新婚せかされる
注文を背負い男の児が生まれ
注文をしたのにバスが来て仕舞い
ふところも知らぬ女がねだる石
ご用聞き街の噂も売り歩く
橋山で貽の注文ばかり聞く
仏壇に注文がある故郷の母
遠慮なく後輩注文して食べる
注文の電話がひびく開店日
男なり愛に注文などつけぬ
注文のケーキをさげた千鳥足
無防備な女に注文しぞこなう
注文が多く勝負のつきかねる
注文の服が似合ってよき門出
雀 声

雄 々
明 水
文 平
きみえ
良 征
紀 雄
天 地 人
宵 明
伊 津 志
年賀はがき局が注文とりに来る
注文のポーズモデルとして稼ぎ
注文はもう出ましたと準備中
注文がとれぬ不況の重い靴
注文へまた残業の灯がはいり
別注の料理で酔わす下心
注文で人手が足りぬ町工場
注文の通りに行かぬ整形科
花婿は花嫁の注文オール聞き
注文はきかず審判いい姿勢
浅はかな女注文多すぎる
注文をつけたぬ女に火を貰う
小企業無理な注文聞く夜業
生き残り軍歌注文つけて酔い
注文が何かと多い外野席
注文はあるが言わずに丸く住み
数珠を手にして注文の多いこと
注文のスタイル秋の本を選ぶ
八起目の道へ注文などつけぬ
注文へある日のロボットそっぽ向く
あじさいが上手に雨を注文し
乾く仲注文だけがが増えてくる
注文へ朝の素顔は覗かせず
注文の通りに咲いた花時計
天 地 人
宵 明
伊 津 志

初歩教室

題——好意——

本田恵二朗

引越して素直に好意受けいく つや子
 (引越して素直に好意もらい受け)
 若人の好意へ感謝の日を送り 同
 ライバルの好意素直に受け取れず 周三
 好意だと思ふが少々影チラリ 同
 (好意とは思ふがちらちら黒い影)
 人生の心好意で保ちたい 千代
 (人生行路好意と好意で助け合い)
 定退に花束千金より重し 昇
 (定退へ花束千金より重く)
 エラーしても好意の視線に首を撫で 同
 (エラーしても好意の視線の温かく)
 相談に揃う好意が羽根布団 豊太
 (羽根布団のような好意に取り巻かれ)
 芯からの好意を逆手にとる人も ちよ
 親愛の情溢れ来る孤児の胸 同
 (さりげない好意が孤児の胸を打ち)

ご好意にあまえて心に借りが出来 武水
 仲人の好意を謝している両家 同
 (仲人の好意が両家を春にする)
 この秋も好意で実る書籍増え 幸泉
 ご好意おしいただいた手のやりば 同
 (ご好意をおし頂いた手が震え)
 第一步好意を費う大きな声 同
 (第一步へ費う好意の太い声)
 黒板に好意が持てぬ白チョーク 同
 中年の好意素直に受取れず 保夫
 下心と取られても仕方のない好意 同
 (ためにする好意と思われそうである)
 義理でする好意へ義理が返って来 久子
 目で受ける好意だまって席につく 同
 (目で受けた好意の席のあたたく)
 ご好意に甘えますよと財布閉め 章久
 困ります好意押売りする相手 同
 (月夜道好意の押売り持て余し)
 折角に立った坐席を断られ 昭治
 よその子もみんな並べて叱りつけ 同
 (よその子も叱る好意を持ちあわせ)
 親友の憎まれ口にある好意 忠広
 口下手が示す好意の無愛想 同
 (口下手の好意は素朴な国訛り)
 ご好意を素直に受けて座ります やすお
 (ご好意を笑顔で受けて小さくかけ)

第31回 八尾市文化祭

市民川柳大会

とき 昭和59年11月11日(日)正午開場
 ところ 八尾市商工会議所3階大ホール
 近鉄大阪線八尾駅下車南300m
 八尾市役所向い側

題と選者

「劇」 高杉 鬼遊選
 「生きる」 永田 帆船選
 「明日」 平山 繁夫選
 「紅葉」 田中 秀果選
 「約束」 室田 千尋選
 「大臣」 西尾 栞選
 席題当日一題・各題二句
 締切午後1時半
 会費 千円(呈作品集・鉢植花)
 懇親宴 三千円

主催 八尾市
 八尾市教育委員会
 八尾市立公民館
 後援 八尾菜の花句会

好意にも裏ありそうで敬遠し 同
 (裏がありそうな好意をそつと逃げ)
 好意だけ無にしないよう気を配る 理恵
 (好意だけは無にはすまいと独り言)
 独り者好意が重く肩に乗る 同
 (独り居の肩へ好意がのしかかり)
 保証押した好意が仇となる 芳水
 好意から恋慕へ変る無口の娘 同
 (好意から慕情が芽吹いた無口の娘)
 失意の日好意の旗に励まされ よし津
 苦言でも好意の声と受け止める 同
 (苦言また苦言を好意と受け止めて)
 好意もつ人に意地悪してる恋 同
 (好意もつ人へ意地悪するも恋)
 好意もつから相手に言えないこともある 千代女
 (胸一杯の好意が言えないもどかしさ)
 鈍感是好意の仕草も通じない 同
 (鈍感へ好意の仕草が通じない)
 大好きへ犬も尻尾を振ってくる 勝美
 (ご好意と犬も尻尾で感じてる)
 ライバルの好意素直に青い空 同
 (好敵手の好意うれしく目で受ける)
 折角の好意無にする情けなさ 小愛
 (折角の好意無にした自己嫌悪)
 お金では買えぬ好意を友がくれ 同
 (友なれや金で買えない好意くれ)

旅に出て人の好意に助けられ 同
 (旅先で拾った好意が身にしてみる)
 ホステスの好意の裏を見抜かれず みつる
 実直な好意受け合う夫婦船 同
 さしかけた傘の好意を不気味がり 兼治郎
 一寸した好意がでつかいことになり 同
 一方通行の耳へ好意が届かない あや子
 一寸した好意が頑固な窓を開け 同
 ボランティアの好意が福祉の輪を拡げ 同
 ご意見の奥にひそんでいた好意 歌子
 可愛さを欠いて好意を無駄にする 同
 代筆で届いた好意とも知らず 同
 病む人へ好意の嘘を託しながら 吉子
 おつちよこいの好意裏目に出てしまい 同
 好意だけお受けしますと固いこと 同
 ささやかな好意が愛の灯をともし サワ子
 ハンサムへ好意持ち過ぎやけどする 同
 好意あるバラの言葉に身を刺され 同
 逆境で受けた好意は忘れない 同
 善人の好意素直に受取ろう 同
 特別に私だけへの好意かな 同
 風雨とて天の大きな好意かも 同
 ささやかな好意に貴い愛が乗る 同
 草も木も好意へ花と実を返す 同
 好意ある言葉が優しい風に乗る 紀久子
 無口でもあなたの好意に惚れました 同

川柳塔社常任理事会 (10月1日)

出席者 栗・薫風・形水・水客・紫香・鬼遊
 萬的・岳人・与呂志・敏・凡九郎・天笑・重
 人・寿馬・笛生・史好

《議事並びに報告事項》

▽誌寿還暦記念事業の一つ中国旅行も無事終
 り、日本の川柳の宣伝をしてきた。と栗団
 長より報告。

▽若柳潮花氏死去に伴う路郎賞選考委員の人
 選を検討、別掲の如く決定。なお、十一月本
 社句会を若柳潮花追悼句会とする。

▽栗主幹の喜寿・金婚・句碑5周年お祝いの
 会は来年9月23日新阪急ホテル2階紫の間と
 決る。

▽北田綾子、星野佑正氏の同人推薦了承。

(史)

■11月の常任理事会は1日(木)



押しつけの好意にあった下心 同

拗ねた背に好意が沁みる痛いほど 寿子

風のように熱い好意が胸に来る 同

ひたすらに好意の鞭へ向く素足 同

題一スタート―11月10日締切(1月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一―九一三四

⑦七一 本田恵二朗

柳界展望

集録・板尾岳人

オアシス 安井 久子選
階段 森中恵美子選
特別課題

天 藪内千代子選

各題 二句、メ切12時半

主催 番傘いざよい川柳会

後援 番傘川柳本社

★反戦反核詩歌句集・第3

原稿募集

内容Ⅱ誌・短歌・俳句・川

柳その他

参加負担金3000円

川柳一人7句(川柳と明記)

送稿先・塩満 敏

★伝統川柳から現代川柳

斎藤大雄著「川柳の世界」

定価一八〇〇円

内容目次

川柳というもの・作者から

読者へ・川柳の構造と創造

イメージの世界・民衆の美

学・情念の世界・女性と現

代川柳

発行所 (株) 近代文芸社

申込先 札幌川柳社

★川柳天守閣・豊岡川柳天

守閣・瀬戸川柳おとひめ・

共催蟹すき句会

日・59年11月23日(祝)

包む 杉森 節子選
風船 木野由起子選
竜宮 伊藤 好江選
眉 小出 智子選
便り 森本 清子選
私の女 庄司登美子選
菊 伊藤 定子選

所・日和山(乙姫荘)
(城崎駅前よりバス)
会費 八〇〇円
宿題 年頃・物産・牛・芋
・揃う・気兼ね・リ
ラックス・ニュース
懇親宴(句会出席者)
会費 一万二千元
申込み 川柳天守閣宛
★NHK川柳選者、森中恵
美子さん(摂津市)のご母
堂とみさんは十月十三日逝
去。告別式が十五日11時か
ら自宅で行われた。謹悼
▽お便り△
■若柳潮花様のご他界を知
りまして、お悔みの言葉も
ありません。謹んでご冥福
を祈り合掌致します。
(山内静水)
■このたびは本社句会に出席
させて頂き感激、これから
も許される限り出席させて
頂きます。
(桜井千秀)
■各社が「核」をテーマに
採用され、日川協からも
「核」のテーマの句集発行
を念じています。

白百合川柳社主催

第19回岡山県川柳大会

日時 昭和60年1月27日(日) 9時開場

場所 岡山県邑久郡邑久町 中央公民館

兼題

妬し 西尾 梨選

紙 室田 千尋選

握る 橘高 薫風選

冷える 水粉 千翁選

底 浜野 奇童選

天国 山本 柳化選

影 大森 一甲選

前田美巳代選

締切11時・各題2句

席題 当日一題

特別席題 当日一題(全部に呈賞)

会費 千五百円(発表誌、昼食呈)

投句 縦22cm横4cmの句箋、各題2句以内

投句料5000円を添え1月25日必着

〈投句先〉〒701-42

岡山県邑久郡邑久町山手1116

嘉数幸栄宛

(岩田三和)

■ 若い年齢からの川柳でなかなか上達致しませんが、ただ続けるのみです。

(小沢幸泉)

■ 中国の旅から絵ハガキありがとう。私、昔あの辺へ行ったことがあり感慨無量

新理事紹介

京都府	田中笑風
河内長野市	井上喜醉
和泉市	西岡洛醉
豊中市	田中正坊
尼崎市	春城武庫坊

新同人紹介

北田綾子
— 亜鈍・薫風・博泉・いつを推薦 —

星野侑正
— 葉・薫風・白汀・清泉・輝水推薦 —

でございます。

(川村好郎)

■ みな様御無事でお帰りになれてはと安堵、六日間の中国の吟行旅行如何でしたか、お土産話を。

(西川景子)

■ 上海ガーデンブリッジ・蘇州の寒山寺と庭園・満江下りは中国の想い出として私も昔を思い出しながら外人の気分です話す姑娘と

(山本規不風)

■ 見せて頂いたスナップ写真で旅の様子がよくわかりました。裏街、商店などに中国の生活があり、カメラマンの目のつけ所は流石と感心いたしました。

(高杉鬼遊)

■ やつと本社へ腰を上げることにしました。久々に皆様とお逢い出来て嬉しゅうございました。

(北野久子)

■ 中国旅行本当にたのしい自分に何かをみつけた様なよい旅でした。

(山崎君子)

▽句会案内△

■ 駒つなぎ川柳会

日・11月26日(月) 夕6時

所・寺田町・高松会館

兼題 酒・靴・よろこび・

ベン

■ 東大阪川柳同好会

日・11月24日(土) 夕6時

所・東大阪市社会教育センター

兼題 火・古い・縁起・音

兼題 由吟

■ 南大阪川柳会

日・11月19日(月) 夕6時

所・寺田町・高松会館

兼題 馬力・便乗・無事・

紅

■ 南海電鉄川柳例会

日・11月15日(木) 夕6時

所・南海会館内南海電鉄本社地下食堂

兼題 団地・甘藷・はがき

■ 豊中もくせい川柳会

日・11月19日(月) 1時

所・豊中市立中央公民館

兼題 阪急曾根駅下車スグ

兼題 あくせく・願い・白

☆ 新年号特集 ☆

川柳塔社同人総参加 (一人二句)

「私の一句」

(今年中に発表されたもの)

● 締切 十一月二十五日 着便まで

富田林市民文化祭

川柳大会

日時 11月25日(日) 正午開場

場所 富田林市中央公民館別館

(富田林駅下車右へ百米東側)

兼題 雲 板尾 岳人選

車 河内 天笑選

風 定金 冬一選

静 阿部 柳太選

足 西尾 栗選

席題 一題 当日発表

各題二句・詠み込み可

会費 無料 記念品・大会誌呈

主催 富田林市教育委員会

後援 富 柳 会

定金冬二作品集

『無双』 発刊川柳句会

日時 昭和59年12月2日(日) 10時半

会場 大阪府立労働センター6階

京阪・地下鉄天満橋駅下車西へ5分

題と選者

「ひらく」 (当日発表) / 渡辺 和尾

「敵」 橘高 薫風 / 田中 好啓

「生きる」 岩井 三窓 / 寺尾 俊平

「本」 小松原爽介 / 土居 哲秋

「さがす」 平田のぼる / 堀 豊次

共選につき同一作品を各題

2句出句、席題なし。

欠席投句拝辞。出句締切12時。

▽作品集「無双」鑑賞……墨 作一郎

▽おはなし……泉 淳夫

会費 千円(発表誌呈)

「無双」三千円(当日発売)

主催 川柳一枚の会

第8回

寝屋川市民川柳大会

日時 昭和59年11月3日(土) 13時

会場 寝屋川市立総合センター4階

京阪電車寝屋川駅下車、バスターミナル③乗場より総合センター前下車

兼題 柳和 磯野いさむ氏

「童話」 江口 度選

「散步」 井上 信子選

「伸びる」 小林 敬山選

「怪物」 大路 美幸選

「湧える」 岩本雀踊子選

「ラフソング」 森中恵美子選

「泣き笑い」 橘高 薫風選

各題2句・締切午後2時

席題はなし

主催 寝屋川市文化会川柳部

後援 寝屋川市教育委員会

昭和59年度

川柳塔社同人総会

59年10月7日

昭和59年度の川柳塔社同人総会は、10月7日午後2時から定刻に開催、議事次第の通りに和やかに報告と討議を進め、役員に5名の理事を新たに選任して、滞りなく終了した。
新理事 田中笑風・西岡洛醉・井上喜醉・田中正坊・春城武庫坊の諸氏。

口会計報告(高杉鬼遊)

口事業経過報告(櫻谷寿馬)

〈事業〉

58年10月・同人名簿発刊

58年度同人総会(2日、なにわ会館)

59年1月・NHK『よめやうたえや川柳天

国』に副主幹以下多数参加
新春おめでとう会(15日・大成閣)

6月・第8回全日本川柳大会(米子へ)

主幹以下多数参加。選者に八木千代氏、川柳大賞に森田熊生氏、川柳大会賞に高杉鬼遊氏、新家まさる氏

板尾岳人氏、川柳塔賞選考委員に選任

川柳塔誌寿60年還暦記念行事句集「川柳塔」発刊

7月・第20回路郎忌句会

8月・NHK『よめやうたえや川柳天

国』に前回通り参加

9月・川柳塔還暦記念行事として日中親善観光旅行に主幹以下24名、上海・蘇州・桂林へ6日間の旅

〈受賞〉

山内 静水氏 竹原市長より教育功労賞

小野 克枝氏 岡山県より文学選奨賞

長野 文庫氏 文部大臣表彰

東野 大八氏 第16回東洋樹賞

藤岡 花梢氏 厚生大臣より特別表彰

山本規不風氏 易学士称号授与

〈句集発刊〉

「川柳談話室」本田恵二朗(58・10)

「なにわ川柳」橘高薫風(58・11)

「光背」(遺句集)香川醉々(59・2)

「蜜柑船」大矢十郎(59・3)

「川柳塔」川柳塔社(59・6)

「ふろんぼ」遠山可住(59・6)

〈物故者〉

河村日満氏(58・10・31) 河村瑞川氏(58・12・2) 中筋三幸氏(58・12・30) 奥山弥山人氏(59・2・12) 鈴木村諷子氏(59・2・23) 菊沢小松園氏(59・2・22) 伊藤茶仏氏(59・5・8) 草深醉升氏(59・6) 新潟回天子氏(59・6・25) 若柳潮花氏(59・9・10)

〈新同人〉

(松原市) 小池しげお(姫路市) 増田とし

(姫路市) 丁坪サワ子(愛媛県) 米沢曉明

(大阪市) 吐田公一(岡山県) 土居耕花

(弘前市) 波多野五楽庵(岸和田市) 高須賀

金太(西条市) 片上明水(今治市) 矢野佳

雲(姫路市) 越田みつ子(熊本市) 有働芳

仙(鳥取県) 中原諷人(鳥取県) 森山盛桜

(米子市) 林荒介(名古屋) 越村枯梢

(尼崎市) 春城武庫坊(豊中市) 上田登志美

(西宮市) 草刈墮駄(寝屋川市) 堀江光子

(八尾市) 宮崎シマ子(鳥取県) 新家まさ

る(鳥取県) 北川民子

〈同人総会出席者〉

栗・薫風・与呂志・柳宏子・寿馬・春蘭・

荒介・瑞枝・萬の・雀踊子・庸佑・重人・鬼

遊・凡九郎・智子・吸江・悦郎・紫香・文秋

太茂津・武庫坊・幸・冬葉・水客・形水・弘

生・二三・十郎・喜一・まさ子

59年度二賞発表本社十月句会

十月七日(日) なにわ会館

59年度路郎賞・川柳塔賞は準優秀作を含め

受賞者六名の内、五名を女性が占め、男性陣の中ひとり気を吐いた田中叶氏が都合でお見えになれないとあつて、表彰式は文字どおり花が咲いたよう。喜びの受賞者へ豪華な花束贈呈が次から次へと続いた。(一昨年、私も受賞の榮に浴したが、あのとき花束を頂いたかな?)

堀江正朗・芳子夫妻、赤川菊野さん祝電ありがとうございました。

西尾栗主幹は「受賞された皆さんはこれに満足せず、受賞をステツプにして精進していただきたい」とお祝いの言葉を贈り、先般の中国吟行の旅のエピソードをユーモアたっぷりに話された。

初出席は林荒介氏(米子市)、舟渡杏花さん(富山市)。

今月の月間賞は山本規不風氏が獲得。

(進行―天笑) (受付―与呂志・重人) (史)

(記録―健司・射月芳) (カメラ―岳人)

出席者―与呂志・柳宏子・寿馬・萬的・春

蘭・雀踊子・重人・鬼遊・凡九郎・智子・吸

江・悦郎・紫香・太茂津・武庫坊・幸・冬葉

水客・文秋・形水・栗・弘生・十郎・まさ子

喜一・薫風・千世子・みつ子・年代・杏花・

光代・節子・千里・英佐女・満津子・道子・

英壬子・健司・康恵・勝美・美代子・狸村・

白溪子・三男・桂香・勝晴・英子・泰子・久

子・笛生・みつる・白水・笑女・荒介・瑞枝

一二三・幸生・喜風・冬子・婦美子・かすみ

春子・千寿子・射月芳・あいき・はつ絵・き

み・浦野和子・智慧子・只士・眉水・登志代

冬二・楓葉・章久・隆二・天笑・月子・蕉露

席題「動く」 定金冬二選

洋敵・正子・三十四・覚然坊・武雄・花村・
柳影・右近・規不風・史好・景子・度・柳伸
寿子・寿美・古都路・岳人・頂留子

山動く日も二人の絵を描く
ふるさとの玉子たしかに動いてる
動かずに一人の人を待っている
七人の敵の動いた風になる
故里を忍べば動く鱗雲
動いてないオモチヤにねじを巻きたがる
電話ベル鳴って空気が動き出す
ポケットに詰めたロマンがゆれ動く
あぶら虫動きとどめの掌を緩め
風動きメダカの列がくずれたり
動かない時は私が病んでいる
動く物それぞれ音を連れてくる
灰皿を動かし小さな気を配り
 positioningを動くと敵の矢飛んでくる
よろこぶと動く尻尾があればいい
禁断の実へ心動いてからの修羅
巧妙な動きだ首をたしかめる
ジョーカーの温み淀みが動き出す
木枯しが失意の心動かせる
よく動く一つ違いの妻である
よく動くばあちゃんいつかそとと死に

弘生
寿馬
泰子
雀踊子
あいき
冬葉
泰子
只士
喜風
与呂志
久子
まさ子
白溪子
楓葉
泰子
浦野和子
きみ
はつ絵
悦郎
笛生
勝晴

ゆれ動く胸は言うまい蕎麦の花
 モジリアニの絵秋は静かに動き出す 浦野和年
 真夜中の時計は悲しそうな顔をす 柳影子
 母の灯が動くと風が唸うかな
 ロボットが動くと情遠くなる
 黒幕が動いて秋が深くなる
 赤い実が枯れた心を動かせる
 石一つ動く軽さの無縁塚

年 代
 子 和
 影 柳
 人 岳
 伸 柳
 客 水
 郎 悦
 み かす



栗主幹を囲み（前列）はつ絵・寿美（後列左から）楓楽・瑞枝・桂香

人の影少し動いて父の湖
 やがて冬黙然動く編棒よ
 小さい秋が静かに動くかくれ里
 むつかしい事は知らずに動く母
 汚れ役どう動いても戯面のなか
 雑兵が動いて飯が炊きあがる
 裸婦像がまだ動かない一人旅

席題「ピラ」

林

瑞枝選

尋ね人ピラに悲劇が書いてある
 電柱のピラ公害の顔で散り
 ピラ配るだけで息する人もある
 闘争のピラは頭を下げて呉れ
 求人ピラを見ている吹きだまり
 背広から出てきたピラが気に入らぬ
 滝道にバートのピラが落ちていた
 ロボットが配ってくれる赤いピラ
 開店ピラ呱呱の叫びが踏まれてる
 寶石のピラは父ちゃんそっぽ向く
 美人バーピラがウインクしてくれる
 秋のピラ女ごころをもてあそぶ
 電柱のピラが知ってる暗い道
 車内ピラ程でなかった週刊誌
 落選のピラが笑って剝がされる
 ふさがった両手へピラを突き出され
 金バッジ狙ってピラは野宿する

岳 人
 月 子
 一三
 柳 影
 幸
 荒 介
 冬 二
 雀 踊 子
 喜 風
 勝 晴
 白 漢 子
 春 子
 英 子
 景 子
 英 子
 はつ 絵
 久 子
 あい き
 幸
 健 司
 萬 的
 桂 香
 水 客
 登 志 代

ピラを配ると人の心がよく見える
 ピラ記事に女の瞳燃えている
 失業のピラに喰い入る職さがし
 一枚のピラに男があやつられ
 エープリルフール父の浮気をばらすピラ
 金網の破れへピラが引っかかり
 待たされて隅までピラを読まされる
 私にはくれないピラで気にかかる
 捨てるには惜しいセンスのピラもあり
 電柱のピラ右派と左派とがからみ合い
 恩典のようにサラ金ピラくれる
 ピラを手にいざ出陣という化粧
 ピラ撒きも日銭追う身の運命なり
 離婚したわたしに届く秋のピラ
 やがて君らもピラの重さに潰される
 秋を着よ秋を食べよとピラが来る
 反戦歌非核のピラが舞い上がる
 名文のピラには落とし穴がある
 サラ金のピラで包んだ焼芋屋
 折込みのピラは主婦への挑戦か
 主義主張青年一途にピラ配る
 サラ金のピラで始まる鬼ごっこ
 ピラほどの軽さ転んでばかりいる
 一枚のピラ劇中の人となる
 ポケットのピラから冷戦続いている
 おとどしのピラから母はまるく老い

智 子
 狸 村
 喜 風
 与 志
 杏 花
 水 客
 天 笑
 楓 楽
 三 男
 杏 花
 はつ 絵
 吸 江
 覚 然 坊
 冬 二
 冬 二
 久 子
 只 士
 右 近
 吸 江
 眉 水
 楓 楽
 健 司
 杏 花
 弘 生
 三 男
 瑞 枝

兼題「手段」

板尾岳人選

計画倒産今度は妻の名義にし
直球で勝負手段は考えぬ

盗むより逃げる手段を考える

さわやかな手段で父は騙される

戸をとざし鶴は企み気付かせず

コロンブスに聞けば何でもない手段

生き伸びる手段に豆の木を植える

母の掌に手段はいらぬ手まり唄

いい手段途中下車して引き返す

ワイングラスの底に沈んでいる手段

逃げる手段が雑木林に落ちている

ライバルをだし抜く手段ドアを閉め

ただ頭下げているのも手段です

生真面目な男花束買いに行く

風の日には風に手段を聞いてみる

自らの手段に負けた鬼も居る

生き残る手段で三度のめしを食う

目的のために覆面する手段

花屋から花束届けさず手段

ぶらんこが風にゆれている手段

空っぽの財布で手段うかばない

ある手段しばらく死んだ振りをする

松茸にありつく手段考える

あのリング落す手段を考える

幸 女

幸 生

耕 花

太茂津

瑞 枝

射月芳

智 子

はつ絵

紫 香

重 人

幸

正 次

桂 香

健 司

冬 二

浦野和子

太茂津

幸 一

幸

康 恵

桂 香

智 子

楓 楽

道 子

生きのびる手段やどり木から貰う

手段もつないからバンザイしておこう

血圧を上げる手段を妻が持つ

手段などあれば離婚をするものか

蜘蛛の巣の真中にある手段

煙突に登る手段をそつと聞く

うどん屋のメニューに書いてある手段

ボケをつな頭で手段考える

壁の穴覗いて手段考える

玄關の灯りを消してある手段

松茸を食べると浮ぶよい手段

兼題「びつたり」

西田柳宏子選

びつたりの夫婦と仲人だけが言う

びつたりと合うのに金婚までかかり

ママの服びつたり似合う齢になり

びつたりと言われたままで夫婦老い

びつたりの子感虫から来た知らせ

アデランスびつたり青春呼ぶころ

びつたりと合って帳簿を疑われ

コンピュータにびつたりさん選ばれる

びつたりとライバルいつもついている

びつたりと犯人に寄りそう捜査官

ドアびつたり隣も向いも遠くなり

ビッターと言い当てられてから惑い

びつたりに作り着られぬ服となる

度

滋 雀

柳 伸

寿 馬

雀踊子

荒 介

健 司

月 子

萬 的

智 子

岳 人

妻 子

どんたく

幸 泉

墮 駄

千 秀

滋 雀

桂 香

洋 敏

満津子

節 子

満津子

桂 香

弘 生

母の感びつたり当る午後の雨

その時になればびつたり花時計

びつたりの息で夫婦に間違われ

びつたりと帳尻合って赤字です

びつたりの答に熱い茶を入れる

どの易もびつたり当てた女すき

びつたりとお酒をやめた青写真

びつたりと絵皿にとける深い秋

びつたりの中で角度を変えて起つ

気味悪い程にびつたりと妻の勘

びつたりのガラスの靴を夢に見る

月冴えてびつたり寄り添うシルエット

小さな秋にびつたりの秋刀魚焼く

びつたりで存在感が薄れ出す

びつたりのアリバイ疑惑尚つものり

二十年やつとびつたりいく夫婦

帳尻をびつたり合せた罪がある

びつたりと合わぬ日もある二枚貝

父の忌にびつたりと咲く父のバラ

ひよつとこの仮装びつたり温い父

どじばかり踏んでもびつたり夫婦です

びつたりと空気の如く添って老い

びつたりと背中合せの運不運

びつたりと割符の様に合う夫婦

びつたりと合わぬうれい妊婦服

びつたりの蓋では愚痴が洩らせない

康 恵

柳 伸

月 子

蕉 露

寿 子

三十四

春 子

寿 子

美代子

幸

杏 花

千 里

泰 子

三 男

智 子

雀踊子

英 子

冬 二

規不風

婦美子

白 水

千 里

天 笑

重 人

荒 介

再起する息がびったり妻と合つ
びつたりと合せた掌から祈り洩れ
柳宏子 冬二

兼題「新鋭」 大坂形水選

新鋭の明日ボンコツの目に出会う
新鋭の背は直角に風を切り
新鋭の道を邪魔する古狸
ルーキーの夢はばら色にふくらます
童顔の新鋭が打つホームラン
新鋭機一機減らせば出る予算
中国の新鋭日本にあこがれる
新鋭のくさがりが明日へ伸びてゆく
新鋭が入団ベンチ暖める
新鋭へ軽いお喋りしてしまひ
新鋭のベンが社会の恥部えぐる
新鋭は百科辞典を持っていた
新鋭が古老の意見聞き廻る
無造作におすしをにぎる新鋭機
新鋭と擦れ違ふとき風がある
たてがみを立てて新鋭走り出す
粒選りの新鋭が来る社内報
新鋭に育ての親が鬼に見える
新鋭を期待しすぎた棒グラフ
社の新鋭ボクのポストを狙つて
新鋭にベテラン過去をタプらせる
新鋭が上手に跨ぐ落し穴
赤木和子

新鋭の明日を占う向い風
新鋭の夢は拍手に支えられ
新鋭のデザイン絵の具を惜しまない
新鋭の背広は風を切っている
新鋭と紹介されてから久し
新鋭が三角形の上にいる
新鋭のパチンコ台に吸い取られ
認められてからの新鋭重い足
新鋭の目は正面を向いたまま
新鋭がだんだん丸い口を利く
新鋭が動くグラフ昇り出す
新鋭のエゴで地球が汚される
新鋭のロボット機密しゃべり出す
新鋭の中に目立つた紅一点
新鋭の先物買いの瞳が光る
新鋭を叩くハンマー持っている
新鋭がよんだ水をかきまわす
新鋭が古い葉をとりあげる
新鋭の手柄ベテラン持つてゆく
新鋭の武器を少年考える
新鋭はひとりも居ない昼の汽車
新鋭と離されてからひとりぼち
新鋭はけわしい坂に身構える
新鋭がラッパの音に乗って来る
新鋭と呼ばれて神を見失なう
新鋭の弱点ビデオで探し当て
瑞枝 桂香 眉水 智子 水客 道子 天笑 柳宏子 十郎 弘生 紫香 悦郎 年代 覚然坊 浦野和子 重人 度 度 蕉露 岳人 荒介 年代 春子 荒介 冬二 形水

昭和59年度 大阪文化祭 第36回川柳大会

日時 昭和59年11月17日(土)11時開場
会場 大阪府中小企業文化会館14号室
地下鉄谷町九下車南へ徒歩7分東へ入る
又は四天王寺前下車北へ徒歩7分東へ入る

宿題 「時事雑詠」
「或る日」
「亀裂」
「美」
「ころ」
「顔」

席題 当日2題
各題2句・締切1時
(出句は出席者に限る)

賞 大阪府知事、大阪市長、大阪府・
市教育委員長から「川柳賞」贈呈

会費 五百円(作品集代を含む)

主催 大阪府 大阪市
大阪府教育委員会
大阪市教育委員会

兼題「道」

橘高薫風選

夜道来て高層の灯を美しと見る
分かれ道野菊の咲いている方へ
坂道と廻り道との人生譜
ちよつと来ぬまに道が出来たり無かつたり
美しく生まれて道をよく聞かれ
亡母と逢う彼岸会の道花を買う
道連れは女ばかりと言つておく
聞いた道素直に歩む年になる
御堂筋銀杏が若木だった頃
どの道を行けどサイ銭箱がある
道々で考へてた事よつ言わず
私には私の一本道がある
ゆつくりと歩いて別れ惜しむ道
新国道外科病院もちゃんと建ち
道しるべ亡母の言葉がよみがえり
廻り道してクワガタを捕まえる
ただ歩く道にも小さな出会いあり
良寛のうた口ずさむすき道
目隠しをされても歩ける道がある
横道に逸れて冷たい夜が続く
平凡な心で道を守り抜く
緞帳が降りてもふたりの道がある
男道女道とは交わらぬ
男を試す道には北の風が吹く

綾珠 勝晴 妻子 幸一 洋敏 一二三 久子 みつる 春子 十郎 与呂志 智慧子 春蘭 花村 春子 耕花 千里 みつ子 隆二 久子 狸村 荒介 度 二三

別れ道女はきつと右へ行く
栄光の道が段々重くなる
岐れ道夢拾うたはこのあたり
札束の味裏道に來て解かり
トンネルの向うは明日へ続く道
山道を歩きつかれて塔の影
新しいようで母娘の同じ道
エリート道の道銃口がのぞいてる
熟年の道は頭で歩いてる
笛の音が聞こえて道行らしくなる
枝道に話がそれて異魔化され
それぞれの道のり所詮墓へ着く
道を説く人よ傲つていませんか
道ばたで売るのが似合うリング飾
タンポポの道知らないランドセル
道ならぬ恋にいのちは一つなり
先人の跡消えてから道嶮し
わらべ唄だんだん道が狭くなる
道一つ自分をためしつづ生きる
余生猶花ある道を選つてゆく
サルビアも思想魯迅の墓の道

(清記・楓楽)

〔訂正〕前月号P58下段堀江光子さんの作品
上句を「七夕の」と訂正。

千里 正次 桂香 浦野和子 春蘭 みつ子 重人 武庫坊 水客 吸江 杏花 楓楽 史好 悦郎 鬼遊 弘生 道子 凡九郎 規不風 薫風

柿花紀美女

作家賞受賞記念句会

とき 11月20日(火)夕6時
ところ 堺青少年センター
兼題 柿・花・美・女
堺月例句会に代えます。

堺川柳会



賞状を受ける福井桂香さん

進学を控えて短い夏休み

高三 愛

残暑なお耳を澄ませば虫の声

静水

背泳へおてんとさまが高くある

蘭幸

親と子の岐路矢印は子に書かす

菁居

受験の子やたらとシヤワー浴びている

敬子

力一ぱい鳴いて蟬には海いはない

笑子

わらべ唄亡母に習った草履編む

節夫

体操で今日のドラマの幕があく

博子

四捨五入出来ぬ情けを良しとする

令子

人の世の運命原爆忌の暑さ

鈍舟

海は広いな二人の子を連れて

比呂子

いくばくの余生これからこそ夫婦

房子

若い若いと言われ自分もそう思い

シゲヨ

理想追い過ぎてお相手みつからぬ

一路

川柳わかやま加太吟行 堀端

三男報

読書という止り木がありひとり住む

寿子

一冊の座右の本がすり切れる

和子

親と子の合作読書感想文

稚代

愛読書忍ばせておく旅カバン

正子

読書好きな孫に雷機嫌よし

勇太

ページ繰る音が豊かな夜にする

狂虎

若い日の読書もの言う今日の智慧

光代

詩集読むひとときこころ風となる

よし津

才女逝く「紀の川」読んだ日も遠い

江美

腰痛でやむなく読書するばかり

伊三郎

教科書を読んでも本音書いてない

武庫坊

子が孫にかわってグリム童話集

岳人

古本屋九月になれば笑うだろう

公子

泡ふけどふけどたぬまぬ母の愛

武雄

初恋の淡きビールの泡に似る

水泡の恋日記の中に生き続け

ストレスを泡で吞みほす縄のれん

鮑手に泡の中から海女が浮き

うたかたの泡それぞれにある運命

下手なウソの愛を泡にする

合わす掌を煎じ葉の泡に賭け

泡食った男に女すましてる

泡食ってから石橋を叩く杖

泡となる夢でもくじを買いつづけ

泡沫の中で生き抜く歌手の汗

うたかたの世を鳴きしきる法師蟬

歳月に泡と消された泣き笑い

泡一つ入って製品駄目になり

所詮泡消える噂だ氣にしない

泡となる出世へ潔白貫いて

インテリの無口ときどき本を読む

インテリに育てた親にそっぽ向く

インテリと言われ汚職に名を連ね

インテリのレッテル貼って無味無臭

インテリの知ったかぶり鼻につく

インテリが静かに燃えた大正期

インテリが冷たい横顔持つてゐる

インテリで肩のこらぬ生字引

インテリのレッテル剥がす夜の街

インテリは太った豚を嫌ひ抜く

インテリで村一ばんの土嫌ひ

インテリのペンで時どき人を刺す

インテリの鼻が邪魔して脱げません

インテリを一生嫌ひ抜いた亡父

一郎

メ女

紀雄

白漢子

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

杜め

わかあゆ川柳会

小砂

白汀報

火葬場でのど仏拾い壺に入れ

共稼きかるく掌をふり右ひだり

ねむる水流が起こしてしぶきあげ

ハイハイ返事している勘ねてゐる

通過する度に前世話のどの仏

女形 隠しきれないのど仏

宵祭り金魚子供を揃ひ上げ

とはいえど四捨五入した愛なので

一色にぬりつぶされて旗を振る

減反に古米も拗ねた米不足

初対面牛の手綱に拗ねられる

金魚売はずせばいいのにサングラス

のど仏ばかり見ている寄床の客

人間を終った姿ののど仏

フエンがあり幸せに拗ねられる

のど仏アタムのりんごとは愉快

そこまでは言わぬがよからうのど仏

京都塔の会

ひとつずつ絆たのしむ土用干し

雑踏で互いに旧姓たぐりよせ

ふと夫無口になった神経痛

もう妻の歩幅に負ける歳になり

地下鉄延長竜宮城へ行ける日も

一皿に木曾を盛りきる五平餅

齢かな扇子の風が好きという

一人旅駅弁の生美かみしめる

後ろ姿にスタイリストの老いを見る

鳴き交す蟬縄張りがあるのかも

蟬しぐれ滝までつづく馬車に揺れ

敏明

笑子

智重子

英子

世似

ヒデ子

秀穂

恵美子

三和

輝水

清泉

民子

美栄

鈴江

はるみ

歳栄

白汀

杜的報

春江

葉子

花代子

潮花

花村

和友

年代

武庫坊

美穂

冬子

白漢子

笛珠

切れ味の悪い鋏を離せない
師が持てば同じ鋏の音も生き
開通の感激テープを切る鋏
ままことの娘がいつからか鋏もつ
男の掌にはわたさない裁ち鋏
いつの日か仲間が割れる鳳仙花
指くわも仲間はずれの子がひとり
いひ汗をかいて仲間の輪にとける
木の下に仲間はずれの子が一人
脇役の仲間といつも手をつなぐ
やさしさの風を背負つて来る仲間
山彦もヤッホーもどすい仲間
踊りの輪仲間外れる影二つ
渚まで降りて二人がまた迷つ
茶柱に小さな迷いがふっさられ
矢印がまだ許せない迷い道
迷う事減つて自信がわいてくる
迷わせた罪は時効にしてあげる
迷うのは母で娘は決めている
世迷いことではない反核の真の声
泣きはくろ男に迷つよう生れ
宇宙にも迷い子がいる流れ星
一日として関白の座におれず
女房が顔負けをするかしく芸

サークル檸檬

田形

千代 正朗 翠星 早苗 孤呂二 寿美子 昭二男 満江 雄々 正江 芳子 多賀子 荒介 鳳人 秀童 愚童 きみえ 由郎 渡根一 鶴丸 壮樹 町紅 美緒報 美太 柳房 岳人 章子 登美子 登志美

仏像の柔和な笑みに魅せられる
許される罪のある世が生臭い
雑草と呼ばれて人の役に立ち
許されてかえつて気持ち落ち着かず
心して嘘をならべる許しのかた
私より先に逝くから許せない
玉葱を刻んで何もかも許す
草ほどに家庭菜園のびもせず
許されぬ罪も和解の示談金
エピソードになつて奇癖は許される
ひとり身は草引く時に物思ふ
許されぬ恋でなければとうに冷め
許すとは許されること老夫婦

菜の花句会

高杉

よし子 今日子 美子 千代女 千代 美代 森子 雅子 美緒 泰子 三四子 惠 薫風 天笑 薫風 寿馬 三十四 柳宏子 シマ子 健司 冬葉 雀踊子 頂留子 射月芳 柳伸 鬼遊 弥生 幸生 智子

鬼遊報

サングラスかけてないのが組のボス
満月に吠える男でない様に
ボスの好きなワインは奥から出してくる
悪友の一人が市議に立つという
傷口を優しくなめる女ボス

川柳大阪

井上

寛然坊 糸葉 美幸 景郎 喜醉報 謙翠 醉花 嘉孝 比呂志 鉄心 弘雄 喜醉 金太 司 敏 重人 だるま 晃山 天平 本蔭棒 しげお 花子報 朗子 時子 富枝 八重子 とも子 玲子 純子

子を寝かせ女に戻るしまい風呂
神にさからう女の足はよくもつれ

紙屑の私語が聞える籠の中

指先にうすい情の老母ごより

絹糸を紡ぐ女の人生譜

母親になって女が風に立つ

旅終えた重荷に切られた紙バック

紙面から夢を広げて一行詩

卒直な愛へ戸惑う女の炎

むなしさにくす籠の紙音を出す

竹の葉が落ちる女の傷口に

紙風船行先決めて飛んで行け

いつまでもそばに置きたい娘の巣立ち

もくせい川柳会 田中正坊

大欲が無欲に見せる遺産分け

欲ばって貯めて兄弟不和となり

お隣のカニが大きく見える膳

青春の夢偏差値が打ち砕き

留学の孫遠ざかる飛行雲

大空をキャンパスにして描く雲

雲行きを見て反論をひっこめる

忘れ癖入道雲ににらまれる

ワープロだけ新人に頭下げ

新しい傷が柱についている

平凡に生きる喜び新茶汲む

一夜明け夏と秋とが入れかわり

ママの留守只管に来る孫の愛

ブローチを頂き老女はしやきおり

ねぎ刻み老いの母には今も負け

夢の中 夢の蘇州がふくらむよ

片ちびの靴ころがしたまま悔み

みど里

日枝子

千春

なみ

花子

富美子

美世

田鶴

瑞枝

寿美子

千代

晶子

寿々子

博史

美祢子

よし子

隆

富子

登志実

正坊

寿美子

明吉

英子

きく子

しず

房子

賀代

慶子

薫風

紫香

陽のあたるとこへ結んでおくみくじ

南大阪川柳会

眠れずに私と私が対談す

対談の合帳同じ罪にされ

気配りのある対談の爽やかに

税務署の対談の椅子あさく掛け

星と対談もつ少年の眼がきれ

対談の一こまずらす茶が這入り

シナリオの無い対談が盛上がる

対談で入社の資格試される

神はいたずら誓いの詞聞き流す

もう妻に誓うことが通じない

優等生らしい誓いが気にいらず

酒を断つ誓い印刷しておこう

口だけの誓いがむなしシャボン玉

小指からませ誓った幼い時もあり

その時の都合で背伸びしてしまっ

何とか都合つけると忙しそうに言っ

都合上小さな嘘も隠される

目算があつてか都合ききにくる

恐妻で都合の悪いことばかり

一姫に二郎郎都合よく生れ

都合良いいこと並べセールスくたびれる

飲みに行く都合は上手につけてくる

都合よい話へ悪友ついてくる

定年になつても戦さは終わらない

定年で降りた駅には道がない

悔いのない定年と言えようそになる

定年へ明日の地図を考える

定年日三日余った定期券

やどかりに定年以後を教えられ

中川 滋雀

楓報

恭太

柳宏子

鬼遊

春蘭

晴風

田女

喜美子

白兎

慶三

恒明

千代三

秋子

綾珠

智子

文秋

勝美

頂留子

眉水

喜風

凡子

蘭

山久

千里

只士

千梢

公一

章久

弘生

定年の肩に重たい二女三女

旧友と会えば定年後のはなし

当然な事が噂の風の街

当然の流れを愛する袖の下

当然を期待するから裏切られ

当然の地獄が見えるあぶり出し

当然の行い孝子と賞められる

対談ではのほの感じた人情味

川柳泉尾

グリコ犯早くしっぽを出したまえ

ご主人に犬は尻尾をはでにふり

尾を切つて飛ばしてやりたい尾長鶏

引潮にどじなシッポはのりおくれ

巧い話きつとシッポを出すだろ

小賢しい犬で上手に尻尾振る

囲まれて昼の一番手が軽い

一戸建てしげしげラシの中に住み

くずされた積木一からやり直し

町内に味一番の店ばかり

オリンピック皆一になれ一になれ

ビール瓶振つてもう一本ええやろ

何事もここ一番が肝心と

故郷は山河と共に泉あり

ふるさと民話の泉消えている

盗泉の水に河童の影も隠せ

尼崎いくしま川柳会

留守番の子供に駄賃高くつき

ひとり酒ちよびり愚痴を覗かれる

やせる本読んで前よりチトふとり

思い違いばかりしている花鏡

人気歌手幸せすぎたサイン攻め

寿美

雅風

雀踊子

善信

柳伸

滋雀

覺然坊

庸佑

寿美報

多和子

葉子

道子

景子

律子

美代子

弘子

昭子

敏

恭子

淑子

文子

カツ子

白水

ツメ子

寿美

角野かず子報

ときお

君子

幸子

牧郎

静江

娘の留守に昔の話するふたり
幸せがほしい死角の易になつ

貞子 かすみ

仲人へ台風一過とする電話
四ツ辻に風紋残して行く美人

森久
子子

朝顔の今朝も咲いてる良い目覚め
許されぬ許してならぬトマホーク

ふ 静
み 子

特訓をつんでも鶴にもあるエラー
気の利いたガイドだったとバスの旅
孫と居る一刻マリアに近くなる
嫁のメモ持って婚嫁市場蹺
金捨てる罪になるとは知らなんだ
ライバルがそこそ仲はず棒グラフ
情熱はまだまだ消えぬ五十坂
情けある方が勝者でない歴史

岸和田川柳會

植山

武助報

食べる事好きな仲間で気が揃い
雲一つ地に落ちていた水たまり
髪染めてしわものばして見たい欲
太陽にキッスひまわり背のびして
東慶寺萩に見とれて駄込めず
無花果が小さく熟れて秋深む
匂いだけですと松茸めし二合
亡母の箱勿体ないが詰めてある
傷口を洗ってやれる言葉選る
本当の自分で居れる小さい城
生返事娘は恋をしたらしい
面影を憶ふと揺れる丸木橋
楽しみな約束つまる予定表
秋風が吹くと涙を落す星
老骨の意地一笑に付されそう
手答えが鯉に限ると釣マニア
幼稚園はだしに親も賛成す
里がえりはだしにさせている廊下
雑巾で小さな裸足追い廻し
試歩の足裸足で大地のぬくさ知る
消防車去って裸足が五六人
玄人もはだしのノドに酔っている

登志代
晴子
倫一
頼一
三和
山久
茂一郎
弘生

カラオケへプロもはだしのしぶい声
さざ波にはだして歩く影二つ
砂浜で解放感になるはだし
砂浜を歩くはだしの心地良し
はだしで言いつつ何時か蔵を建て
プロはだし殿様芸という事か
笹舟に所詮かなわぬ恋をのせ
荒海も愛でのりきる夫婦船
船旅は疲れませんと旅行好き
倅せは今宵母娘の遠花火
尺玉へ花火師命賭けている
人間は大袈裟だなどと思う蛇
宇宙船いくさの地図を持っている
船酔いにおぼあちゃんのお呪い

打吹川柳會

奥谷

弘朗報

反對の道を行く子へ乾く愛
反對の若さを親として怖れ
反對をされて二人はなお燃える
反對の立場の人の身にもなり
指導者のない反對が恐ろしい
反對の出来ない義理のあるつらさ
反對を言えば気がすむ人もいる
首振った両親孫を抱いている
反對をした子が今日の花を持ち
反對しても理屈に親も負け
親の夢子の夢違う道を選り
無為無策休耕させて米輸入
なびいたり反對したり共白髪
義理とカネ反對の口ふさぎに米
廃止線陳情団はバスに乗り
背の影に賛成の手を低く上げ

倉吉川柳會

渡辺

菩句報

頂留子
滋啓
湖風
春蘭
良京
弘生
慶三
美子
覺然坊
喜風
勝美
度
雀踊子
喜一郎

子を抱いて親が反對説きに来る
我を張れど妻の反對にがく受け
信念をもつ反對へ夜叉を抱く
ハワイ川柳ウイロ社 市岡
口のみが肥えて食事に文句言い
肥えすぎる娘盛りをもてあまし
肥えられる時代に生きる感謝あり
肥えながら妻の道楽ニユードレス
肥えた妻威張って歩くように見え
肥満症汗拭く癖の病上り
色男肥えるばかりで能はなし
肥りすぎ此れが浮世か四疊半
女心肥える姿が気にかかり
肥えるのもやせるのも秋風まかせ
肥えながら美人やさしいお嫁さん

柳風
豊
雄々
曉舟報
公女
拝山
陽子
虹宵
張賀
万里歩
曉舟
一夢
香夢
紅溪
蒼生

カラオケへプロもはだしのしぶい声
さざ波にはだして歩く影二つ
砂浜で解放感になるはだし
砂浜を歩くはだしの心地良し
はだしで言いつつ何時か蔵を建て
プロはだし殿様芸という事か
笹舟に所詮かなわぬ恋をのせ
荒海も愛でのりきる夫婦船
船旅は疲れませんと旅行好き
倅せは今宵母娘の遠花火
尺玉へ花火師命賭けている
人間は大袈裟だなどと思う蛇
宇宙船いくさの地図を持っている
船酔いにおぼあちゃんのお呪い

早苗
いわ子
梅朗
紫映
弘朗
孝美
繁代
一心
志づ子
規仔
吉朗
文子
弘生
重信
八太朗

オープンにとても華麗な招き猫
趣味の道にも中央に金がある
中央の流れに杭が打ち込まれ
駅前の広場で恋の風が吹く
駅前に起点にしては道教え
駅前にサルビア燃えて無人駅
結婚式済めば天下は妻のもの
オープンの宣伝社運路にさせ
中央のネオンが村を過疎にさせ
駅前の本屋で秋は暮れにけり
泣き虫は卒業したと喪の女
泣き虫の人形はいつも棚の隅
オープンにオッチョコチョイが顔を出し
回復の景気へ駅前脈を打つ
オープンの会議邪魔する贈曲り

松女
光枝
あや子
とめ子
しづ江
律子
満春
秋人
観洋
喜美子
千秋
弘朗
雄々
かつみ

駅前のもやを破つて汽車に乗る
公開にすれば庶民がうるさすぎ
泣き虫の女がたどる細い道

駅前交番で聞く秋の道

結婚写真のそと等は不審がり
未知数のスタート自信は愛ばかり

母の来た道はふむまい魚隠し
中央でこらげた椅子がいばり出す

泣き虫の鬼であれもつかまらぬ
結婚の夢をみていた蝶の羽化

萩の野の中央にある開拓碑
条件をのめば結婚すると言ふ

男なら再再の婚の夢

川柳さやま

水割りへまだ熟年の威を保ち
水子像老いても胸に持つ思い

一滴の水にも弥陀の心知る
咲いて散る命がほしい水中花

裸とは知らず電話へかしこまり
丸裸すってんてんの泣き笑い

矢印に行けばヌードの小屋に着き
土端場で裸にされた蟻地獄

浴衣縫うポーズにならぬ糸切歯
警察は秘かに一人首を切り

捨て切れぬ思い小さく老けて行く
裏切りし女の歩幅にある理屈

切り廻す嫁に歩幅を合わせとく
金バッジ着け言うことが違てくる

機密です長官はかす記者クラブ
たて前と立場の外にある本音

尾浜川柳会

上田 佳秋報

河原みのる報

文平

百合子

久子

米朝

和子

ひか平

素水

法齊

美智子

胡次郎

テル

ゆう也

千代子

可住

越山

宗珠

苦句

独歩

石花菜

荒介

まさる

やえ

ゆり子

瑞枝

車楽

みなと

文子

柳風

亜弥

車風

柳風

車風

車風

狙われてまだついてくる風来坊
狙ったが女は羽を持っている
物思ふ部屋のおんなは大胆に

おもつこと多しわたしも婆さん
グアム土産日本製を持ち帰り

里帰りみやげ話だけにする
地下街で郷土のみやげ買って

着くたびに土産買いたすバス旅行
みやげ買ふ陳列棚へ孫の顔

寝返りを打てば時計が話しかけ
万華鏡昔の私見てみたい

まむし酒女がくれるから怖い
ドブクロで飲むのを覚えた遠い過去

娘の愚痴を母が笑顔でみんな飲み
声高に話す人信じよう

平和への声が聞きたい千羽鶴
適当に不安があつてボケさせず

心配の絶えぬ娘がまだ一人
単身赴任夫が今だに帰らない

ふるさとにトンボの遊ぶ池がある
二期期になって昆虫ホッとする

駒つなぎ川柳会

里小路報

善信

潔

東雲

真砂

笛生

美津枝

あおい

文秋

不二夫

指導者の強気の果のきのこ雲

目玉商品はかり追う程暇がなし

無表情で作戦を練る土俵下

カラフルでブルーは若い水着ショー

目玉商品はかり追う程暇がなし

指導者の強気の果のきのこ雲

よしつぐ
武庫坊
寅之助
牧郎
光重
江美
すみ
夢之助
弘治
昌子
紫香
佳秋
弘治
良征
歌子
貞吉
貞弘
礼子
保男
貞男
小路報

右も左も大人だから喜劇です
ブルで灼けて海の匂いに遠くいる
それが作戦踊つてた私

孫達の澄んだ目玉にいつも負け
珍らしく強気の母に父が折れぬ
精一杯背伸び大人にまだなれぬ

サンクスビキニの批評するブル
安全な所に作戦司令室
大目玉喰う友情を持っています

先生も大人だ嘘も教えるよ
江の島へ遠出の顔で行くブル
下り坂作戦たてるひまもない

妻帰省カレーと目玉焼つく
強気に攻めるからリボン用意する
年甲斐もなくアホなことしてしま

作戦を立てた頃から胃が痛む
北浜でかば焼食べている強気
人間の恐ろしく大人になって知り

作戦のミスで颯を貌を出す
欲のない強気が鬼をたじろがせ
盛り場に大人マンガが落ちて

親と子のスキップがあるブル
作戦に役かっている案山子
生き馬の目玉が落ちて

五分五分のところ強気顔を出し
いつまでも強気とそつと見て
大人にも子供にもなる父で好き

養子三代女強気になるばかり
オーエスケ川柳会

大坂 形水報

聖地

扇

美代

冬葉

凡九郎

円女

幸生

柳宏子

柳宏子

柳宏子

柳宏子

柳宏子

柳宏子

柳宏子

柳宏子

柳宏子

シャツも着ずボンボン出して逃げ回り
 パーグにチラシのシャツだけ売れてゆき
 Tシャツの中で若さがゆれている
 発車ベル女はホームに背を向ける
 近所ではおしどり夫婦と思つてゐる
 真夜中に危篤知らせるベルが鳴る
 風鈴もなりをひそめて熱帯夜
 鈴を集めて女独りの棚を持つ
 一枚のシャツを着合つて若夫婦
 柳柳はびきの 塩満
 イニシアルで妻が出てくる古日記
 二代目は天下取るとは限らない
 焼きめしを注文すればピラフくる
 表札も横文字で住む北野町
 兵舎の蔭あれがテートだったのか
 雨宿りお札に賽銭置いて出る
 診察の嘘も知つて聴診器
 今は昔は昔美青年
 ああ平和ゲートボールの球が飛ぶ
 敵中ではだかに成れる年になり
 何くわぬ顔して浮気の虫を飼う
 焦るまい廻る地球に身をまかせ
 昔来たテートの店へこぶを連れ
 痛いのはわたし踏んだのはあなた
 お月さん内緒にしてね彼のこと
 新旋風多賀竜小錦大相撲
 横文字が入って値段高くなる
 弟に二代目ゆすり好きな道
 横文字に馴染まぬ母の職系
 二代目の車少しは広くなり
 日記焼く悲しいまでの恋だった

亜也子 秀 泉 亜 水 亜 成 博 泉 中 野 登 入 仙 形 水 敏 報 吐 来 昭 子 重 樹 美 代 子 淑 子 繁 男 末 一 義 一 只 士 みつる 司 泰 子 隆 隆 美 代 子 伴 子 忠 宏 昇 隆 二 寿 美 石 橋 義 一 胡 村

テートした日記の中の息づかい
 彼岸会に大師詣りも六十年
 二代目へ万円札の座を譲る
 背伸びした若い日記の一行詩
 名月が芸術の秋つてくる
 西宮北口川柳会 妹尾 春江 紀 雄
 政治屋の供花は目立つ場所に置き
 落ちこぼれ目立ちたがつて悪さする
 目立ちたがり少し静かに出来ないか
 肩を組む二人目立たぬ時代なり
 あご髭をつけても女見てくれず
 萩咲いて雲の流れに慕情おく
 ボケたなら一日雲を見て居たい
 入道雲怒れる亡父の顔に似る
 ささやきが途切れて遠い雲を見る
 ちぎれ雲だんだん好きな人になり
 又会える約束は無い千切れ雲
 秋の雲いつか一人になるだろう
 入道雲ばかり画いてる反抗期
 雲一つない不安になつてくる
 祖先の土地離すときに雲走る
 別れて川の流れは同じなり
 別れほど悲しきもの地蔵様
 別れ話一日のばしの朝があけ
 点となる船を見つめている別れ
 別れは無限の愛を呼びかける
 防風林別れのつらさ知つて
 別れればいいのに犬と狼がいる
 別れても幸せつなく橋がある
 会者定離切れたとかげの尻尾追つ
 ご時勢が妻に三行半書かせ

憲太郎 喜代子 一 屯 与 呂 志 敏 紀 雄 上 志 子 一 郎 隆 子 冬 子 春 子 幽 香 東 洋 男 か す み 弘 生 礼 子 寿 馬 年 代 郁 榮 い わ ゑ 泰 世 園 歩 文 子 君 子 伊 三 郎 保 蔵 惠 美 子

浮浪者が連れてる小犬よく肥り
 休日にかけた電話に叱られる
 色めがねやはり二人はゴールデン
 秋風が吹いてもトンボ来ぬ団地
 三度撰る食事に三度薬包紙
 旅先の妻が電話で指図する
 仲のよいうちは辻占馬鹿にする
 妻と娘で練った作戦とは見えす
 ススキ咲く記憶は薄れゆくばかり
 結び目が解けて昨日が愛になる
 六畳の部屋に五人の熱帯夜
 うどん屋の箸は気どらぬ音で割れ
 海峡を越すたびいのち確かめる
 新体操のテレビに見入る祖母若し
 出戻りの姪を泣かして貰い泣き
 パラソルの中で秋を運んでいる歩幅
 反省をするとりんごがよくむける
 ひぐらしが鳴くから夕やけ美しい
 指切りを果たせぬままに時が過ぎ
 一芸に秀でて貧しい父の肩
 十五夜の空を気づかい芋洗う
 樹海から出ると真白い風が吹く
 柳 影 まさお 照 子 佳 秋 右 近 光 子 歌 子 庸 祐 美 智 子 舟 二 墮 駄 婦 美 子 は つ 絵 千 世 子 てる 眉 水 武 庫 坊 笑 女 春 江 き 子 紫 香

記念句集「川柳塔」訂正

日下部逸蝶氏（135頁）の最初の句は
 「売つてないこの世の旅のグリーン席」
 が正しい句です。お詫び致します。

● 募 集 ●

一月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「米」 時末 一灯 選
「けじめ」 垂井 千寿子 選
「言い訳」 内海 幸生 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

二月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「首」 恒松 叮紅 選
「意見」 福浦 勝晴 選
「騒ぐ」 仲 どんたく 選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋を、使用ください。

11月の常任理事会は1日(月)

定価 五百円 (送料50円)
半年分 三千二百円 (送料共)
一年分 六千三百円 (送料共)

昭和五十九年十月二十五日印刷
昭和五十九年十一月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎
発行人 藤原 童心 社
印刷所 藤原 童心 社
〒545 大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社
電話 (六六九) 六九一四番
振替口座大阪 813336八番

若柳潮花追悼 11月会

日時 十一月七日(水) 午後六時
会場 なにわ会館
天王寺区石ヶ辻町19-12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話 06・772・1441番

兼題 「おはなし」 黒川 紫香 選
「舞台」 藤村 女 選
「引退」 松川 杜的 選
「友達」 小出 智子 選
「香水」 西尾 栞 選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
会費 五百円

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川柳塔社

12月の兼題 「銀河」 「ふらふら」
「松」 「平」

12月の本社句会は7日(金)

年賀広告受付!

★一口五百円 (タテ3・3cm×横5cm)
本誌5段組(柳界展望)の一段分が二千五百円です。

★原稿締切 11月25日

★送り先

八尾市中田二丁目三〇二 高杉鬼遊方

川柳塔社会計室

編集後記

☆誌寿還暦を記念しての事業の一環に、日中友好、中国吟行の旅を計画したが、栗主幹をはじめ一同元気に所期の目的を達して帰国することが出来た。まことに楽しい旅だった。路郎先生は、かつて二度に亘り中国に遊ばれたが、今回は先生曾遊の地から外れたコース上海・蘇州・桂林を訪問した。

☆上海で陸明海氏と交歓して、記念句集川柳塔、雑誌川柳塔、記念品の人形などをお渡しした。陸明海氏もお若い方だったが、到着から離陸まで面倒を見て下さった楚さん、蘇州を案内して下さった申さん、学生ガイドの虎さんら、多くの若い人達とお会い出来たのも収穫だった。皆さん日本語がとて上手く、日本文学の理解も想像以上で、もう一度お会いしたい人ばかりである。

☆同じ物を食べ、同じ所を歩いた二十四人の五泊六日

それぞれの方々へ一番の印象を綴って貰うことにした。

☆例年の同人総会、二賞発表受賞句会も華やかなうちに終った。受賞者は準賞を含めて六名のうち一人だけが男性で、ここにも女性上位の傾向が顕著である。それに柳歴の比較的浅い作者の受賞は、いわば川柳塔の新戦力の台頭を象徴しているようである。

☆路郎先生の時代から川維唐津支部で活躍された新岡回天子氏に続いて若柳潮花氏が亡くなられた。喜寿と柳歴50年のお祝いをされたばかりでの急逝に、誰もが息を呑む思いをした。路郎先生以上に、踊りの好きな霞乃女史と近い潮花氏から、花道の七三の所まで女史の出迎えを受けておられるかも知れない。

☆華やかに受賞の脚光を浴びる者、しめやかに追悼の言葉を贈られる者、際立って十一月号となった。

☆月落烏啼霜滿天の風橋夜泊の詩を想起し、ついでこの間撞いて来た寒山寺の鐘声

が耳に新らしく甦ることだ。☆早くも年賀広告の時期、よろしくご協賛を。(薫)

▼十一月十二日は川柳塔社の前編集長、故清水白柳さんの祥月命日である。亡くなられたのは昭和四十五年だったから早や十四年の歳月となる。最初の出合いは「どんぐり句会」であったが、主宰されておられた玉造川柳会でも作句について多くのご指導を頂いた。

▼生前、各地の大会へ出向かれる時には必ずと云ってよくらい「鬼遊さん、どうや……」と、誘って下さった。小松、金沢、竹原、広島、出雲など一泊の旅行もよくお供をした。その頃は勤めていたのて今から私に勤めていたものども思いうるが、よくも休みのやりくりがついたものだと思える。川柳が好きだったことは確かだが、「鬼遊さん川柳を熱心にするのは、かめへんが、勤めを辞めたらあかん……」と、片町線の車中で釘を刺されたことがある。「勤めを辞めても川柳をやりたい」と思っ

たが口にはしなかった。▼白柳さんはバイブ役だと謂われるほど、他柳社との交流に積極的だった。氏が亡くなられてから私は、せめてその十分の一でもと覚えるようになったのも、その重要さを身にもって教えた下さったからだと思う。

▼父の死に際しても泣かなかった私が、白柳さんの葬儀に参列して止めどもなく涙で顔を濡らしたことが不思議に思える。棺の上に置かれた愛用のベレー帽が涙でかすんだのを今も鮮やかに見ることが出来る。(き)

☆麻雀を知らない人間の前で麻雀の話に熱中されるほど鼻白むことはない。ゴルフについても同然。だから野球のことを書くのは、ちょっと気がひけるのだが、わが熱愛する阪急ブレーブス6年ぶりの優勝に免じて今回だけはお許し願おう。

☆プロ野球も管理野球全盛サラリーマン的な選手がふえてつまらん、と往時を懐かしむ人がいる。しかしこれも時代の流れであるし、一

口に管理といつてもクールな管理もあればホットな管理もある。これが近代野球ナノダと納得するしかない。

☆そんなことよりも苦々しく思うのは近頃とみに過熱した応援のありようである。私設応援団のリーダーの指揮の下、コンパットマリーチと「かつとばせ〇〇、××倒せ」の大シブレヒコールが一回から九回まで間断なく続けられる。スタンド全体が一本の糸に操られる如く整然と大応援に酔っている情景を見ていると妙な連想だが「一億一心火の玉だ」という戦時中のスローガンを思い出した。おとなしい親子連れがいて

「おい、その子、手を叩け、声を出せ」と怒鳴られ泣き出したという話もある。☆凡てが画一的になってゆく中で野球見物くらい自由に楽しくやりたいもの。全部の球場がそうというわけではないが、応援すら管理される時代かと思うのだ。そろしい気がするのだ。

日刊

電波新聞

投稿欄案内

川柳 選者・橘高薫風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小寺正三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

投稿規定

はがき一枚に一句(一首)以内(川柳・俳句・短歌と明示すること) 投稿随時

自由課題・秀句には掲載紙贈呈

投稿先

〒五三三・大阪市北区中之島三・二・朝日新聞

ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」にて。

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ



ほうらい



TEL641-0551